

IMAINODAINI

今井野第2遺跡

AMORIJONYAMA

天下城山遺跡

一般国道10号延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006年

宮崎県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財の保護・活用につきましては日頃より深いご理解をいただき厚くお礼申し上げます。

宮崎県教育委員会では一般国道10号延岡道路建設に伴って平成14・15年度に今井野第2遺跡・天下城山遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。今井野第2遺跡からは縄文時代早期の集石遺構35基が確認され、また天下城山遺跡では中世から近世と推定される城跡に伴う遺構が確認されました。これらから、当時の人々の生活の様子的一端を解明する貴重な資料を得られたことは大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたってご協力いただいた関係各機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成18年10月

宮崎県埋蔵文化財センター
所 長 清 野 勉

例 言

- 1 本書は、一般国道10号延岡道路建設事業に伴い宮崎県教育委員会が実施した今井野第2遺跡・天下城山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は国土交通省九州地方整備局延岡工事事務所(現、国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所)の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査の期間および調査体制は第1章のとおりである。
- 4 発掘調査当初、今井野第2遺跡は吉野遺跡第3次調査として継続調査を行っていたが、吉野遺跡とは谷を挟んだ立地であることや、字名が今井野で周知の遺跡である今井野遺跡群内に含まれることなどから延岡市教育委員会と協議を行った。延岡市教育委員会で今井野遺跡群内の調査を第10次まで行っていることからこの報告書をもって、今井野第2遺跡と呼称するものとする。また、天下城山遺跡については、平成11年度に延岡市教育委員会が1次調査を行っているが、天下城跡の城域としては確定しえないことから今回の遺跡名を天下城山遺跡と呼称することとなった。
- 5 現地での実測図作成は、今井野第2遺跡は、赤崎広志・日高広人・橋本英俊・重留康宏・柳田裕三が行い、天下城山遺跡については、橋本英俊・丹俊詞・近藤協が作成した。
- 6 本書に使用した写真は、主として橋本が撮影し、空中写真については業者に委託した。
- 7 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成、実測、トレースは主として橋本が行い、一部を整理作業員の協力を得た。
- 8 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1図『延岡』を基に作成し、調査範囲図は延岡市作成の2千5百分の1図を基に作成した。天下城跡の縄張り図は延岡市教育委員会の九鬼勉氏作成のものを一部改変した。
- 9 土層断面および土器の色調表記は農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に拠った。
- 10 本書で使用した方位は、座標北および磁北である。磁北を用いた場合にのみ、『M. N.』と明記した(両遺跡が立地する宮崎県延岡市天下町付近では磁針方位西偏差6°20'である)。座標は世界測地系に拠る。レベルは海拔絶対高である。
- 11 本書では、遺構に次の略号を使用している。
SE・・・溝状遺構 SH・・・ピット SI・・・集石遺構
- 12 本書の執筆、編集は橋本が担当した。
- 13 出土遺物・その他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。
- 14 天下城山遺跡の調査区と曲輪の対照は次のとおりである。
A区・・・曲輪Ⅷ～曲輪ⅩⅢ B区・・・曲輪ⅩⅤ C区・・・曲輪Ⅲ～曲輪Ⅶ
D区・・・曲輪Ⅰ・Ⅱ
- 15 天下城跡の縄張りに関しては、国立歴史民俗博物館の千田嘉博氏に御指導賜った。

本文目次

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の立地と歴史的環境	2

第II章 今井野第2遺跡の調査

第1節 調査の経過と概要	6
第2節 基本層序	7
第3節 調査の記録	
1 縄文時代の遺構と遺物	7
集石遺構	7
縄文土器	18
石器	23
2 包含層出土の遺物	27
土師器	27
須恵器	27
第4節 今井野第2遺跡における自然化学分析	30
第5節 まとめ	34

第III章 天下城山遺跡の調査

第1節 調査の経過と概要	40
第2節 基本土層	40
第3節 縄張り図から見た天下城跡	41
第4節 中世の遺構と遺物	43
1 遺構	43
2 遺物	49
第5節 その他の時代の遺物	49
1 古墳時代の遺物	49
2 古代から中世の遺物	51
3 土製品	52
4 銭貨	53
5 石器	53
6 玉類	53
第6節 まとめ	56

挿 図 目 次

第 1 図	今井野第2遺跡および天下城山遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第 2 図	今井野第2遺跡周辺地形図	3
第 3 図	天下城山遺跡周辺地形図(1/4,000)	4

今井野第2遺跡

第 1 図	今井野第2遺跡グリッド配置図(1/400)	6
第 2 図	今井野第2遺跡基本土層図	7
第 3 図	今井野第2遺跡遺構分布図(1/200)	9
第 4 図	今井野第2遺跡集石遺構実測図(1)(1/30)	10
第 5 図	今井野第2遺跡集石遺構実測図(2)(1/30)	11
第 6 図	今井野第2遺跡集石遺構実測図(3)(1/30)	12
第 7 図	今井野第2遺跡集石遺構実測図(4)(1/30)	13
第 8 図	今井野第2遺跡集石遺構実測図(5)(1/30)	14
第 9 図	今井野第2遺跡集石遺構実測図(6)(1/30)	15
第10図	今井野第2遺跡集石遺構実測図(7)(1/30)	16
第11図	今井野第2遺跡出土遺物実測図(1)(1/3)	19
第12図	今井野第2遺跡出土遺物実測図(2)(1/3)	20
第13図	今井野第2遺跡出土遺物実測図(3)(1/3)	21
第14図	今井野第2遺跡出土遺物実測図(4)(1/3)	22
第15図	今井野第2遺跡出土遺物実測図(5)(2/3)	24
第16図	今井野第2遺跡出土遺物実測図(6)(2/3)	25
第17図	今井野第2遺跡出土遺物実測図(7)(2/3)	26
第18図	今井野第2遺跡出土遺物実測図(8)(1/3)	27
第19図	今井野第2遺跡集石遺構分布図(1/300)	34

天下城山遺跡

第 1 図	基本土層模式図	40
第 2 図	天下城跡と周辺の城館跡(1/50,000)	41
第 3 図	天下城跡縄張り図(1/2,000)	42
第 4 図	曲輪I-VI平面図(1/750)	44
第 5 図	曲輪I-VI断面図(1/300)	44
第 6 図	曲輪縁辺土層断面図(1/40)	45
第 7 図	曲輪II遺構配置図・1号溝状遺構断面図(1/200)	46
第 8 図	曲輪II出土遺物分布図(1/200)	47
第 9 図	天下城山遺跡曲輪XV遺構配置図(1/200)	48
第10図	石組遺構実測図(1/30)	48
第11図	天下城山遺跡出土遺物実測図(1)(1/3)	49
第12図	天下城山遺跡出土遺物実測図(2)(1/3)	50
第13図	天下城山遺跡出土遺物実測図(3)(1/3)	50

第14図	天下城山遺跡出土遺物実測図(4)(1/3)	51
第15図	天下城山遺跡出土遺物実測図(5)(1/3)	52
第16図	天下城山遺跡出土遺物実測図(6)(1/3)	52
第17図	天下城山遺跡出土銭貨拓影(1/1)	53
第18図	天下城山遺跡出土遺物実測図(7)(1/2、62は1/3)	53

表 目 次

今井野第2遺跡

第1表	今井野第2遺跡集石遺構計測表	17
第2表	今井野第2遺跡出土土器観察表(1)	28
第3表	今井野第2遺跡出土土器観察表(2)	29
第4表	今井野第2遺跡出土石器計測表	29

天下城山遺跡

第1表	天下城山遺跡出土遺物観察表(1)	54
第2表	天下城山遺跡出土遺物観察表(2)	55
第3表	天下城山遺跡出土土錘計測表	55
第4表	天下城山遺跡出土銭貨観察表	55
第5表	天下城山遺跡出土石器・玉類計測表	55

図 版 目 次

今井野第2遺跡

図版 I	今井野第2遺跡調査区全景	35
	今井野第2遺跡(縄文早期遺構面)	
図版 II	今井野第2遺跡東壁土層断面	36
	散礫検出状況(南より)	
	集石遺構検出作業風景	
	13号集石遺構(南より)	
	13号集石遺構敷石検出状況(西より)	
	13号集石遺構完掘状況(西より)	
	31・33・35号集石遺構検出状況(南より)	
	31・33・35号集石遺構完掘状況(南より)	
図版 III	出土縄文土器(I類)	37
	出土縄文土器(II類)	
	出土縄文土器(I・II類胴部)	
	出土縄文土器(III・IV・VII類)	
	出土縄文土器(V・VI類)	

図版IV	出土縄文土器(VIII類) ……………	38
	出土土師器・須恵器(外面)	
	出土土師器・須恵器(内面)	
	出土石器1(石鏃・剥片・石核)	
	出土石器2(礫器・剥片)	

天下城山遺跡

図版I	天下城山遺跡遠景(北より) ……………	57
	天下城山遺跡調査区全景(調査前)	
図版II	天下城跡主郭部曲輪I(北西より) ……………	58
	天下城跡主郭部曲輪I(手前は南方古墳40号墳)	
	主郭部曲輪Iより西階城を望む	
	曲輪II～V(南より、奥は城ヶ鼻)	
	虎口①へ続く里道	
	堀切②地点里道	
	虎口①(西より)	
	天下城跡西側、黒越寺推定地	
図版III	天下城山遺跡調査区全景(北より) ……………	59
	天下城山遺跡調査区全景(西より)	
図版IV	1号溝状遺構土層断面(西より) ……………	60
	1号溝状遺構遺物出土状況(南より)	
	1号溝状遺構完掘状況①(南より)	
	1号溝状遺構完掘状況②(西より)	
	曲輪II、虎口状の遺構(南より)	
	曲輪IIから曲輪Iをみる(西より)	
	曲輪XIVピット群検出状況(北西より)	
	曲輪XIV石組遺構(北より)	
図版V	出土陶磁器(外面) ……………	61
	出土陶磁器(内面)	
	出土土師器(甕)	
	出土土師器(甕・壺)	
	出土土師器(壺)	
	出土土師器(底部)	
図版VI	出土高坏 ……………	62
	出土土師器(坏蓋・坏・皿)	
	出土須恵器(坏蓋・坏)	
	出土土錘	
	出土錢貨	
	出土石器・玉類(砥石・火打石・管玉)	

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

今井野第2遺跡は、平成12年度から発掘調査を継続している吉野遺跡と谷を挟んだ北側にある。平成13年度に実施した確認調査においても、縄文早期土器や集石を構成する礫が検出されたため、平成14年6月11日から同年8月13日にかけて調査を行った。調査面積は870㎡である。

天下城山遺跡は、城域が県道天下インター線と一般国道10号延岡道路の工事箇所の両方に及んでいたため、国土交通省延岡工事事務所(現、延岡河川国道事務所)、延岡土木事務所、文化課(現、文化財課)の3者により協議を行った。その結果、県の工事箇所が急傾斜部に当たり遺構の存在が薄いと考えられたことから、窓口を国土交通省に一本化することとなり、平成14年度は、航空測量と主郭部分に建立されていた忠魂碑の撤去や進入路の開削に伴う確認調査(平成14年12月25日～平成15年3月27日)を行い、平成15年度に発掘調査(平成15年5月8日～9月11日)を実施した。調査面積は、18,000㎡である。

第2節 調査の組織

今井野第2遺跡と天下城山遺跡の調査組織は次のとおりである。

平成14年度(今井野第2遺跡・天下城山遺跡)

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	米良 弘康
副所長兼総務課長	大藪 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課総務係長	亀井 維子
調査第二課調査第四係長	永友 良典
調査第二課調査第四係	
主任主事(調査担当)	橋本 英俊
嘱託(今井野遺跡調査担当)	柳田 裕三

平成15年度(天下城山遺跡)

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	米良 弘康
副所長兼総務課長	大藪 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川 恵史
調査第二課調査第四係長	近藤 協
調査第二課調査第四係	
主任主事(調査担当)	橋本 英俊
嘱託(同上)	丹 俊詞

平成16・17年度(整理作業および報告書作成)

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	宮園 淳一
副所長兼総務課長	大藪 和博(16年度)
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課長	宮越 尊(17年度)
総務課主幹兼総務係長	石川 恵史
調査第二課調査第四係長	近藤 協
調査第二課調査第四係	
主任主事(整理作業担当)	橋本 英俊

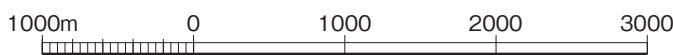
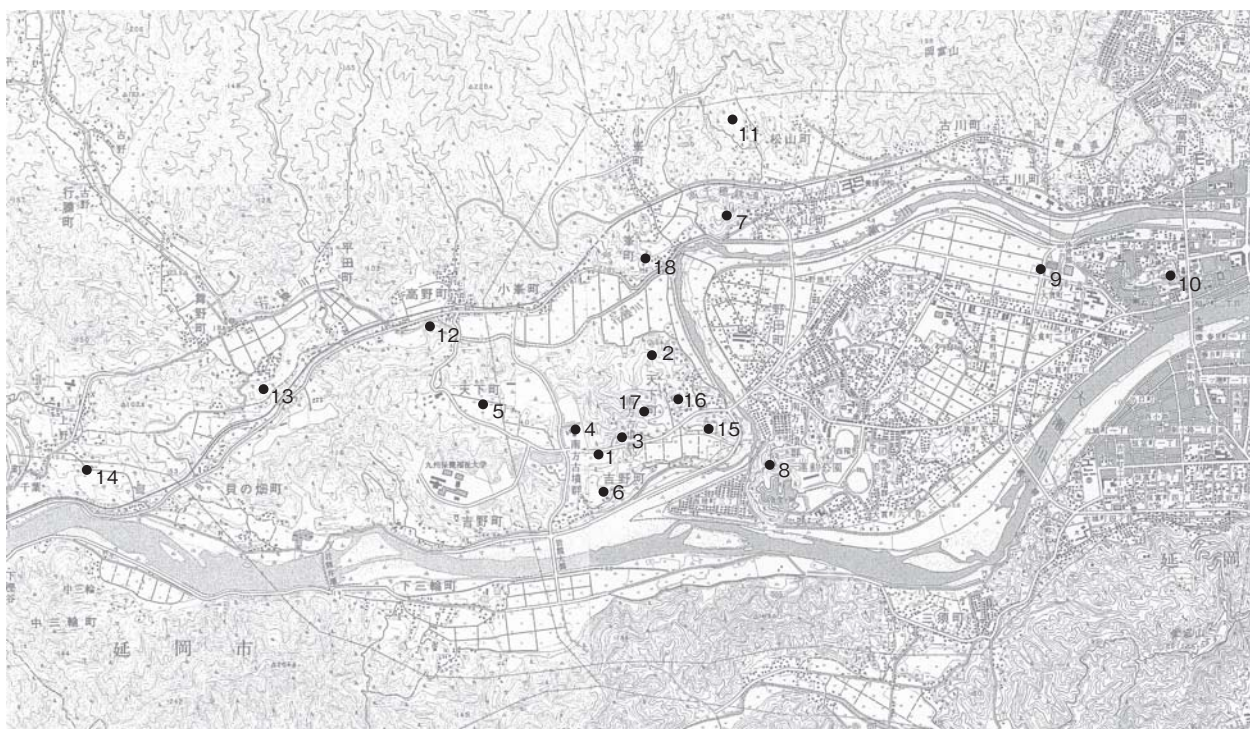
平成18年度(報告書作成)

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	清野 勉
副所長	加藤 悟郎
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課長	宮越 尊
総務課主幹	高山 正信
調査第二課調査第四担当主幹	近藤 協
調査第二課調査第四担当	
主査(報告書担当)	橋本 英俊

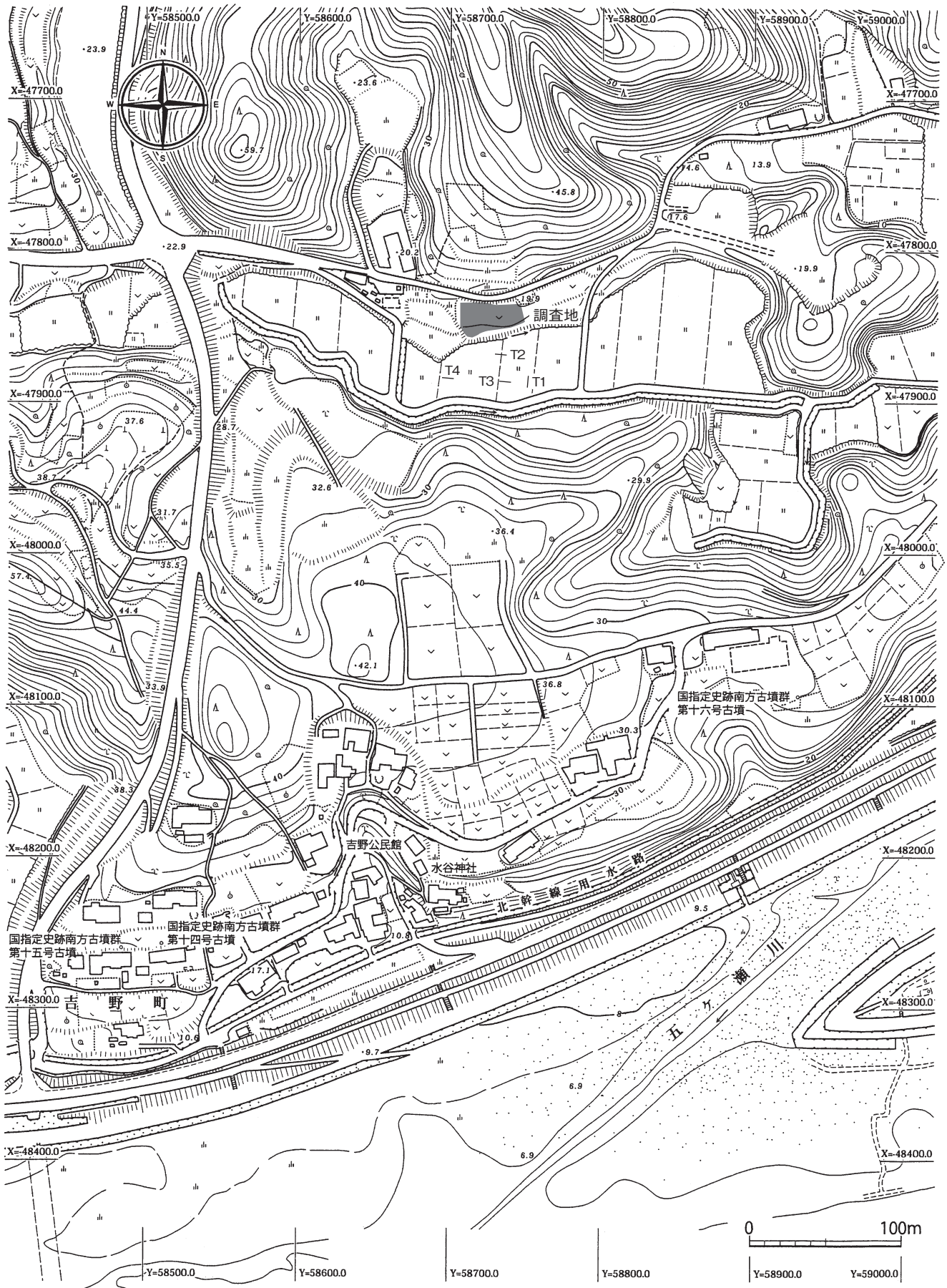
第3節 遺跡の立地と歴史的環境

今井野第2遺跡と天下城山遺跡はともに延岡市天下町に位置する。今井野第2遺跡は周知の遺跡である今井野遺跡群に含まれ、周辺は延岡市教育委員会により現在までに10回の調査が行われている。遺跡群は、旧石器から中世にかけて営まれている。旧石器時代ではナイフ形石器、細石核、第9次の調査では始良丹沢火山灰(AT)下位からの石器群が確認され、古墳時代後期の住居や中世の溝状遺構なども検出されている。遺跡は南に延びる丘陵の裾部にあたり標高は約17mである。現在は市道高野天下線によって分断されているが同じ丘陵上に縄文土器を出土した今井野遺跡(第3・4次)(第1図3・4)、西側丘陵上に早期の集石遺構や早水台～田村式併行の土器を出土した今井野遺跡(第1次)(第1図5)が立地している。また、谷を挟んで約200m南、比高差約20mに当遺跡と時期が近接する集石遺構や炉穴が検出された吉野遺跡が立地するなど、縄文時代の遺跡が多くみられる場所である。遺跡の北西約1.3kmには旧石器時代を代表する遺跡である赤木遺跡(第1図13)があり、北西0.8kmに高野貝塚が位置している。古墳時代では東西に国指定南方古墳群の天下支群が点在している。天下城山遺跡は字雨下中須・字筒井・字中ノ坪・字井の迫の範囲に所在し、主郭と推定される曲輪の標高は約53mである。最高点の主郭から放射状に曲輪を配する構造をとっており、全体としては南北方向に長い形状が見て取れる。北から東側は急崖をなし、東は比高差約50mに五ヶ瀬川を見下ろすことができる。歴史時代では南東1.2kmに西階城跡(第1図8)、北東約1kmに土持氏の居城であった松尾城(第1図7)が位置している。

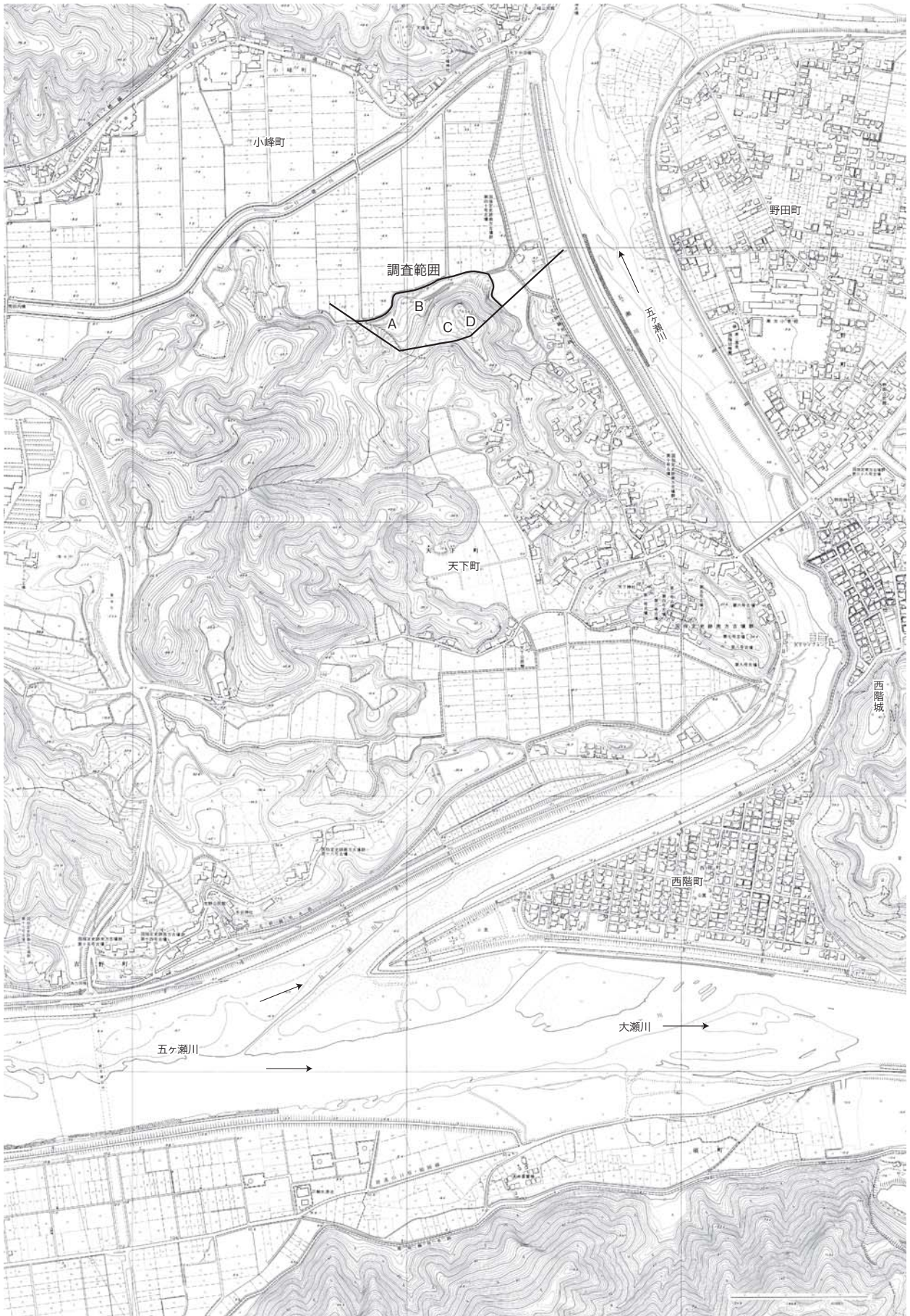


- | | | | | | |
|-----------|----------|--------------|--------------|---------|---------|
| 1 今井野第2遺跡 | 2 天下城山遺跡 | 3 今井野遺跡(第3次) | 4 今井野遺跡(第4次) | 5 今井野遺跡 | 6 土持卒塔婆 |
| 7 松尾城跡 | 8 西階城跡 | 9 中ノ須遺跡 | 10 延岡城跡 | 11 野門遺跡 | 12 高野貝塚 |
| 13 赤木遺跡 | 14 黒土田遺跡 | 15 大日寺跡 | 16 円福寺 | 17 黒越寺 | 18 城ヶ鼻 |

第1図 今井野第2遺跡および天下城山遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 今井野第2遺跡周辺地形図



第3図 天下城山遺跡周辺地形図(1/4,000)

IMAINODAINI

今井野第2遺跡

第II章 今井野第2遺跡の調査

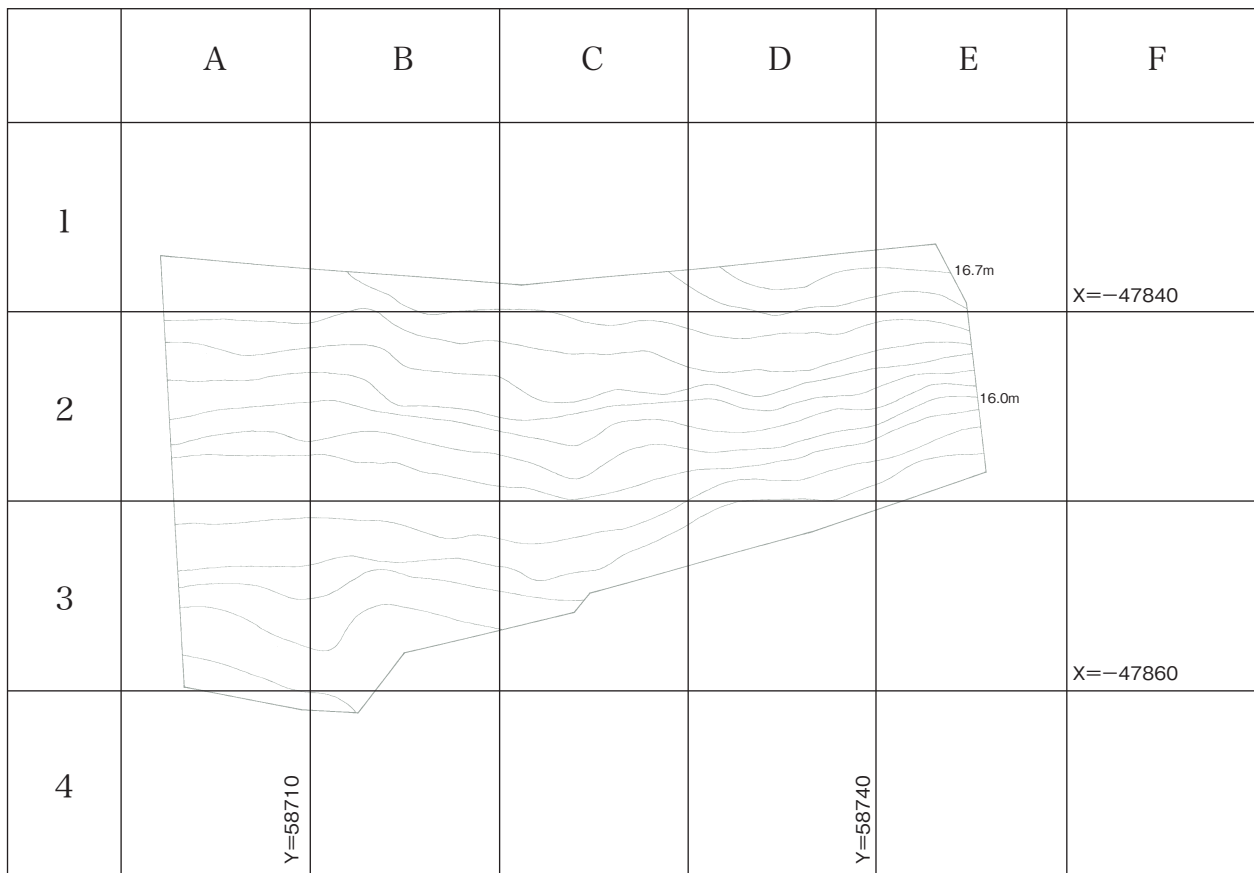
第1節 調査の経過と概要(第1図)

今井野第2遺跡の調査対象区は、南に延びる丘陵の裾部と沖積低地部をあわせて2,000㎡である。このうち、沖積低地は現在水田として利用されており、南側の吉野遺跡との間に存在する谷地形の中に位置している。低地部分は人力によるトレンチ調査を行った結果、水田土壌と推定される堆積や木片が確認された。そのため、プラントオパール分析および放射性炭素年代測定を行った(第4節)。分析の結果、古代にさかのぼる可能性がある水田遺構が想定された。このことから、重機により周辺の掘削を行ったが基盤整備に伴うと考えられる造成が予想以上に広範囲に及んでおり水田遺構としての広がりをとらえることが困難であることが判明した。そのため、調査の主体を丘陵部へと移すこととした。

丘陵部は標高約170mで南に緩やかに傾斜している。現在、市道高野天下線により分断されているが、今井野遺跡(3次)の所在する北側の丘陵に続いていたものと思われる。調査面積は870㎡である。重機により表土を除去した結果、調査区北東側は建物等の攪乱により第IV層までを消失していた。III層直上より作業員により掘り下げを行ったところ、遺構は丘陵部の中央、南向き斜面の中でも比較的等高線のゆるやかなC2グリッド、C3グリッドを中心に確認された。検出面は第IV層で、上面に礫が広範囲に散在し、これを除去した後、第IV層～第V層にかけて散礫および集石遺構35基が確認された。

調査区東南側についてはやや傾斜がきつく、遺構および遺物の空白地帯であった。

最終的に調査区内にトレンチを設定し深掘りを行ったが、旧石器時代の遺構や遺物は確認されなかった。本調査は、平成14年6月11日～平成14年8月13日にかけて行った。



第1図 今井野第2遺跡グリッド配置図(1/400)

第2節 基本層序(第2図)

遺跡の基本層序を第2図に示した。調査対象地は沖積低地部と丘陵部では堆積状況が大きく異なる。低地部では1層が現水田の表土で2層が基盤整備に伴うと思われる造成土層である。3層から5層までが粘性を帯びた土壌であり、4層で最も多くプラントオパールが確認された。一方、丘陵上の調査区は、北から南に向かって傾斜しており旧地形もほぼ同様の傾斜を有している。今回の調査で鍵層となるのは第Ⅲ層のアカホヤ火山灰である。ここでは基本層序と堆積状況について記す。第Ⅰ層は黒褐色の表土である。第Ⅱ層は褐色土で厚さは20cm～40cm、縄文晩期土器や陶磁器を包含している。第Ⅲ層はアカホヤ火山灰層である。残存状況は良好ではなく部分的な堆積にとどまる。第Ⅳ層は黒褐色土で層厚は約15cm～50cmであり、堆積は斜面にそって南裾部に向かって厚くなる。縄文早期の包含層である。第Ⅴ層は暗褐色土で同様に南側に厚い堆積がみられ、色調がわずかに相違するが土質はⅣ層に似る。第Ⅵ層は明褐色粘質土である。

沖積低地部		丘陵部	
1	表土 (シルト質)	I	表土(7.5YR4/1)
2	造成土 (多量の礫を含む)	II	褐色土(7.5YR4/3) 軟質でもろくしまりがない。
3	黄褐色粘質土	III	アカホヤ火山灰層(10YR8/6) 堆積は不安定でブロック状に残存する。
4	暗灰色粘質土	IV	黒褐色土(10YR3/2) 軟質で礫を多く含み焼土粒や炭化物を含む。
5	灰色粘質土	V	暗褐色土(10YR3/3) 軟質でやや粘性を帯びる。
6	砂礫層	VI	明褐色粘質土(10YR6/6) やや粘性を帯びしまりがある。

第2図 今井野第2遺跡基本土層図

第3節 調査の記録

1 縄文時代の遺構と遺物

Ⅳ層から縄文時代早期に属する集石遺構が35基検出された。そのうち明瞭な敷石を伴うものは6基のみであった。礫の構成は砂岩を主体とするのに対して敷石には扁平な凝灰岩の使用がみられた。凝灰岩を集石内に有するのは35基中31基を数える。以下の分類基準に従って記述を行う。個々の集石遺構の詳細については計測表(第1表)を参照されたい。

集石遺構

- I 構成礫の密集度が低い
- II 構成礫の密集度が高い

- 1 掘り込みをもたない
- 2 掘り込みをもつ

- A 敷石をもたない
- B 敷石をもつ

I-2-A

このタイプはSI5、6、9、12、17、18、20、21、23、25、27、29、30、34の14基である。すべて凝灰岩が含まれている。SI17には北東側に扁平な板状の凝灰岩が掘り込みにそって斜めに配されている箇所が確認された。SI23、25は敷石と考えられる扁平な凝灰岩のみで構成されていた。

I-2-B

SI2はIV層中位で検出され、II-2-AタイプのSI1に隣接している。赤化した砂岩で構成され、敷石は凝灰岩である。掘り込みの上面はこぶし大の円礫を主体とし中位から下位にかけては破碎礫が多数を占める。

II-1-A

SI32が1基である。35基中、この集石遺構のみ掘り込みをもたない。

II-2-A

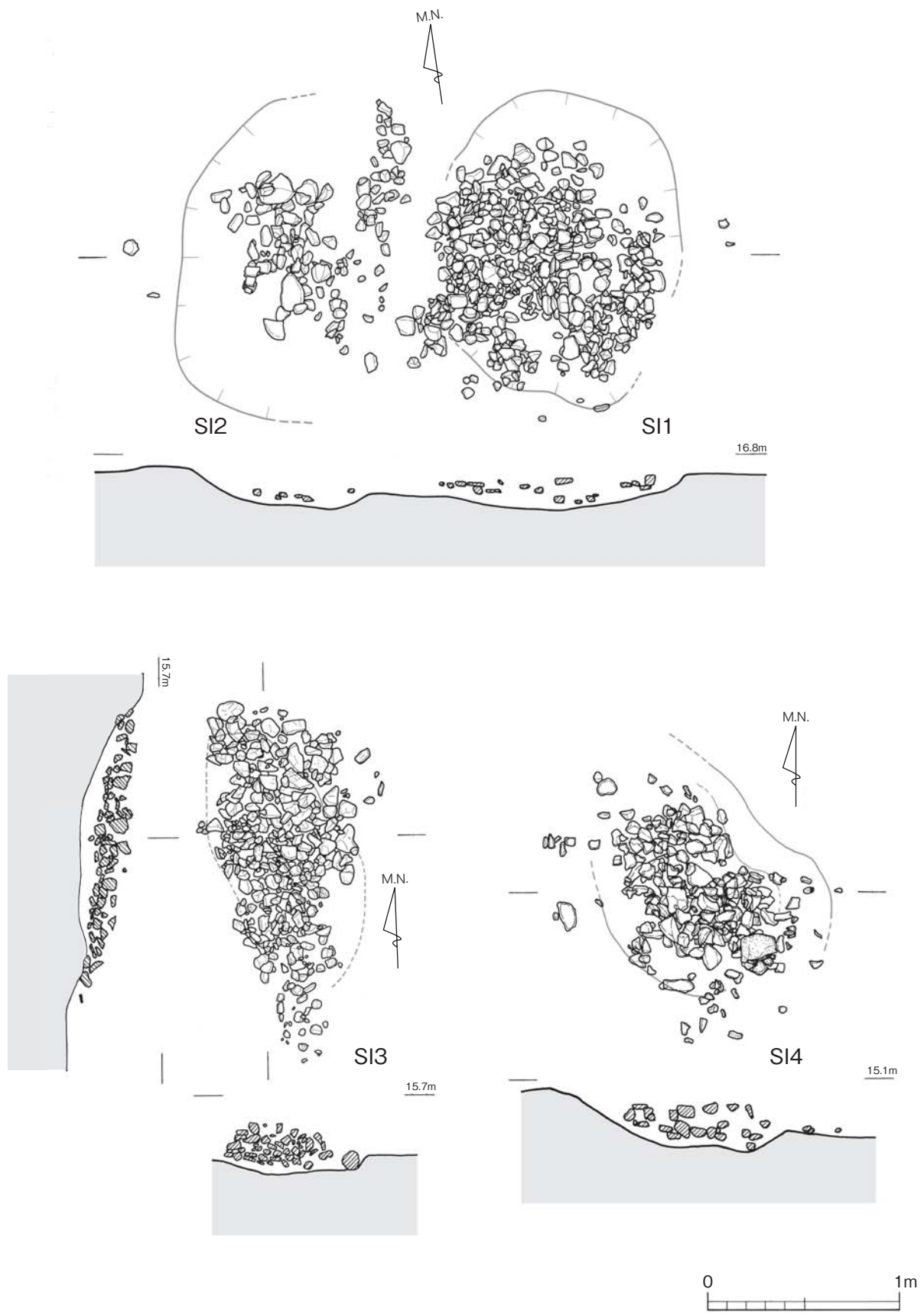
SI1、3、8、11、14～16、19、22、24、28、31、33、35の14基がこのタイプである。隣接するSI31、33を除き、掘り込みの深い集石遺構である。SI11は533個の礫からなり重量で55.2kgを計る。凝灰岩の敷石を除き赤化した破碎礫で構成されている。SI15はこぶし大の砂岩で構成され、埋土の中位から下位にかけて炭化物が多量に確認され、敷石の周囲には焼土の広がりがみられる。SI24には遺構の南西から東側にかけて礫の空白部分がみられる。SI28の中央に深さ10cmを計る土坑状の掘り込みが確認された。

II-2-B

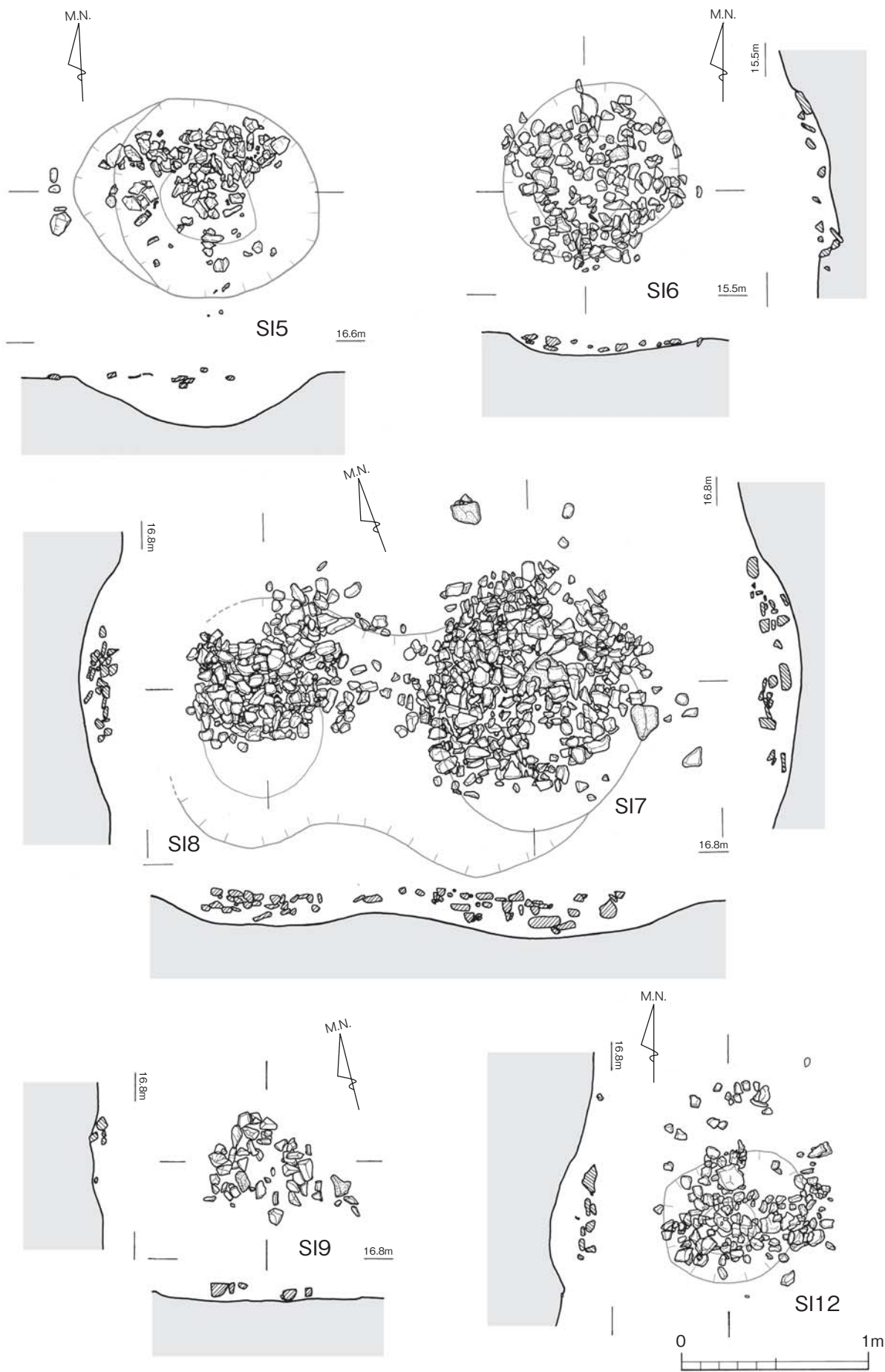
このタイプは、SI4、7、10、13、26である。SI4は、著しく赤化した破碎礫で構成される。SI10は底面にレベル差をもって敷石が確認され、2基の切り合いの可能性も考えられる。



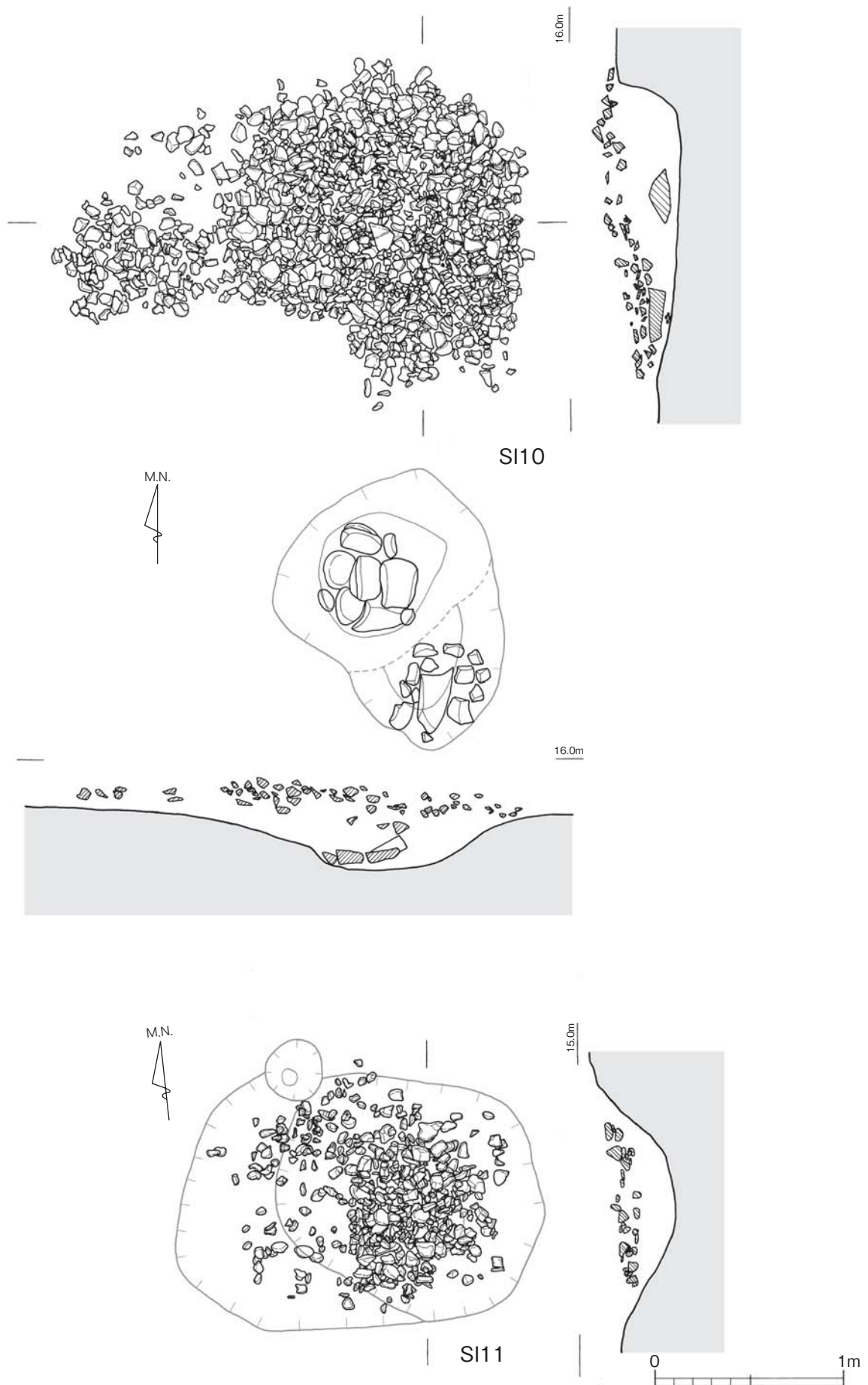
第3図 今井野第2遺跡遺構分布図(1/200)



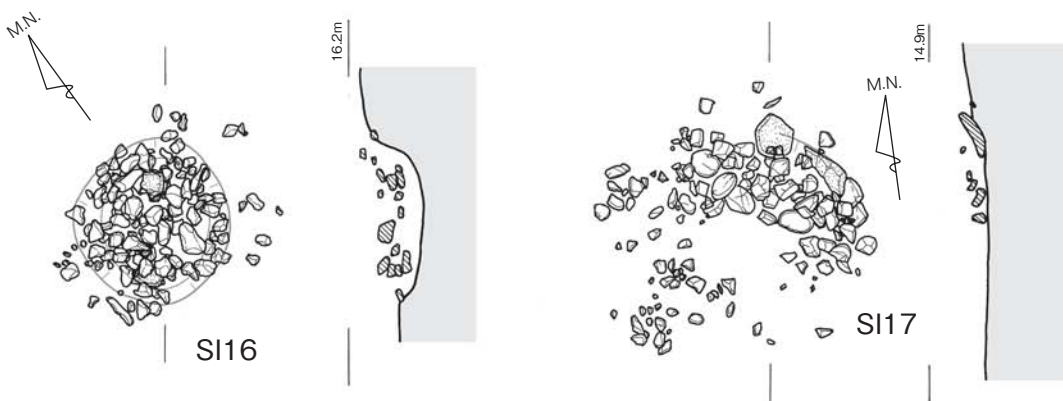
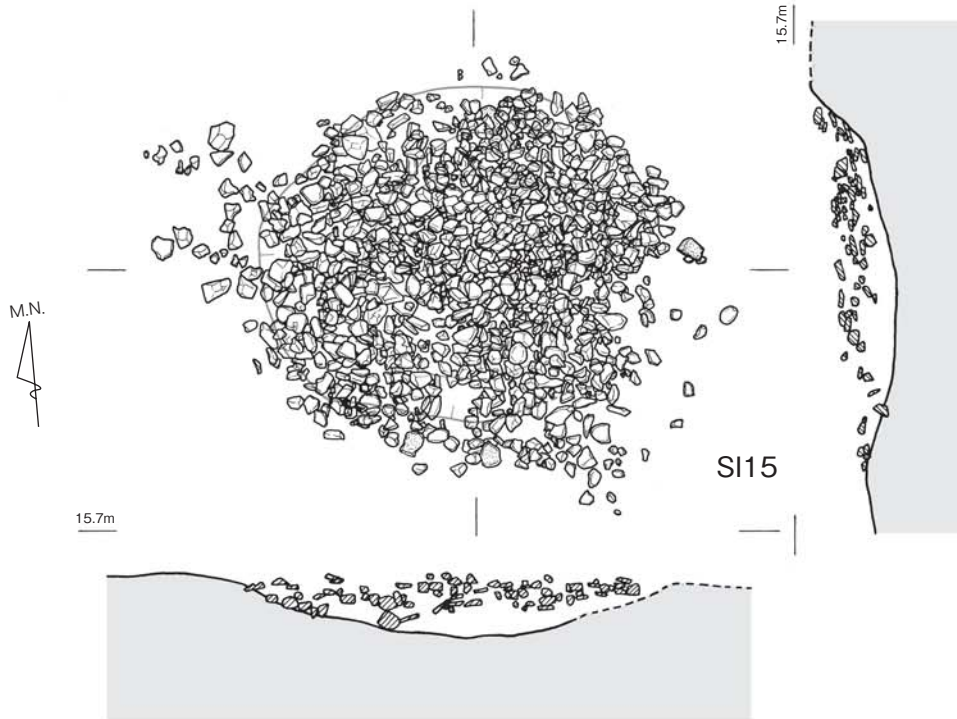
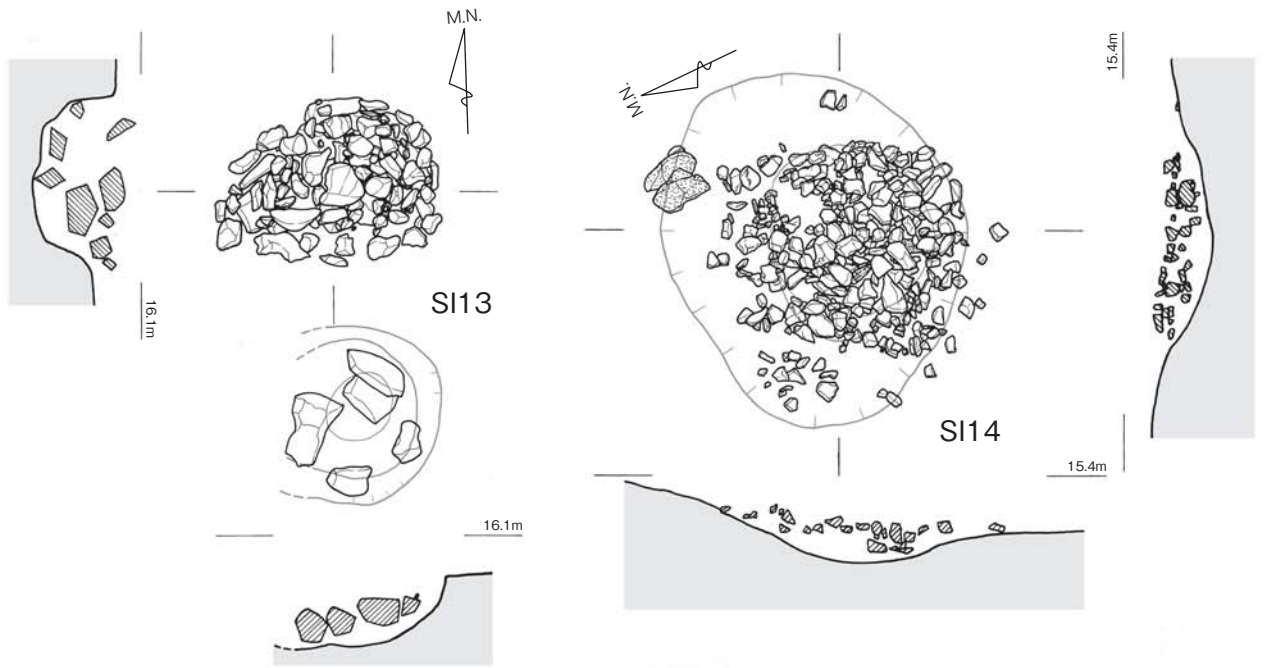
第4図 今井野第2遺跡集石遺構実測図(1)(1/30)



第5図 今井野第2遺跡集石遺構実測図(2) (1/30)

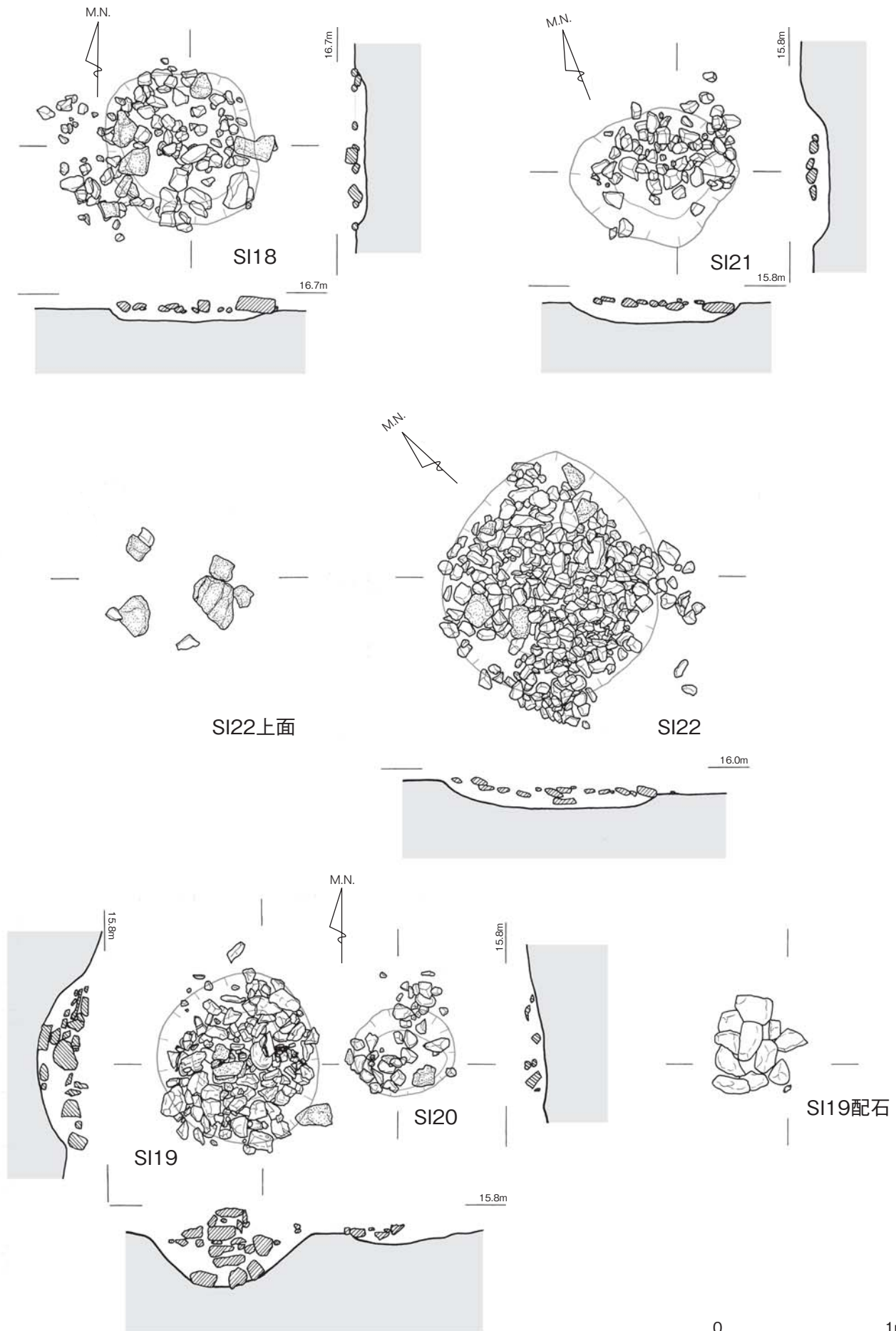


第6図 今井野第2遺跡集石遺構実測図(3) (1/30)



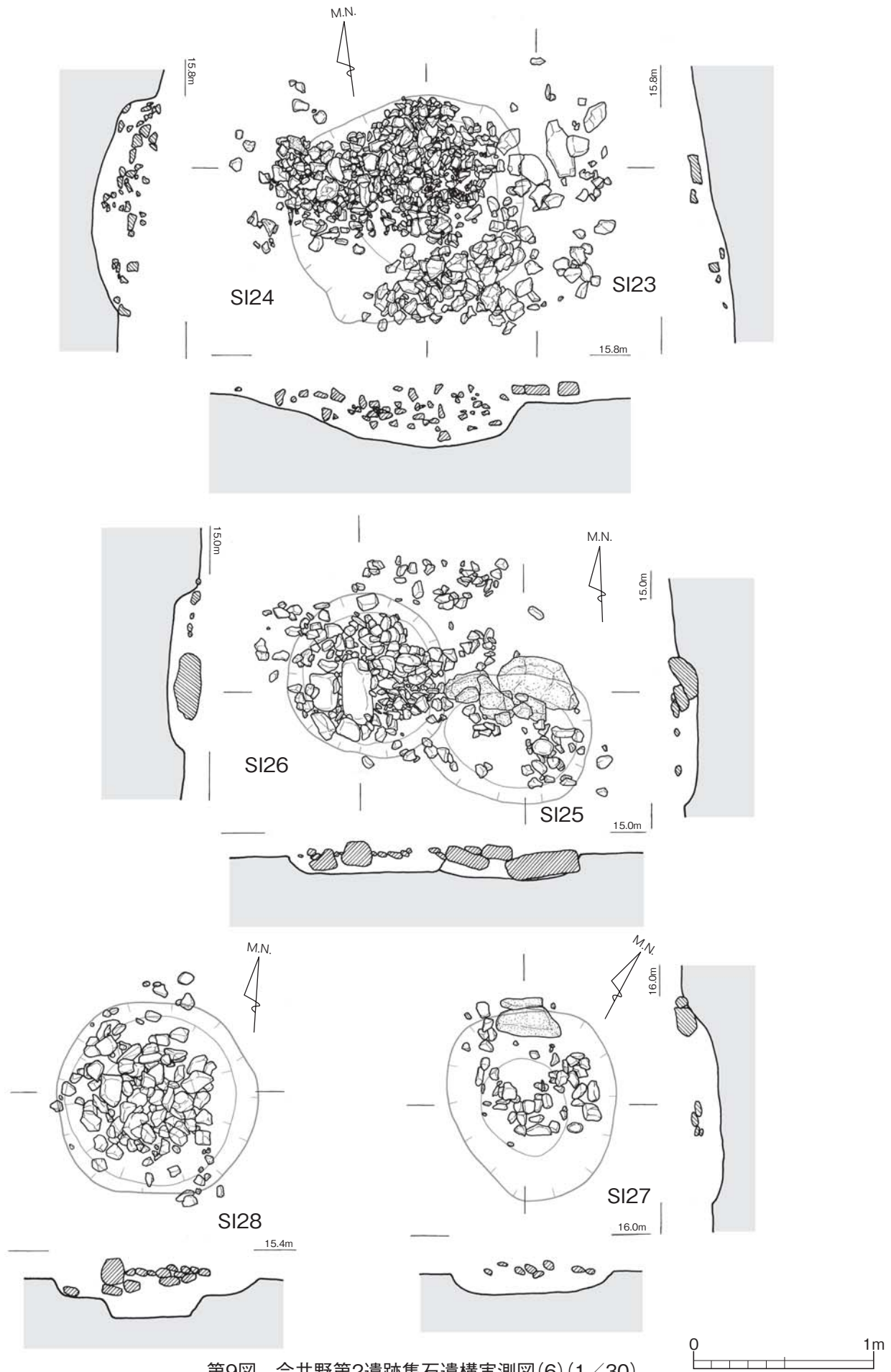
第7図 今井野第2遺跡集石遺構実測図(4) (1/30)



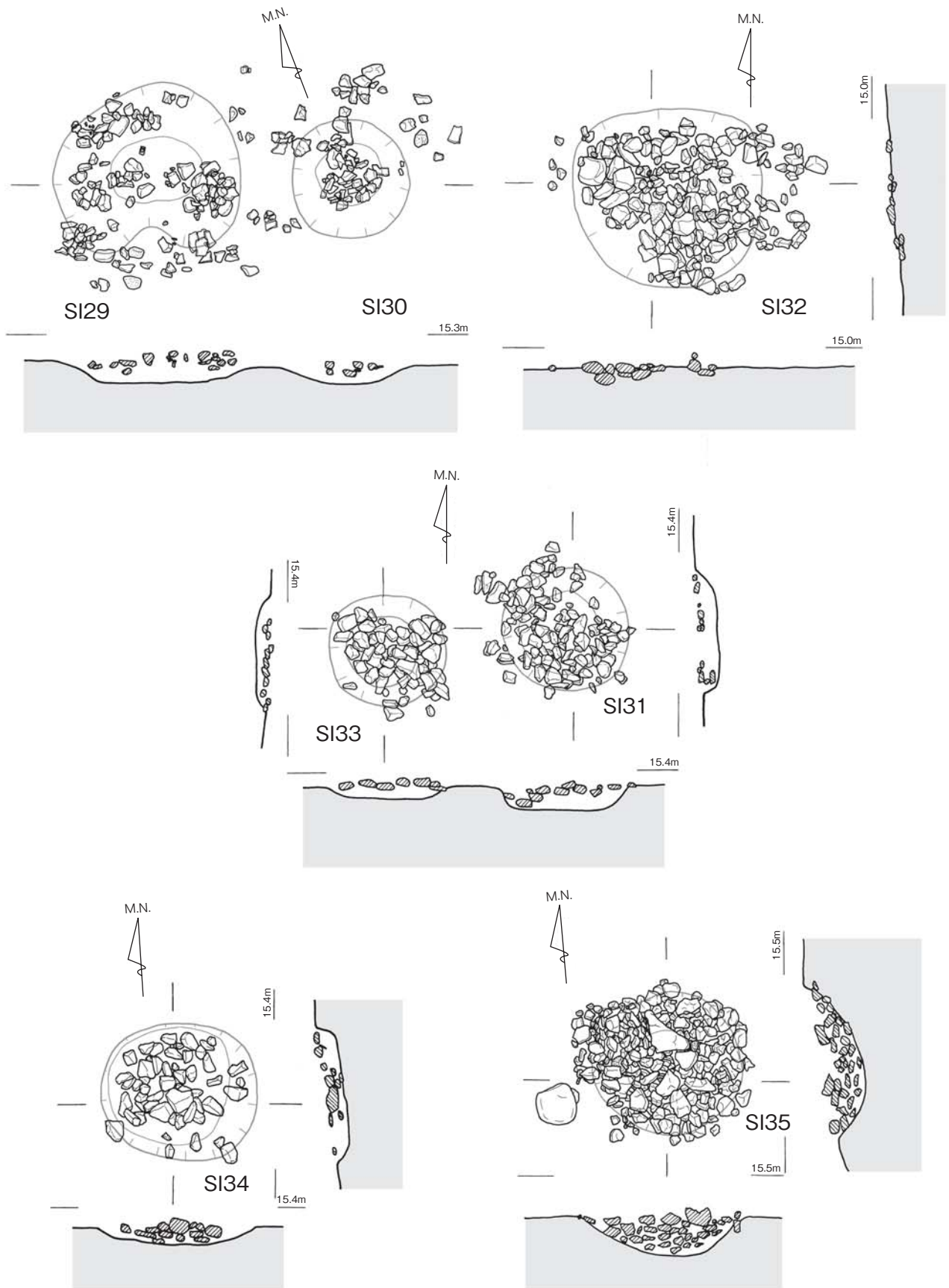


第8図 今井野第2遺跡集石遺構実測図(5) (1/30)





第9図 今井野第2遺跡集石遺構実測図(6) (1/30)



第10図 今井野第2遺跡集石遺構実測図(7)(1/30)



第1表 今井野第2遺跡集石遺構計測表

遺構番号	類型	礫総個数 (計測個数)	礫総重量 (kg)	礫の 密度	掘り込み の有無	掘り込み の深さ	配石 の有無	凝灰岩 の有無	炭化物 の有無	備考
SI1	II-2-B	842	140	密	有	浅い	×	○	○	*ほとんどの礫が赤変著しい。 *0.2~1cm大の炭化物を少量含む *すべて破砕礫 *阿蘇溶結凝灰岩 4kg、砂岩 116kg、花崗岩類 2kg、その他(頁岩類・ 流紋岩・緑色岩類・ホルンフェルス・チャートなど) 18kg
SI2	I-2-B	113	20	疎	有	浅い	○	○	○	*配石は扁平な凝灰岩で、SI1と切り合う。配石は頁岩系のもの *阿蘇溶結凝灰岩 0.2kg、花崗岩類 12.5kg、その他 7.6kg
SI3	II-2-B	540	80	密	有	浅い	×	○	○	*炭化物を少量含む。 *土器出土 *阿蘇溶結凝灰岩 1kg、砂岩 45kg、花崗岩類 7kg、その他 27kg
SI4	II-2-B			密	有	やや深い	○	○	○	*石材の大半は砂岩。 *赤変が著しく破砕しているものが多い。 *埋土の下位から炭化物が多量に出土。 *チャート1点 *配石は凝灰岩 *攪乱により上部を削平
SI5	I-2-B	142	21	疎	有	深い	×	○	○	*埋土の中位から上位にかけて多量の炭化物。 *凝灰岩の敷石 *阿蘇溶結凝灰岩 0.5kg、砂岩 10.5kg、花崗岩類 2.9kg、その他 7.2kg
SI6	I-2-B	201	30	疎	有	やや深い	×	○	○	*凝灰岩の敷石 *阿蘇溶結凝灰岩 1kg、砂岩 18kg、花崗岩類 18kg、その他 9kg
SI7	II-2-B	394	43	密	有	浅い	○	○	×	*凝灰岩の敷石*浅い掘り込み *SI8に隣接 *阿蘇溶結凝灰岩 1kg、砂岩 24kg、花崗岩類 8kg、その他 10kg
SI8	II-2-A			密	有	浅い	×	×	×	*浅い掘り込み *SI7に隣接
SI9	I-2-B			疎	無	—	×	○	×	*凝灰岩あり
SI10	II-2-B	1880	292	密	有	深い	○	○	○	*凝灰岩の配石 *2基の切り合いか *阿蘇溶結凝灰岩 6kg、砂岩 140kg、花崗岩類 39kg、その他 107kg
SI11	II-2-B	287	26.1	密	有	深い	×	○	○	*炭化物小片 *礫は焼けているが一部焼けていないものもある。 *阿蘇溶結凝灰岩 0.1kg、砂岩 14kg、その他 12kg
SI12	I-2-B	252	28	疎	有	やや深い	×	○	○	*土器出土 *阿蘇溶結凝灰岩 5kg、砂岩 16kg、花崗岩類 2kg、その他 5kg
SI13	II-2-B	196	90	密	有	深い	○	○	○	*埋土の中位から上位にかけて多量の炭化物。 *凝灰岩の敷石 *阿蘇溶結凝灰岩 19kg、砂岩 47kg、花崗岩類 6kg、その他 18kg
SI14	II-2-B	430	43	密	有	やや深い	×	○	○	*凝灰岩の敷石 *1mm大の炭化物が多量に含まれる。 *凝灰岩の板状の石を壁面に立てたような箇所あり *阿蘇溶結凝灰岩 4kg、砂岩 19kg、花崗岩類 4kg、その他 16kg
SI15	II-2-B	1034	163	密	有	深い	×	○	○	*礫は中礫が多く砂岩が大半を占める。 *埋土の下位から中位にかけて炭化物が多量に含まれる。さらに埋土下 位より焼土、1mm以下の炭化物・小礫。 *赤化が著しい *約20cmの炭化木材出土 *阿蘇溶結凝灰岩 7kg、砂岩 71kg、花崗岩類 12kg、その他 73kg
SI16	II-2-B	176	21	密	有	やや深い	×	○	○	*配石はないが、板状の凝灰岩あり *少量の炭化物を含む *阿蘇溶結凝灰岩 1kg、砂岩 11kg、花崗岩類 3kg、その他 6kg
SI17	I-2-B	145	27	疎	有?	浅い?	×	○	○	*集石遺構の北東側で板状の凝灰岩が掘り込みに沿って斜めに配されて いる箇所がある。 *礫の大部分は赤化している。 *阿蘇溶結凝灰岩 2kg、砂岩 19kg、花崗岩類 2kg、その他 4kg
SI18	I-2-B	256	33	疎	有	浅い	×	○	○	*阿蘇溶結凝灰岩 8kg、砂岩 19kg、花崗岩類 2kg、その他 4kg
SI19	II-2-B	349	135	密	有	深い	○	○	○	*下面に炭化物の濃集する箇所あり *SI20に隣接 *阿蘇溶結凝灰岩 3kg、砂岩 47kg、花崗岩類 14kg、その他 71kg
SI20	I-2-B	29	8	疎	有	深い	×	○	○	*埋土中位に炭化物の濃集箇所あり *SI19に隣接 *阿蘇溶結凝灰岩 1kg、砂岩 6kg、その他 1kg
SI21	I-2-B	56	16	疎	有	浅い	×	○	×	*破砕礫は少ない *阿蘇溶結凝灰岩 8kg、砂岩 5kg、花崗岩類 1kg、その他 2kg
SI22	II-2-B	807	152	密	有	やや深い	×	○	×	*上面および下面に凝灰岩あり *阿蘇溶結凝灰岩 18kg、砂岩 88kg、花崗岩類 11kg、その他 35kg
SI23	I-2-B	69	10	疎	無	—	×	○	×	*凝灰岩の敷石主体で構成。 *SI24の敷石か *阿蘇溶結凝灰岩 7kg、砂岩 2kg、その他 1kg
SI24	II-2-B	757	83	密	有	深い	×	○	○	*中央部から西側にかけて炭化物を含む。 *南西側から東側に空白部あり *使用後の廃棄か *阿蘇溶結凝灰岩 3kg、砂岩 43kg、花崗岩類 6kg、その他 31kg
SI25	I-2-B			疎	有?	浅い	×	○	×	*凝灰岩の配石のみ。 *人頭大の凝灰岩 *SI26の配石か
SI26	II-2-A			密	有	浅い	○?	×	×	*SI25に隣接
SI27	I-2-B	137	16	疎	有	浅い	×	○	×	*埋土はしまりがない *阿蘇溶結凝灰岩 4kg、砂岩 7kg、花崗岩類 2kg、その他 3kg
SI28	II-2-B	315	60	密	有	深い	×	○	×	*中央に土坑状の掘り込み?あり *土器出土 *阿蘇溶結凝灰岩 1kg、砂岩 26kg、花崗岩類 3kg、その他 30kg
SI29	I-2-B	220	20	疎	有	浅い	×	○	○	*SI30に隣接 *土器出土 *阿蘇溶結凝灰岩 1kg、砂岩 8kg、花崗岩類 1kg、その他 10kg
SI30	I-2-B			疎	有	浅い	×	○	×	*凝灰岩あり *SI29に隣接 *土器出土
SI31	II-2-A			密	有	浅い	×	×	×	*SI33に隣接
SI32	II-2-B			密	無	—	×	○	×	*凝灰岩あり *下端崩落
SI33	II-2-A	89	20.1	密	有	浅い	×	×	×	*SI31に隣接 *阿蘇溶結凝灰岩 0.1kg、砂岩 11kg、花崗岩類 2kg、その他 7kg
SI34	I-2-B			疎	有	浅い	×	○	×	*土器・石器出土
SI35	II-2-B	383	99	密	有	深い	×	○	○	*炭化物を少量含む *阿蘇溶結凝灰岩 1kg、砂岩 68kg、花崗岩類 6kg、その他 24kg

*掘り込みの基準は、30cm以上を深い、10cm以下を浅いとした。
*礫の疎密については、相対的ではあるが本遺跡ではSI5を疎、SI7を密とした。

縄文土器

縄文時代早期に位置づけられる土器が南側に緩やかに傾斜する地形に沿って出土した。本遺跡の縄文土器を文様や施文部位に主眼をおき、Ⅷ類に分類を行った。Ⅴ期以降は晩期の土器である。なお個々の遺物の詳細については遺物観察表(第2表)を参照されたい。

I類 無文土器(第11・12図1～6、10～19)

本遺跡でもっとも多く出土がみられる類である。主にⅣ層を中心として出土しており平面上ではC2、C3グリッドを中心に分布が認められる。

1～6は無文土器の口縁部である。ナデの後指押さえが認められ他の仕上げ調整技法はみられない。1～4は1cm程度と比較的器壁が薄く、5・6は1.5cmとやや厚手である。口縁端部は面をもつ丸い形状をなし、直口する1・2・4と外反する3、内湾気味の5・6に分けられる。内外面ともナデ調整であるが指頭痕による凹凸が多い。細かな砂粒を含むものの胎土はおおむね精良である。6は1.5cm程度と器壁がやや分厚く胎土は粗い。内湾気味となり胴部が丸みをもつと考えられる。

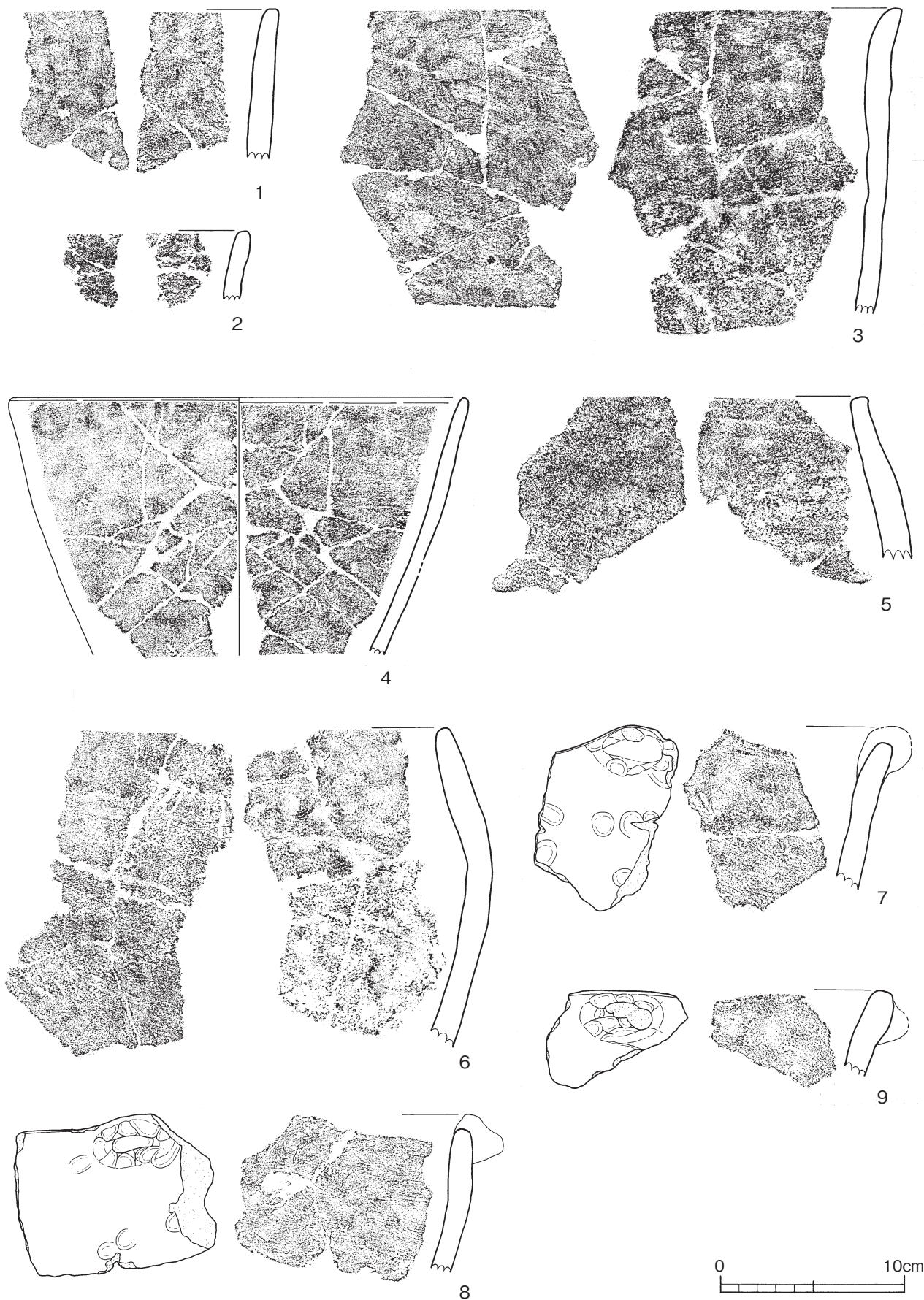
Ⅱ類 こぶ文土器(第11図7～9)

Ⅱ類土器は胎土や器壁の厚さなどⅠ類と共通する点が多く、無文土器の範疇でとらえるべきものかもしれないが、ここでは口縁部のこぶに着目し別類とした。7・8はやや薄手(器壁1cm)であり口縁上端に巻き込むようにこぶ文を貼り付けている。7はこぶ文の貼り付けにより口縁の形状がやや山形になり、口縁内面もふくらむ。楕円形で、縦2.7cm、幅3.4cm、高さ0.9cmを計る。内外面とも横ナデの後指頭痕がみられる。8は計測値、縦2.2cm、幅3.4cm、高さ1.4cmでこぶの上下をつまんだ結果、断面が台形状を呈している。9はやや厚手(器壁1.5cm)の口縁に接した外面に縦2.2cm、幅3.4cm、高さ1.4cmの端部が平坦面をもつ横長楕円形のこぶを貼り付けている。平口縁で、内外面ナデ調整で指頭による凹凸が多くみられる。7・9の口縁はやや外傾して開き、8はやや内湾する形状である。

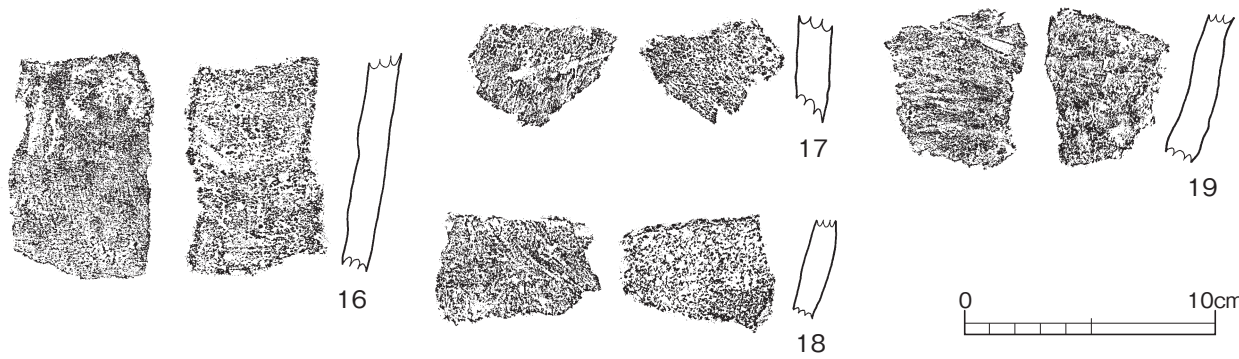
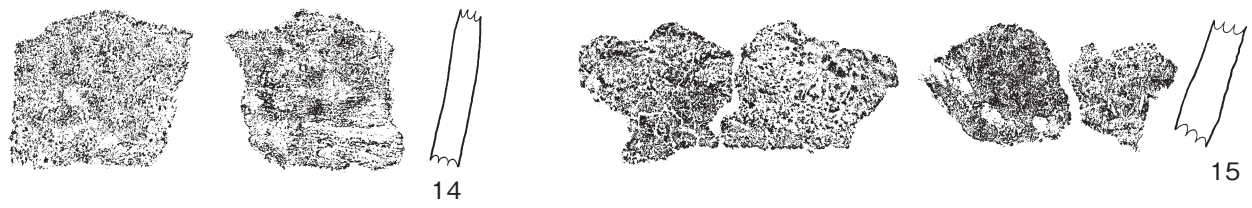
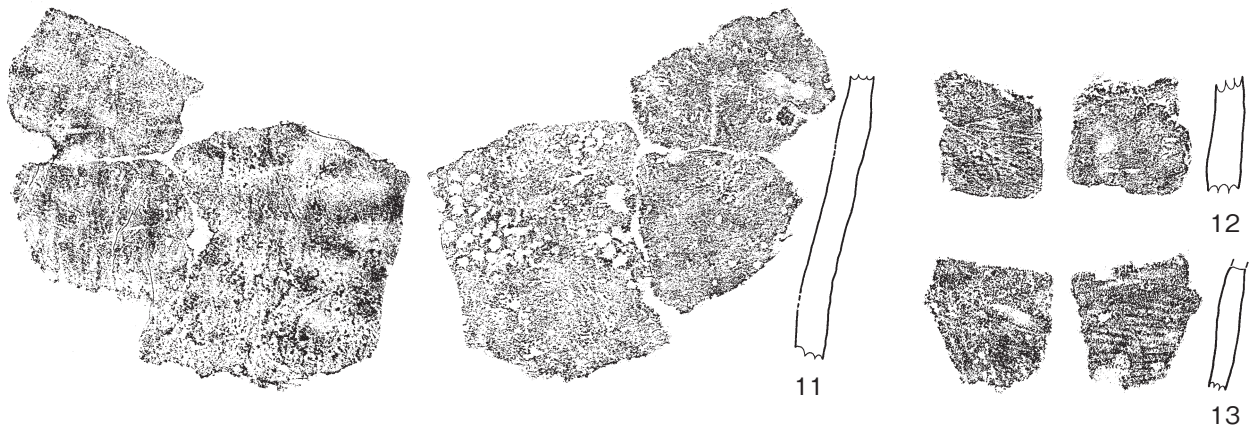
Ⅰ・Ⅱ類と考えられる胴部(10～21)を第12・13図に掲載した。10は内外面の一部にナデ調整のほかにうすい貝殻条痕がみられるが、胎土や器壁の厚さなどⅠ、Ⅱ類と共通点がみられ、5と同一個体の可能性があるためここに入れた。11・12はやや厚手で内外面ともにナデ調整の後、指頭による凹凸がみられる。13は風化が著しいが内面に条痕がみられⅢ類の可能性もある。14、19はやや薄手(1cm程度)であり、19の外面にはススの付着がみられる。内外面ともにナデ調整の後指頭痕がみられる。細かな砂粒は含まれるがおおむね胎土は精良である。15～18・20・21はやや厚手(1.5cm程度)の器壁を有し、調整は内外面ともにナデ調整である。

Ⅲ類 条痕文土器(第13図22～26)

22は、口縁部が丸みをおび内面の口縁部に斜方向の条痕、外面にナデの調整の後斜方向の条痕がみられる。23の外面は貝殻条痕、内面はナデ仕上げである。24は外面に縦方向の密な貝殻条痕が、内面はナデの後指頭痕がみられる。25は外面に不定方向にやや間隔のあいた条痕がみられる。内面は丁寧なナデ仕上げである。26の器壁は薄く外面に粗い条痕、内面は風化著しいがナデの後横方向の条痕がみられる。



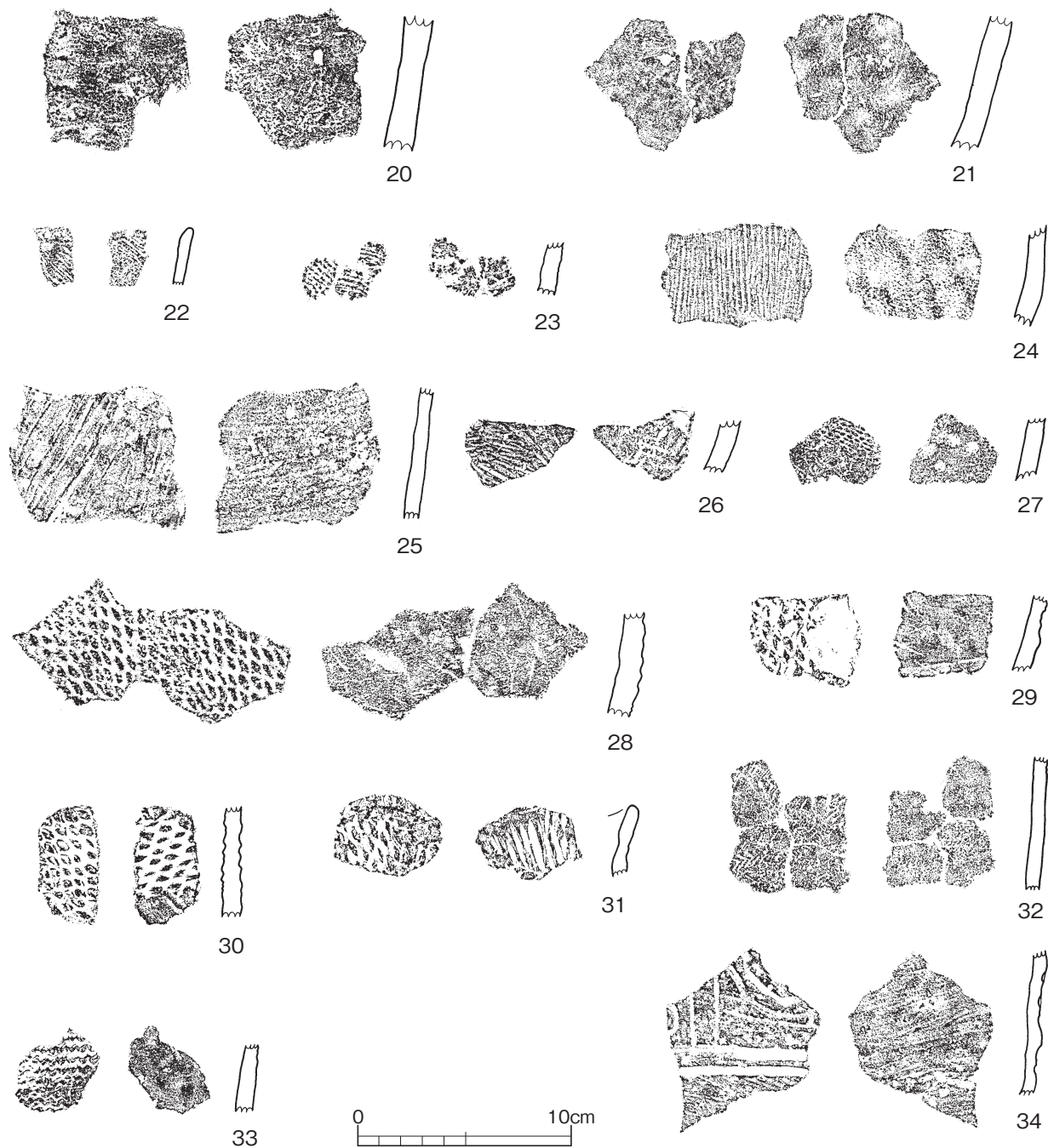
第11図 今井野第2遺跡出土遺物実測図(1)(1/3)



第12図 今井野第2遺跡出土遺物実測図(2) (1/3)

IV類 押型文土器(第13図27~33)

27~31は、楕円押型文土器である。27~29は内面がナデ仕上げである。27は小さな楕円押型が斜方向に28・29は、大きめの楕円押型文が横方向に連続して施文されている。30は内外面に深めの楕円押型文がみられ、外面の押型中央部は凹んでいる。31は、外面にやや菱形状に先端が尖り楕円の間隔が開いた押型文、内面には縦方向の原体条痕を施している。32・33は山形押型文土器である。32は外面の一部にナデ調整の後、綾杉状に横方向の山形押型文が施文されている。内面はナデ調整である。33は縦方向に密な山形押型文を施し、内面は丁寧なナデ仕上げである。



第13図 今井野第2遺跡出土遺物実測図(3)(1/3)

V類 黒色磨研系土器(第14図35・36)

35、36は黒川式系の浅鉢である。35は、ひれ状突起がみられ口縁上面を折り曲げるように成形している。36は胴部上位に稜がみられ、内外面ともに横方向のヘラミガキである。内面稜の直下には横方向のナデ調整がみられる。

VI類 刻目突帯文土器(第14図37~39)

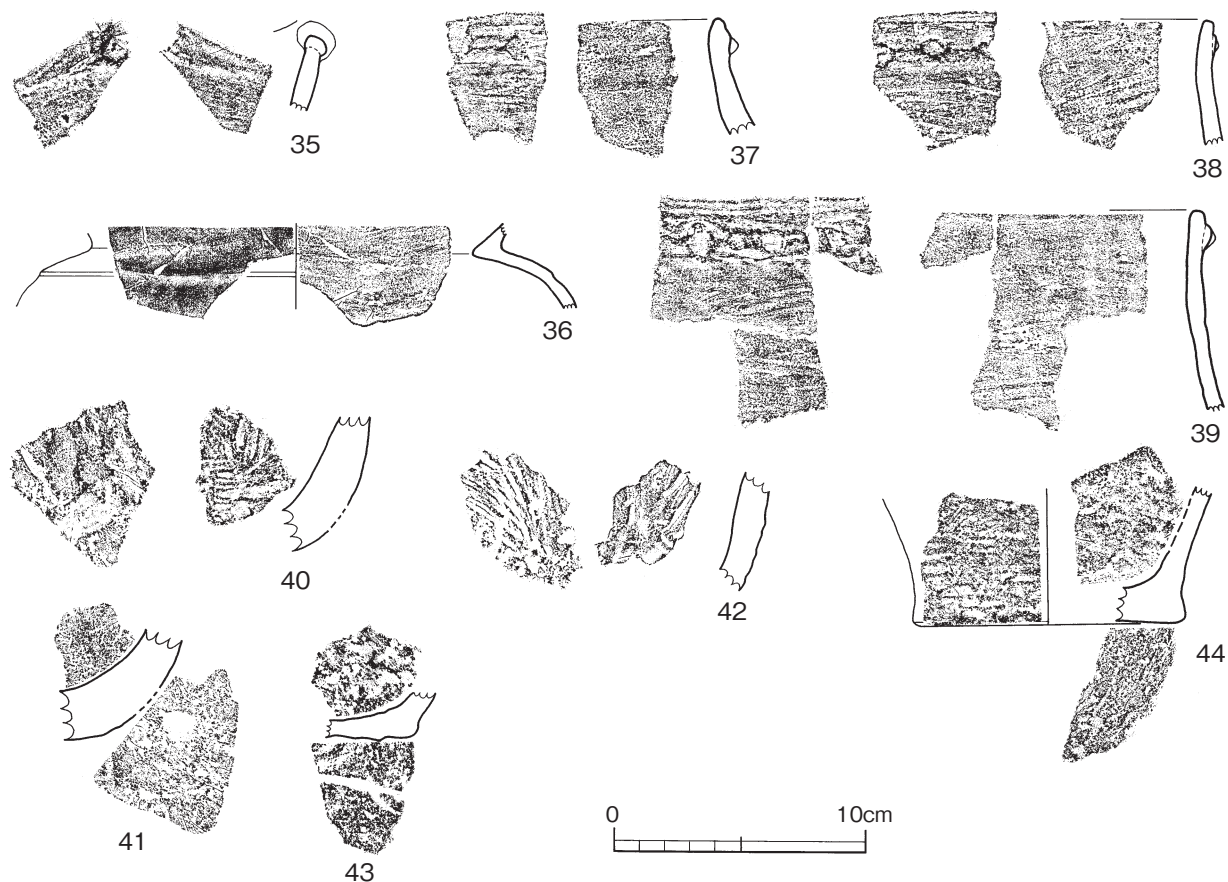
37~39は刻目突帯文土器である。内傾し、口縁上端からわずかに下がった位置に指頭押圧による刻目突帯を有する。37の口縁は丸くおさめられ外面は横位の条痕、内面はナデ調整である。38、39は口縁部にわずかに平坦面がみられ、38は低い突帯に径約8mmの斜方向の押圧。39は斜方向に幅11mmの大きめの押圧が施される。内外面ともに横位条痕がみられ外面は一部ナデ消されている。突帯付近の外面にススの付着が認められる。

VII類 その他(第13図34)

34は、確認調査のトレンチ内で確認されたもので、遺跡内からはこの1点のみの出土である。器壁は薄く外面は太めの凹線が施され、内面は貝殻による条痕がみられる。岩崎式系。

VIII類 底部(第14図40~44)

底部を一括した。40、41はともに丸底を呈すると思われる。41は内外面ともにナデ調整である。42は、外面に指頭痕、内面に貝殻条痕がみられる。42は内外面ともに条痕がみられる。43、44は平底である。43の底外面には工具によるとみられる刻線がみられる。44は、底部の推定径は10.2cmを計り、外面には条痕が施されている。底部外面には小さな凹凸がみられ何らかの圧痕の可能性はある。



第14図 今井野第2遺跡出土遺物実測図(4)(1/3)

石器

石器は、そのほとんどが包含層中より出土した。確認された器種は石鏃、尖頭状石器、スクレイパー、剥片、石核、礫器、打製石斧である。

石鏃(第15図50～61)

遺跡内から打製石鏃が12点出土しておりそのすべてを図化した。利用石材はチャート9点と最も多く、次いで黒曜石2点(その内姫島産1点、桑ノ木津留産1点)以下姫島産安山岩1点と続く。

平面形態と側縁部の形状および基部形態の組み合わせにより以下のとおり分類を行った。

平面形態

I類 正三角形

II類 二等辺三角形

側縁部の形状

1 側縁部が直線的にのびる

2 側縁部が丸みをもつ

基部形態(抉りの基準は便宜的に最大長に対する抉りの深さが1/3以上のものを深いとした。)

a 平基

b 凹基で抉りの浅いもの

c 凹基で抉りの深いもの

I類-1-a (50)

遺跡内出土では最も小型の石鏃で、重量は0.4gを計る。利用石材はチャートである。脚部の先端は尖る。

I類-1-c (51)

側縁および基部は両面から調整加工を施し全体形を作り出している。利用石材はチャートである。深めのU字状の抉りを有し、脚部の末端は丸みをおびる。

I類-2-b (52)

利用石材はチャートである。側縁部は丸みをおびる。形態よりこの類へ入れているが、断面が石鏃より厚く、重さも出土石鏃の平均値の約5.7倍である。尖頭状石器か。

II類-1-a (53)

側縁は両面から調整加工を施し、基部は大きめの剥離である。重さは出土石鏃平均値の約2.6倍である。利用石材はチャートである。

II類-1-b (54、59、60)

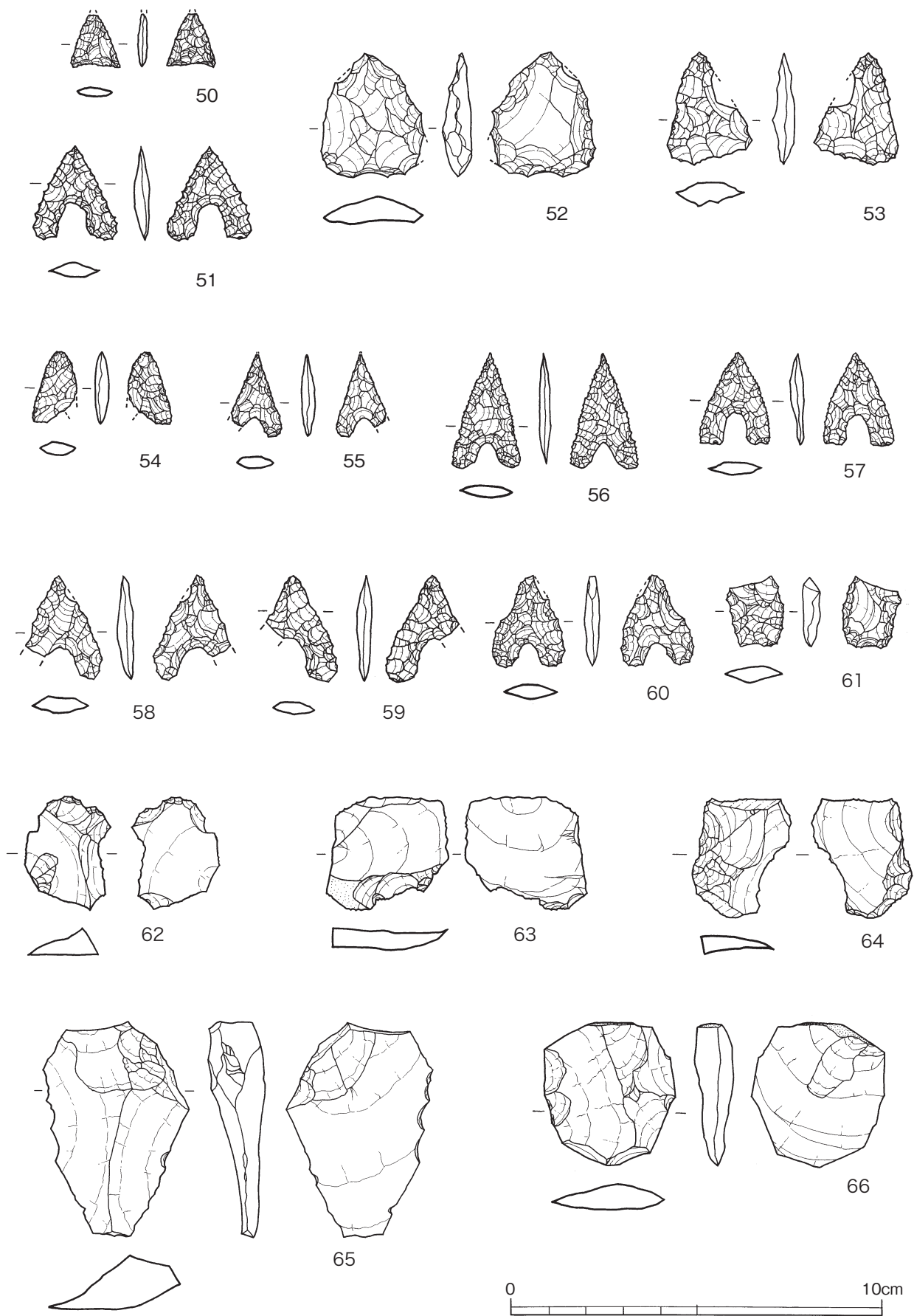
54は、姫島産黒曜石製の石鏃である。側縁は直線的で脚先端は尖る。基部に浅い抉りを作り出す。

59、60は脚部の抉りが浅いV字状を呈する。59は姫島産安山岩製である。60には、先端部から脚部にかけての両側縁に細かな調整加工が施される。石材はチャートである。

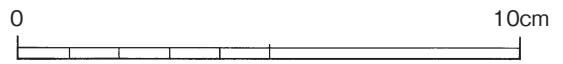
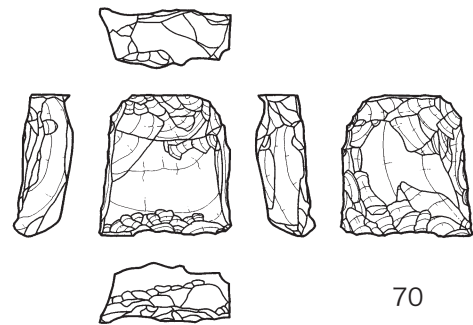
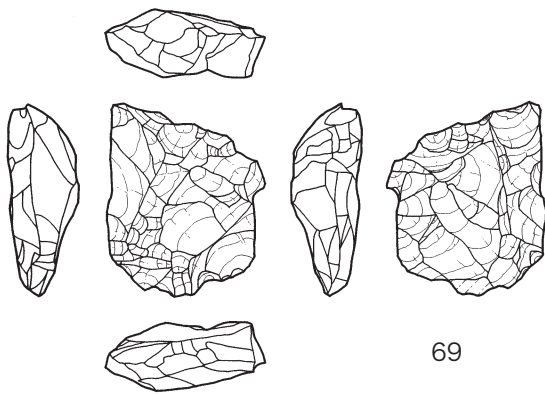
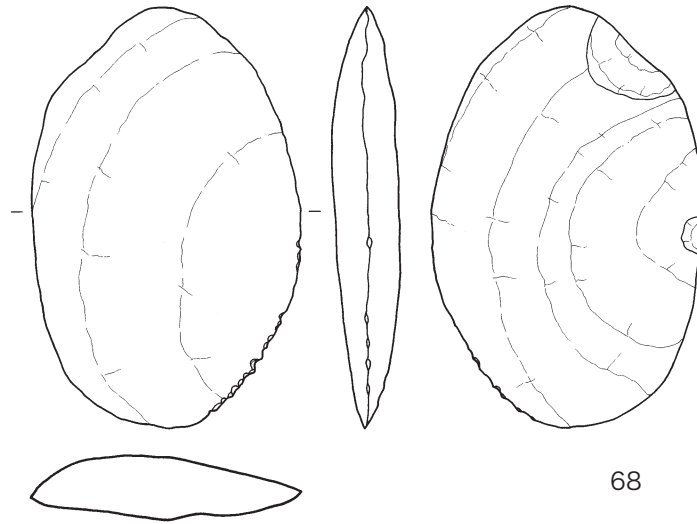
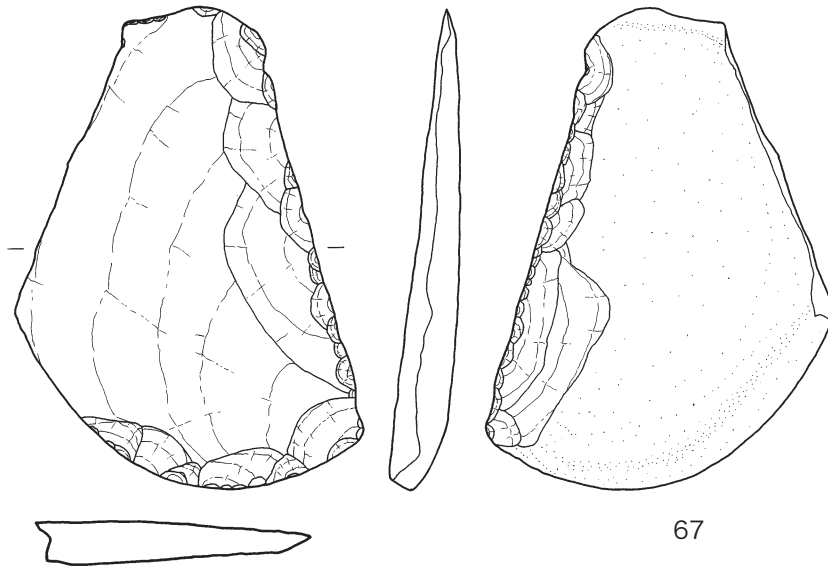
II類-1-c (55・57・56)

55～57はチャート製の石鏃であり、基部中央に深いU字状の抉りを有する。

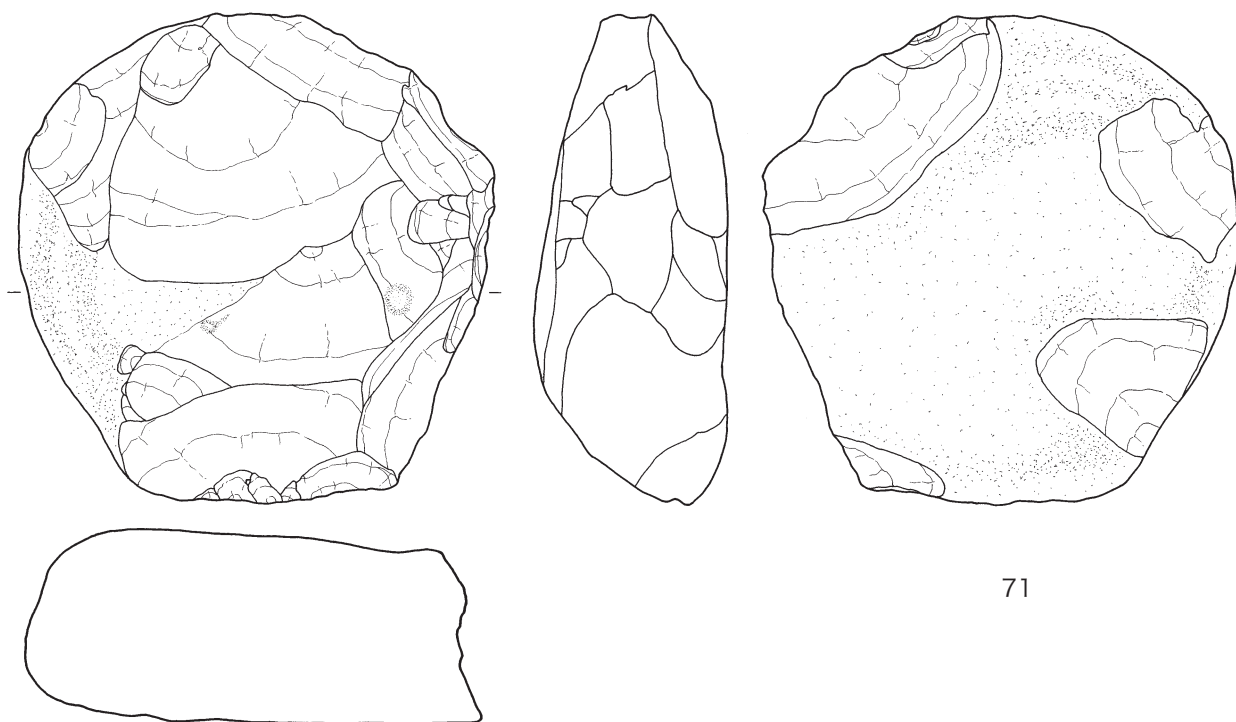
55の脚端部は直線的であり、56、57はやや丸みをもつ。56は、先端から側縁に至る部分がわずかに張り出す形状である。



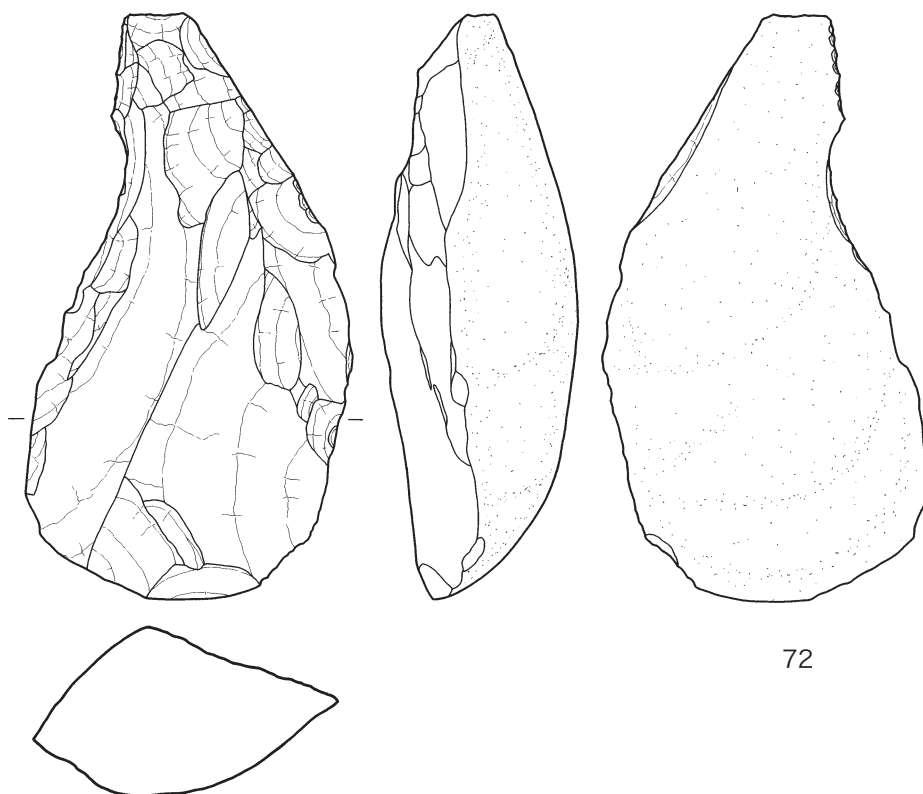
第15図 今井野第2遺跡出土遺物実測図(5) (2/3)



第16図 今井野第2遺跡出土遺物実測図(6) (2/3)



71



72



第17図 今井野第2遺跡出土遺物実測図(7)(2/3)

Ⅱ類-2-b (58)

58は、側縁部が丸みをもち、基部に至る側縁に細かな調整加工を施している。利用石材はチャートである。

61はⅡ類-1-bに類似する石鏃の未製品である。側縁から基部にかけて細かな調整剥離が施されている。石材は遺跡内出土量としては少ない黒曜石である。桑木津留産。

微細加工ある剥片(第15図62~64)

62は、不定形剥片の縁辺に微細な剥離がみられる。63は、打面側に自然面が残る。64は、縦長剥片を素材とし打面側に摺理面がみられる。石材はすべてチャート製である。

剥片(第15・16図65~68)

遺跡内からは、チャート1点砂岩3点の計4点が出土した。65は砂岩製の縦長剥片である。66は幅広の剥片であり、打面側に自然面が残る。石材はチャート。67は、縦長素材でややバチ形を呈する。石材は、砂岩で片側縁と下部縁辺にやや粗い剥離がみられる。打製石斧的な機能が考えられるか。68は砂岩の円礫を分割した素材であり、粗い剥離と一部縁辺に使用によると思われる微細な剥離がみられる。

石核(第16図69・70)

石核は2点出土している。ともにチャート製である。69は、両面ともに一定方向ではなく不規則に剥離を行っている。70は、台形状を呈する。打面を転移をしながら規則的に剥離を行っている。

礫器(第17図71・72)

71は砂岩製であり縁辺に粗い剥離によって刃部を形成している、チョッピングツール状である。72は流紋岩製で、断面形が船底状を呈する。自然面を残し片面のみに剥離がみられる。形態から打製石斧様の用途が考えられる。

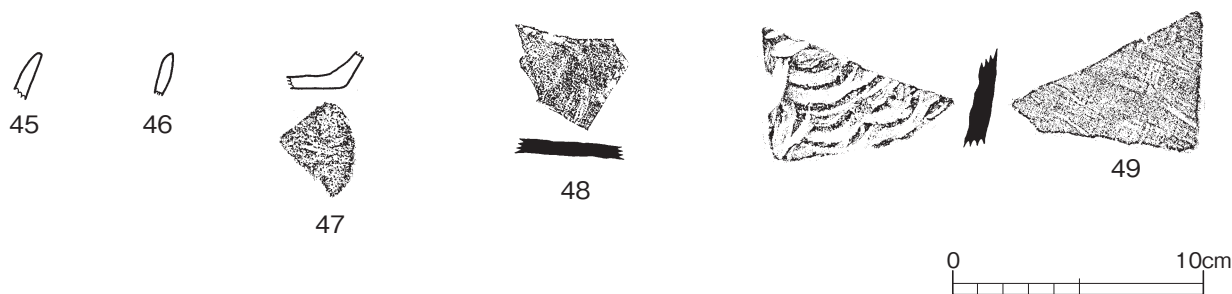
2 包含層出土の遺物

土師器(第18図45~47)

45・46は坏ないし皿の口縁である。45の口縁部は丸みをおび46はやや尖り気味である。内外面ともにナデ調整である。47は、ヘラ切り底を有する皿の底部である。

須恵器(第18図48・49)

48は、坏蓋の天井部である平坦部には回転ナデ調整がみられる。49は須恵器の甕である。胎土は赤褐色を呈し生焼けの可能性もある。外面にはナデ、内面には同心円状叩きがみられる。



第18図 今井野第2遺跡出土遺物実測図(8)(1/3)

第2表 今井野第2遺跡出土土器観察表(1)

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	縄文	深鉢	口縁部	B3 IV層				ナデ	ナデ、指頭痕	にぶい褐色 (7. 5YR5/4)	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	1~2mmの黒色光沢針状をわずかに含む。 3mm以下の白色粒を少量含む。	外面に黒変あり
2	縄文	深鉢	口縁部	C3 IV層				ナデ	ナデ、指頭痕	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	明黄褐色 (10YR6/6)	1mm以下の白色粒をわずかに含む。 1~2mmの黒色光沢針状をわずかに含む。	外面にスス付着
3	縄文	深鉢	口縁~胴部	SI5				横、斜方向のナデ、 指頭痕	横ナデ、指頭痕	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	1~2mmの黒色光沢針状を少量含む。 3mm以下の白色粒を多く含む。	外内面に黒変あり 粘土結つきめ
4	縄文	深鉢	口縁~胴部	B2 III層				横、斜方向のナデ	横、斜方向のナデ	明黄褐色 (10YR7/6)	にぶい横褐色 (10YR6/4)	1mm以下の白・灰色の岩片を少量含む。 2mm以下の黒色光沢針状を少量含む。	外内面に黒変あり 残存率約1/6
5	縄文	深鉢	口縁部	C3 V層				横、斜方向のナデ	横ナデ、ナデ、指頭痕	褐色 (5YR6/6)	にぶい褐色 (7. 5YR5/4)	3mm以下の白・灰・褐色粒を含む。	
6	縄文	深鉢	口縁~胴部	SI30				横、斜方向のナデ	横ナデ、指頭痕	にぶい横褐色 (10YR5/4)	にぶい横褐色 (10YR6/3)	2mm以下の黒色光沢針状を少量含む。 3mm以下の白色粒を多く含む。	外面に黒変あり
7	縄文	深鉢	口縁部	B4 IV層				ナデ、指頭痕	斜方向のナデ	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	1mm以下の黒色光沢針状を少量含む。 4mm以下の白・灰・褐色粒を含む。	外内面に黒変あり
8	縄文	深鉢	口縁部	B4 IV層				横、斜方向のナデ、 指頭痕	横、斜方向のナデ、 指頭痕	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	1mm以下の黒色光沢針状を少量含む。 4mm以下の白・灰・褐色粒を含む。	口唇部付近にわ ずかに黒変あり
9	縄文	深鉢	口縁部	C4 IV層				ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	2mm以下の黒色光沢針状を多く含む。 3mm以下の白・褐・黒色粒を少量含む。	
10	縄文	深鉢	胴部	C3 IV・V層				横、斜方向の条痕文、 条痕文の後ナデ	横方向の条痕文	にぶい褐色 (7. 5YR5/4)	にぶい褐色 (7. 5YR5/4)	3mm以下の白・灰・褐色粒を含む。	
11	縄文	深鉢	胴部	B4 IV層				縦方向の条痕文、ナデ、 指頭痕	ナデ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	3mm以下の白・灰・黒色光沢針状を少量 含む。	外面に黒変あり
12	縄文	深鉢	胴部	SI29				斜方向のナデ	斜方向のナデ、指頭痕	黒褐色 (10YR3/1)	褐灰色 (10YR4/1)	1mm以下の白色粒を少量含む。 2~3mmの白色粒を少量含む。	
13	縄文	深鉢	胴部	B4				ナデ	条痕文、横ナデ	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	2mm以下の黒色光沢針状を多く含む。 3mm以下の白・灰色粒を少量含む。	
14	縄文	深鉢	胴部	B2	(24.4)			ナデ	横ナデ、指頭痕	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	明黄褐色 (10YR6/6)	1~2mmの黒色光沢針状、透明光沢粒を少 量含む。	外面に黒変あり
15	縄文	深鉢	胴部(底部付 近)	C3 IV層				斜方向のナデ	ナデ	褐色 (7. 5YR6/6)	褐色 (5YR6/6)	3mm以下の白・灰・褐色粒を含む。	外面は風化気味 内面に黒変あり
16	縄文	深鉢	胴部	SI12				縦、斜方向のナデ	ナデ、指頭痕	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	1mm以下の白色粒を多く含む。 3mm以下の白・褐・黒色光沢針状を 少量含む。	内面は風化気味
17	縄文	深鉢	胴部	SI29				縦、斜方向のナデ	ナデ	灰黄褐色 (10YR4/2)	にぶい黄色 (2. 5Y6/3)	1mm以下の白色粒を少量含む。 2~3mmの白色粒を多く含む。	外内面に黒変あり
18	縄文	深鉢	胴部	SI29				縦、斜方向のナデ	ナデ	褐色 (5YR6/6)	褐色 (5YR6/6)	1~2mmの灰色岩片を多く含む。	外面は風化著しい 内面に黒変あり
19	縄文	深鉢	胴部	B3				斜方向のナデ	横ナデ、指頭痕	明赤褐色 (5YR5/6)	明赤褐色 (5YR5/6)	2mm程度の黒色光沢針状をわずかに含む。 1~2mmの白・灰色の岩片を多く含む。	外面に黒変あり
20	縄文	深鉢	胴部	C3				ナデ	ナデ	褐色 (7. 5YR6/6)	褐色 (7. 5YR6/6)	3mm以下の白・褐色粒を少量含む。	
21	縄文	深鉢	胴部	SI34				ナデ	斜方向のナデ、指頭痕	褐色 (7. 5YR6/6)	褐色 (7. 5YR6/6)	1mm程度の黒色針状をわずかに含む。 1~2mmの白・灰色の岩片を多く含む。	外内面に黒変あり
22	縄文	深鉢	口縁部	C3 IV層				ナデ、斜方向の条痕文	ナデ、斜方向の条痕文	にぶい褐色 (7. 5YR5/4)	明褐色 (7. 5YR5/6)	1mm以下の透明光沢粒をわずかに含む。 1mm以下の白色粒を少量含む。	
23	縄文	深鉢	胴部	C3 IV層				横方向の条痕文	ナデ	明赤褐色 (5YR5/6)	赤褐色 (5YR4/6)	1mm程度の白・褐色の岩片を多く含む。	内面は風化気味
24	縄文	深鉢	胴部	B4				縦方向の条痕文	ナデ、指頭痕	褐色 (7. 5YR7/6)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	2mm以下の白・灰・褐・黒色の岩片を多く含 む。	外面に黒変あり
25	縄文	深鉢	胴部	B3 IV層				斜方向のナデ	ナデ	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	2mm以下の白・黒色粒をわずかに含む。 2mm以下の黒色光沢針状を多く含む。	内面は風化気味
26	縄文	深鉢	胴部	B4				横方向の条痕文	ナデ	褐色 (7. 5YR6/6)	褐色 (7. 5YR7/6)	1mm以下の白・灰色の岩片を多く含む。	外内面に黒変あり
27	縄文	深鉢	胴部	C2 IV層				ナデ、楕円押型文	ナデ	明赤褐色 (5YR5/6)	明赤褐色 (5YR5/6)	1mm程度の黒色光沢粒を少量含む。 2mm以下の灰・乳白色の岩片を少量含む。	
28	縄文	深鉢	胴部	B2 IV層				楕円押型文	斜方向のナデ	褐色 (7. 5YR6/6)	褐色 (7. 5YR7/6)	2mm以下の黒色光沢針状を多く含む。 5mm程度の灰色の岩片を少量含む。	
29	縄文	深鉢	胴部	C3 V層				楕円押型文	横、斜方向のナデ	褐色 (5YR6/6)	褐色 (5YR6/6)	3mm以下の灰・乳白色の岩片を少量含む。	内面に黒変あり
30	縄文	深鉢	胴部	C3 IV層				楕円押型文	ナデ、楕円押型文	褐色 (7. 5YR6/6)	褐色 (7. 5YR7/6)	2mm以下の黒色光沢針状、黒・白色粒を少 量含む。	外面に黒変あり
31	縄文	深鉢	口縁	SI12				楕円押型文	縦方向の条痕文	明黄褐色 (5YR5/6)	褐色 (5YR6/6)	1mm以下の白・灰・褐色の岩片を多く含む。 3mm程度の白・灰色の岩片を少量含む。	波状口縁
32	縄文	深鉢	胴部	SI24 ・SI25				ナデ、山形押型文	ナデ	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	にぶい褐色 (7. 5YR5/4)	1mm以下の透明光沢針状をわずかに含む。 2mm以下の白色粒を少量含む。	
33	縄文	深鉢	胴部	C2 IV層				山形押型文	ナデ	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	にぶい褐色 (7. 5YR5/4)	1mm以下の白色粒を少量含む。 1~2mmの黒色光沢針状をわずかに含む。	内面に黒変あり
34	縄文	深鉢	胴部	B2				ナデ、凹線文	横方向の工具ナデ、 指頭痕	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	にぶい横褐色 (10YR5/4)	1mm以下の黒色・透明光沢粒を少量含む。 1mm以下の黒色光沢針状を少量含む。 1mm以下の白色粒を多く含む。	
35	縄文	浅鉢	口縁部	B2				横ナデ、ナデ	横ナデ	にぶい横褐色 (10YR5/4)	にぶい横褐色 (10YR5/4)	1mm以下の白色粒を多く含む。 3mm以下の黒色光沢針状をわずかに含む。	波状口縁 外面にスス付着
36	縄文	浅鉢	頸部~胴部	C3 IV層				横方向の丁寧なミガキ	横方向の丁寧なミガキ 横方向のナデ	黒色 (5Y2/1)	黒色 (5Y2/1)	精良	
37	縄文	深鉢	口縁部	C3				横ナデ、押し刻目 貼り付け突帯、横方 向の工具ナデ	横、斜方向のナデ、 斜方向の条痕文	にぶい横褐色 (10YR5/4)	にぶい横褐色 (10YR5/4)	1mm以下の灰・褐・黒色粒を多く含む。	
38	縄文	深鉢	口縁部	C3 IV層				押し刻目貼り付け 突帯、ナデ	横、斜方向のナデ、 斜方向の条痕文	明褐色 (7. 5YR5/6)	明褐色 (7. 5YR5/6)	2mm以下の乳白・灰色・褐色の岩片を多く含 む。	
39	縄文	深鉢	口縁~胴部	B2				横ナデ、押し刻目 貼り付け突帯、横方 向の条痕文	横、斜方向のナデ、 条痕文	褐色 (7. 5YR6/6)	褐色 (7. 5YR6/6)	2mm以下の黒色光沢針状を少量含む。 2mm以下の乳白色の岩片を多く含む。	外内面に黒変あり
40	縄文	深鉢	底部付近	C2 IV層				縦方向のナデ	横・縦・斜方向の条 痕文	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	褐色 (5YR6/6)	4mm以下の白・灰・茶・黒色光沢針状を含 む。	外面にわずかにス ス付着

第3表 今井野第2遺跡出土土器観察表(2)

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法 量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
41	縄文	深鉢	底部付近	SI3				ナデ	ナデ	橙色 (7. 5YR7/6)	橙色 (7. 5YR7/6)	3mm以下の白・灰・褐色粒を含む。	外面にわずかにスス付着
42	縄文	深鉢	胴部	B4				斜方向の条痕文	縦方向の条痕文、 ナデ	橙色 (5YR6/6)	にふい黄褐色 (10YR6/4)	1mm以下の透明・灰・黒色の岩片を少量含む。 3~5mmの灰・褐色の岩片を多く含む。	内面に黒変あり
43	縄文	深鉢	底部	B2 V層				ナデ、木ノ葉底	ナデ	橙色 (5YR6/8)	にふい黄褐色 (10YR6/4)	1mm以下の乳白色の岩片を多く含む。 3~5mmの灰色の岩片を少量含む。	外面にスス付着
44	縄文	深鉢	胴部~底部	B2 IV層		(10. 2)		条痕文の後、横・斜 方向のナデ	ナデ	明赤褐色 (5YR5/6)	にふい黄褐色 (10YR6/4)	1mm以下の乳白色の岩片を多く含む。 1mm程度の黒色光沢針状を多く含む。	外面に黒変あり 残存率約1/5
45	土師器	坏or皿	口縁	C3				ナデ	ナデ	にふい黄褐色 (10YR7/4)	にふい黄褐色 (10YR7/4)	1mm以下の白色粒をわずかに含む。 1mm程度の黒色粒を多く含む。	
46	土師器	坏or皿	口縁	C3				横ナデ	横ナデ	橙色 (7. 5YR7/6)	橙色 (7. 5YR7/6)	1mm以下の白・褐色粒をごくわずかに含む。 1mm程度の黒色粒をわずかに含む。	
47	土師器	坏	底部	C3				横ナデ、ナデ	横ナデ	橙色 (7. 5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	1mm以下の白色粒をわずかに含む。 1~2mmの黒色粒を少量含む。	
48	須恵器	坏蓋	天井部	B3				回転ナデ	回転ナデ	褐灰色 (7. 5YR5/1)	褐灰色 (7. 5YR5/1)	精良	
49	須恵器	壺	胴部	C3				格子目叩き	同心円叩き	橙色 (7. 5YR7/6)	橙色 (5YR7/6)	1mm程度の灰色の岩片を多く含む。 3~5mmの灰色の岩片を少量含む。	外面にスス付着

第4表 今井野第2遺跡出土石器計測表

遺物番号	器 種	出土地点	層 位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	石 材	備 考
50	石鏃	B2	IV層	1.43	1.32	0.28	0.40	チャート	
51	石鏃	C3	IV層	2.50	2.20	0.40	1.50	チャート	
52	尖頭状石器	B3	V層	3.30	2.70	0.80	6.70	チャート	
53	尖頭状石器	B2	IV層	3.00	2.30	0.60	3.10	チャート	
54	石鏃	SI15	IV層	1.93	1.20	0.40	0.60	姫島産黒曜石	
55	石鏃	C2	V層	2.45	1.85	0.38	1.30	チャート	
56	石鏃	SI8	IV層	2.85	1.95	0.40	1.40	チャート	
57	石鏃	C2	IV層	2.80	2.05	0.45	1.90	チャート	
58	石鏃	SI4	IV層	2.40	1.95	0.45	1.50	チャート	
59	石鏃	SI8	V層	2.20	1.36	0.35	0.70	姫島産安山岩	
60	石鏃	SI4	IV層	3.10	1.80	0.30	1.30	チャート	
61	石鏃	C3	IV層	1.90	1.55	0.50	1.20	黒曜石	
62	微細加工 ある剥片	C3	IV層	3.00	2.30	0.70	4.40	チャート	
63	微細加工 ある剥片	SI3	IV層	3.00	3.25	0.50	7.40	チャート	
64	微細加工 ある剥片	C4	IV層	3.20	2.70	0.50	4.10	チャート	
65	剥片	C3	V層	5.70	3.90	1.55	22.00	砂岩	
66	剥片	C3	V層	3.80	3.50	1.00	13.80	チャート	
67	剥片	B3	V層	9.50	6.90	1.40	76.70	砂岩	
68	剥片	C3	IV層	8.30	5.40	1.45	64.80	砂岩	
69	石核	B2	IV層	3.80	3.15	1.40	15.60	チャート	
70	石核	C2	IV層	2.80	2.60	1.20	10.30	チャート	
71	礫器	C3	V層	8.70	9.40	3.80	464.00	砂岩	
72	打製石斧	B3	IV層	11.56	6.45	3.90	247.30	流紋岩	

第4節 今井野第2遺跡における自然化学分析

I 今井野第2遺跡における植物珪酸体(プラント・オパール)分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO₂)が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

分析試料は、第1トレンチおよび第3トレンチの2地点から採取された計13点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析結果

(1)分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、表2および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、水田跡の検討が主目的であることから、第3トレンチの試料3'を除いて、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科(おもにネザサ節)の主要な5分類群に限定した。

[イネ科]

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型(おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

ブナ科(シイ属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)、アワブキ科、その他

4. 考察

(1)稲作跡の検討

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(プラント・オパール)が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1)第1トレンチ

3層(試料1)~6層(試料6)について分析を行った。その結果、これらのすべての試料からイネが検出された。このうち、畦畔状遺構が検出された4層上部(試料3、3')では密度が3,000~4,500個/gと比較的高い値であり、5層(試料5)でも3,000個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

その他の層準では、密度が800~2,300個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2)第3トレンチ

3層(試料1)~6層(試料6)について分析を行った。その結果、これらのすべての試料からイネが検出された。このうち、4層(試料4)では密度が3,000個/gと比較的高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

その他の層準では、密度が800~2,300個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

(2)イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属型(シコクビエが含まれる)などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

(3) 植生と環境の推定

上記以外の分類群では、全体的にタケ亜科(おもにネザサ節)が多く検出され、ススキ属型も検出された。また、部分的にヨシ属も少量検出された。さらに、第3トレンチの試料3'を除いて定量は行わなかったが、ほとんどの試料から照葉樹起源のマンサク科(イスノキ属)が多く検出され、ブナ科(シイ属)、クスノキ科、アワブキ科なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、全体的にタケ亜科が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、当時の調査区周辺はタケ亜科(おもにネザサ節)やススキ属などが生育する比較的乾燥した開かれた環境であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また、遺跡周辺にはイスノキ属、シイ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。なお、これらの植物については、施肥の目的で堆肥や草木灰などとして周辺から持ち込まれた可能性も想定される。

5. まとめ

植物珪酸体(プラント・オパール)分析の結果、畦畔状遺構が検出された4層、および放射性炭素年代測定で1300±60年BP(1σの暦年代で西暦660~780年)の年代値が得られた5層では、イネが比較的多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、その他の層準でも稲作が行われていた可能性が認められた。

当時の調査区周辺はタケ亜科(おもにネザサ節)やススキ属などが生育する比較的乾燥した開かれた環境であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また、遺跡周辺にはイスノキ属、シイ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

文献

- 杉山真二(1987)タケ亜科植物の機動細胞珪酸体, 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.
 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール), 考古学と植物学, 同成社, p.189-213.
 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-, 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表1 宮崎県、今井野第2遺跡におけるプラント・オパール分析結果
 検出密度(単位: ×100個/g)

分類群	学名	第1トレンチ						第3トレンチ						
		1	2	3	3'	4	5	6	1	2	3	4	5	6
イネ	<i>Oryza sativa</i>	23	15	30	45	23	30	8	15	8	15	30	23	15
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	8					15	8						
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	30	8	8	15	38	8	23	23	15	15		8	8
タケ亜科	Bambusoideae	219	158	189	234	249	128	129	105	196	142	135	106	152

推定生産量(単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.67	0.44	0.89	1.33	0.67	0.89	0.22	0.44	0.22	0.44	0.88	0.67	0.45
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.48					0.95	0.48						
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.38	0.09	0.09	0.19	0.47	0.09	0.28	0.28	0.19	0.19		0.09	0.09
タケ亜科	Bambusoideae	1.05	0.76	0.91	1.12	1.20	0.61	0.62	0.51	0.94	0.68	0.65	0.51	0.73

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

表2 今井野第2遺跡における植物珪酸体分析結果
 検出密度(単位: ×100個/g)

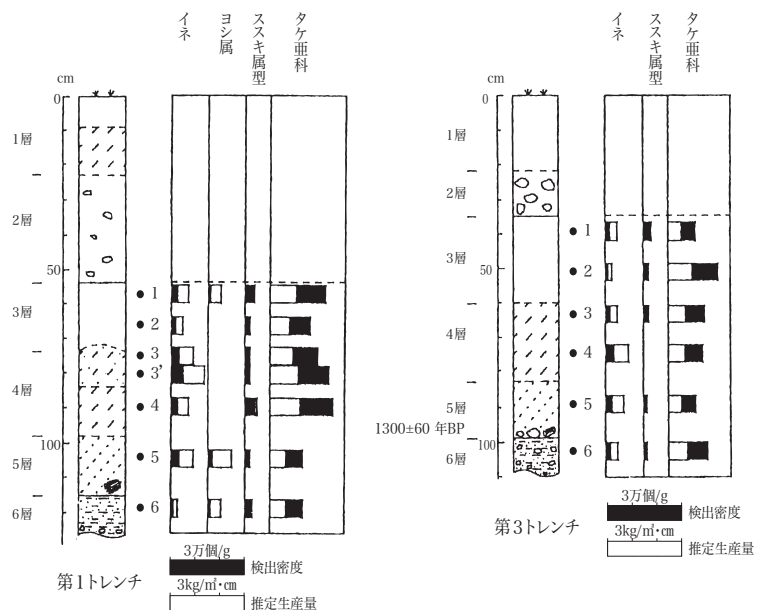
分類群	学名	1トレンチ	3'
イネ科 Gramineae (Grasses)			
イネ	<i>Oryza sativa</i>	45	
キビ族型	Panicaceae type	7	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	15	
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	35	
タケ亜科 Bambusoideae (Bamboo)			
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	161	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	14	
未分類等	Others	42	
その他のイネ科 Others			
表皮毛起源	Husk hair origin	28	
棒状珪酸体	Rod-shaped	133	
未分類等	Others	370	
樹木起源 Arboreal			
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>	14	
クスノキ科	Lauraceae	7	
マンサク科(イスノキ属)	<i>Distylium</i>	98	
アワブキ科	Sabiaceae	21	
その他	Others	21	
植物珪酸体総数	Total	1010	

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic r	1.32
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.19
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.77
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	0.04

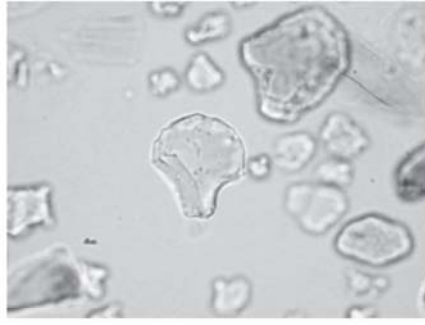
タケ亜科の比率(%)

ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	95
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	5

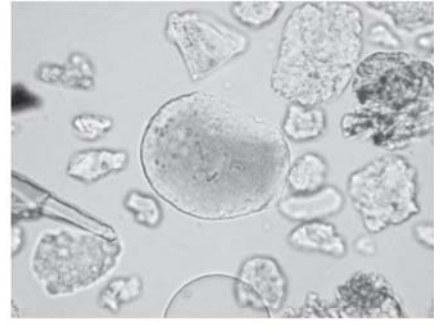




イネ
第1トレンチ 2



イネ
第1トレンチ 3



ヨシ属
第1トレンチ 6



ススキ属型
第3トレンチ 5



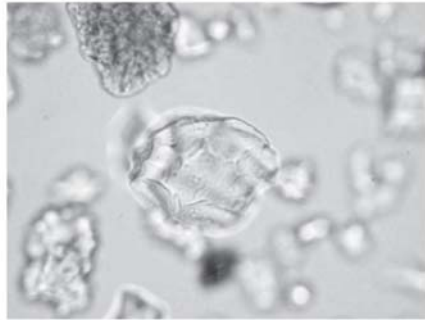
メダケ節型
第3トレンチ 5



ネザサ節型
第3トレンチ 3



クマザサ属型
第1トレンチ 2



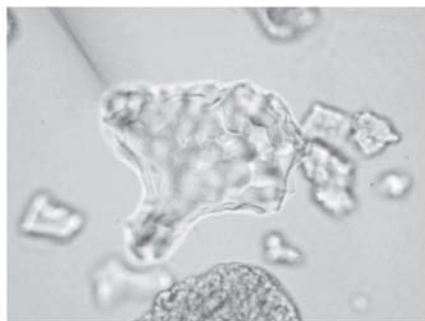
ブナ科(シイ属)
第1トレンチ 3'



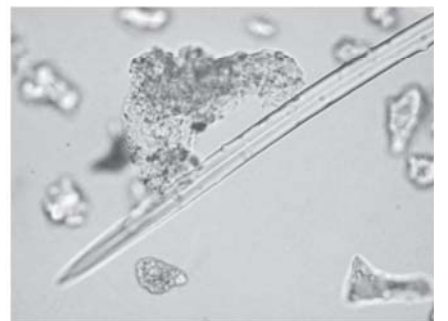
クスノキ科
第1トレンチ 4



マンサク科(イスノキ属)
第1トレンチ 5



アワブキ科
第3トレンチ 3



海綿骨針
第3トレンチ 4

50μm

植物珪酸体(プラントオパール)の顕微鏡写真

II 今井野第2遺跡における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
1	3トレンチ, 5層下部	木材	酸-アルカリ-酸洗浄, ベンゼン合成	β 線計数法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代(西暦)	測定No. (Beta-)
1	1380±60	-30.1	1300±60	交点:cal AD 690 1 σ :cal AD 660~780 2 σ :cal AD 640~880	169704

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代(西暦)。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68%確率)と2 σ (95%確率)は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。

3. 考察

放射性炭素年代測定の結果、第3トレンチの5層下部から採取された木材では、1300±60年BP(1 σ の暦年代で西暦660~780年)の年代値が得られた。

第5節 まとめ

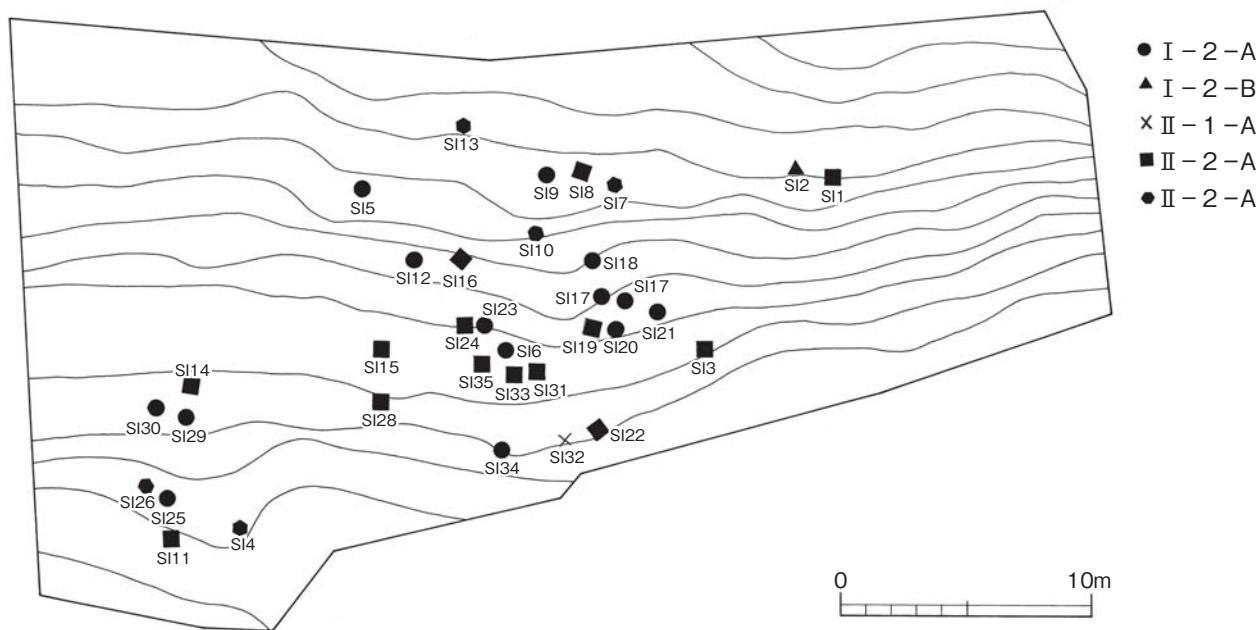
今井野第2遺跡では沖積低地部で水田跡と推定される堆積が確認され、丘陵部で縄文早期を中心とした土器と集石遺構35基が確認された。以下整理できた内容について記述を行う。

水田跡

沖積低地部にトレンチを設定し(第I章第2図)、掘り下げを行ったところ、4層上面に畦畔状の高まりが確認され5層下部で木杭の一部かと思われる木片が確認された。プラントオパール分析の結果、4層中でプラントオパール密度が3,000個/1gと高い数値を示した。また5層中の木片は放射性炭素年代測定の結果、 $1,300 \pm 60$ 年BP(1 σ の暦年代で西暦660~780年)の年代値が得られている。重機により周囲を拡張したが、予想以上に基盤整備を受けていることが判明し、今回の調査では水田跡をとらえるには至らなかった。しかしながら、自然化学分析の結果からも水田跡の可能性が高いことが確認された。

集石遺構

基本土層のIV層中から集石遺構が35基検出された。本論、第II章第3節で分類を行った。その結果、I-2-A類とII-2-B類が併せて全体の80%を占める結果となった。礫の密集度の違いはあるがともに掘り込みを有し配石をもたないタイプである。分布については、第19図のとおりであり両者は比較的近接して立地していることがみてとれる。廃棄の状態に近いものと再利用の可能性をもつものとの差異を示すとも考えられる。



第19図 今井野第2遺跡集石遺構分布図(1/300)

出土土器

厚手の無文土器が当遺跡の出土の大半を占め、未掲載のものも含めると全体量の約75%に達する。特徴として、器壁は厚くやや薄手と感じられるものでも1cmの厚さを持ち、胴部片では1.5cmと厚めのものが多い。口縁端は丸くおさめ、内外面とも指押さえの凹凸が多く、ナデ仕上げである。細かな砂粒を含むものの胎土は精良なものが多い。さらに、無文土器の中に一定量のこぶ文を有する土器の出土がみられる。こぶ文土器は、高千穂町古城遺跡や岩戸五ヶ村遺跡、北方町早日渡遺跡、厚手の無文土器とともに出土している遺跡として大分県利光遺跡、下野遺跡などがあり、五ヶ瀬川上流域から大分県にかけての出土がみられる。



今井野第2遺跡調査区全景



今井野第2遺跡(縄文早期遺構面)



今井野第2遺跡東壁土層断面



散礫検出状況(南より)



集石遺構検出作業風景



13号集石遺構(南より)



13号集石遺構敷石検出状況(西より)



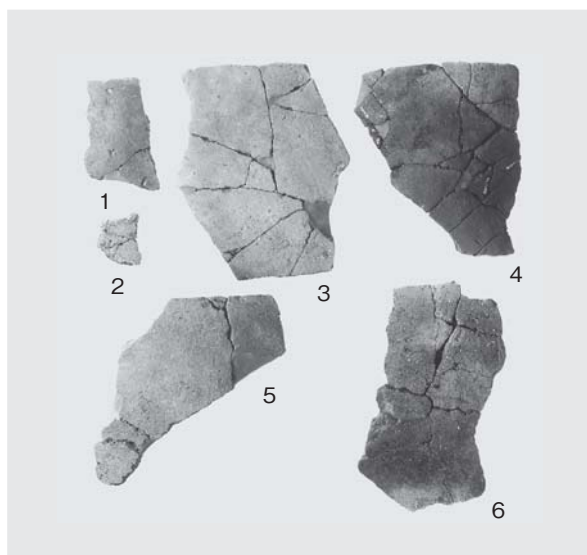
13号集石遺構完掘状況(西より)



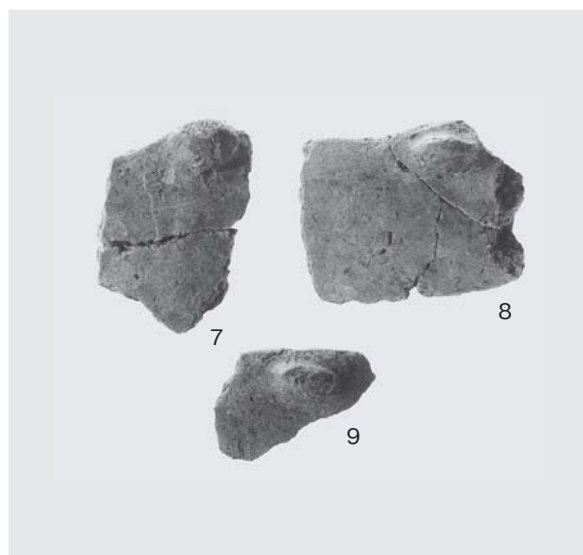
31・33・35号集石遺構検出状況(南より)



31・33・35号集石遺構完掘状況(南より)



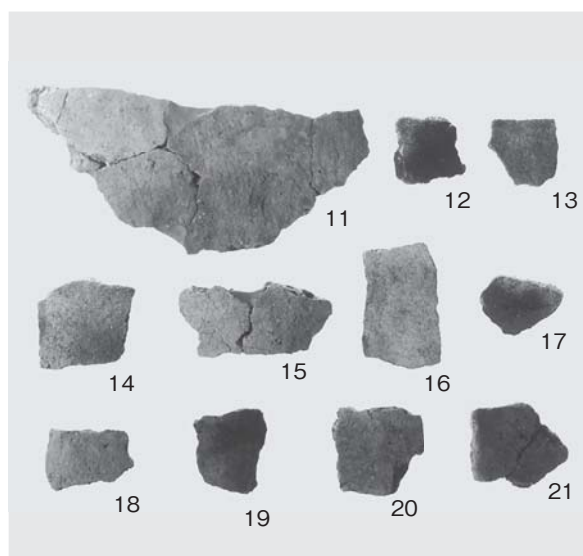
出土繩文土器(I類)



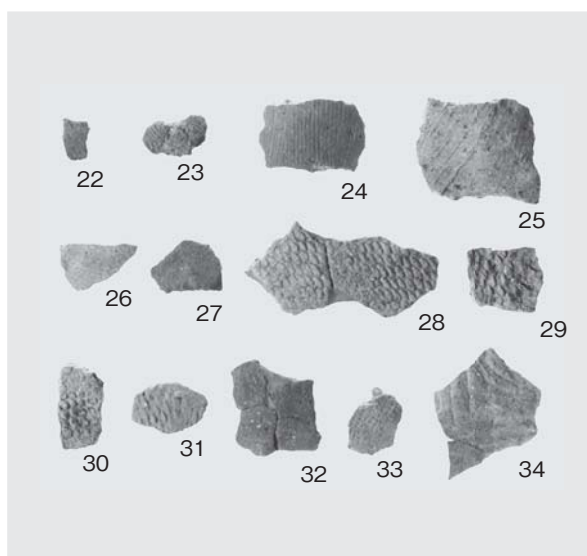
出土繩文土器(II類)



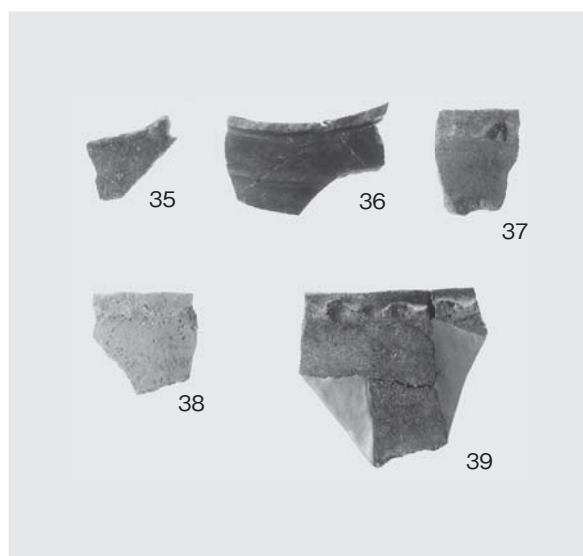
出土繩文土器(I·II類胴部)



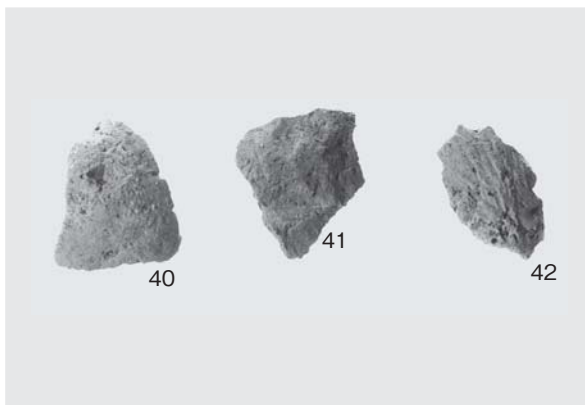
出土繩文土器(I·II類胴部)



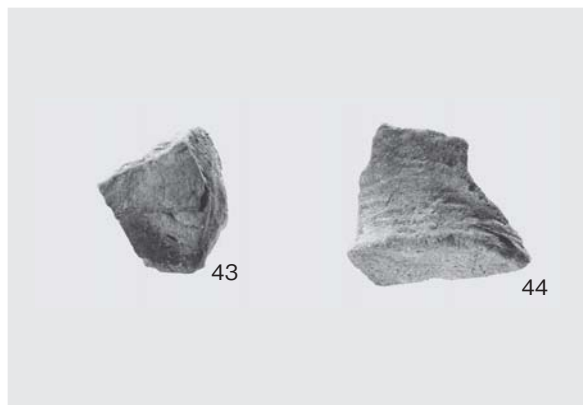
出土繩文土器(III·IV·V類)



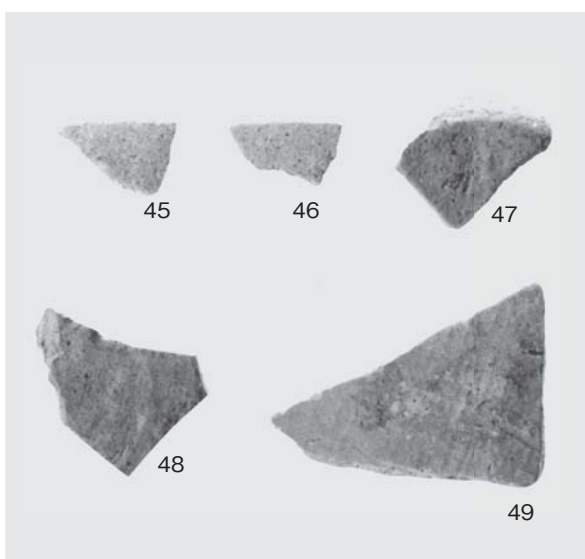
出土繩文土器(V·VI類)



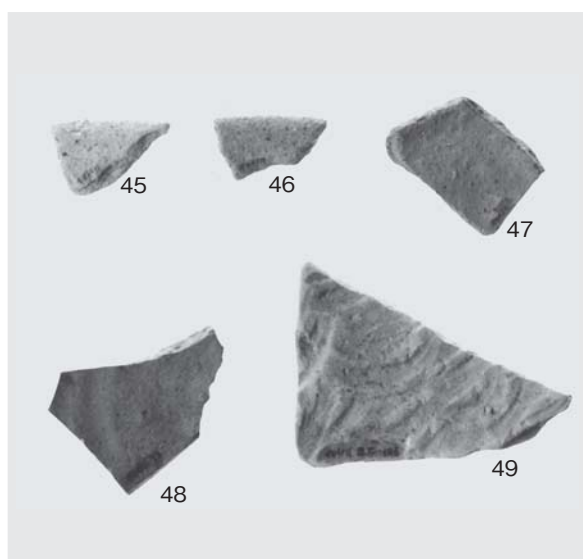
出土繩文土器(VII類)



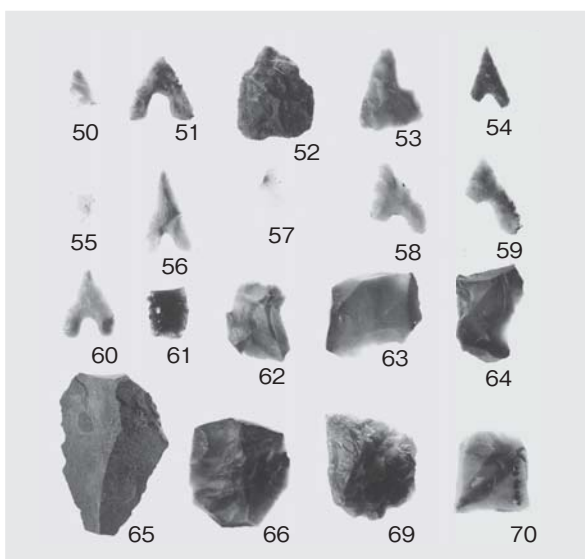
出土繩文土器(VII類)



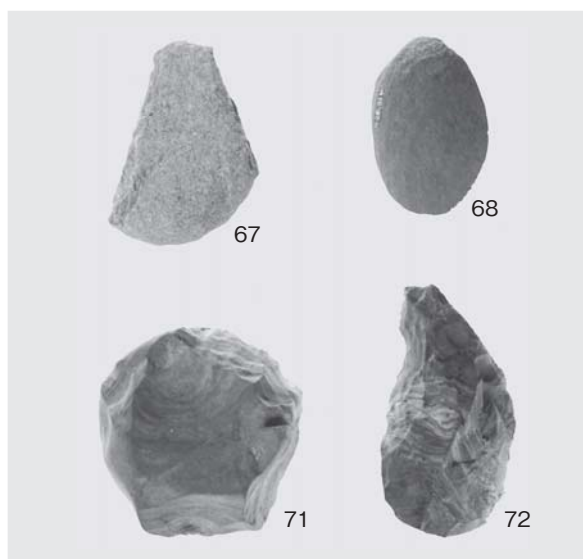
出土土師器・須恵器(外面)



出土土師器・須恵器(内面)



出土石器1(石鏃・剥片・石核)



出土石器2(礫器・剥片)

AMORIJONYAMA

天下城山遺跡

第Ⅲ章 天下城山遺跡の調査

第1節 調査の経過と概要

天下城跡は、地表面観察や縄張り調査の結果などから遺構の残存状況は良好であった。しかしながら、調査対象地は、竹や雑木などが繁茂していたため伐採および搬出を行った後の調査となった。まず、平成14年度に城域全体の把握を行うため、詳細な縄張り調査を実施し、城域全体にわたる航空測量を行った。その結果、新たに虎口や土塁状の施設が確認され、平成15年度はその成果を踏まえて、発掘調査を実施した。

調査にあたっては、排土処理等の関係から下部の曲輪から順次A～D区(第Ⅰ章第3図参照)と呼称し最高点の曲輪Ⅰへ向かって進めた。(区割りと曲輪番号の対照は例言のとおり)。調査の結果、曲輪Ⅰ(D区)から曲輪Ⅱにかけて溝状遺構や虎口状の遺構、曲輪Ⅳ(B区)でピットや石組み遺構が確認された。本調査中、先行する工事に伴って数カ所の確認調査を行った。また、平成15年度には、国立歴史民俗博物館の千田嘉博氏より城取りの評価(城域の認定や縄張り)や検出された遺構についてご指導を賜った。

第2節 基本土層

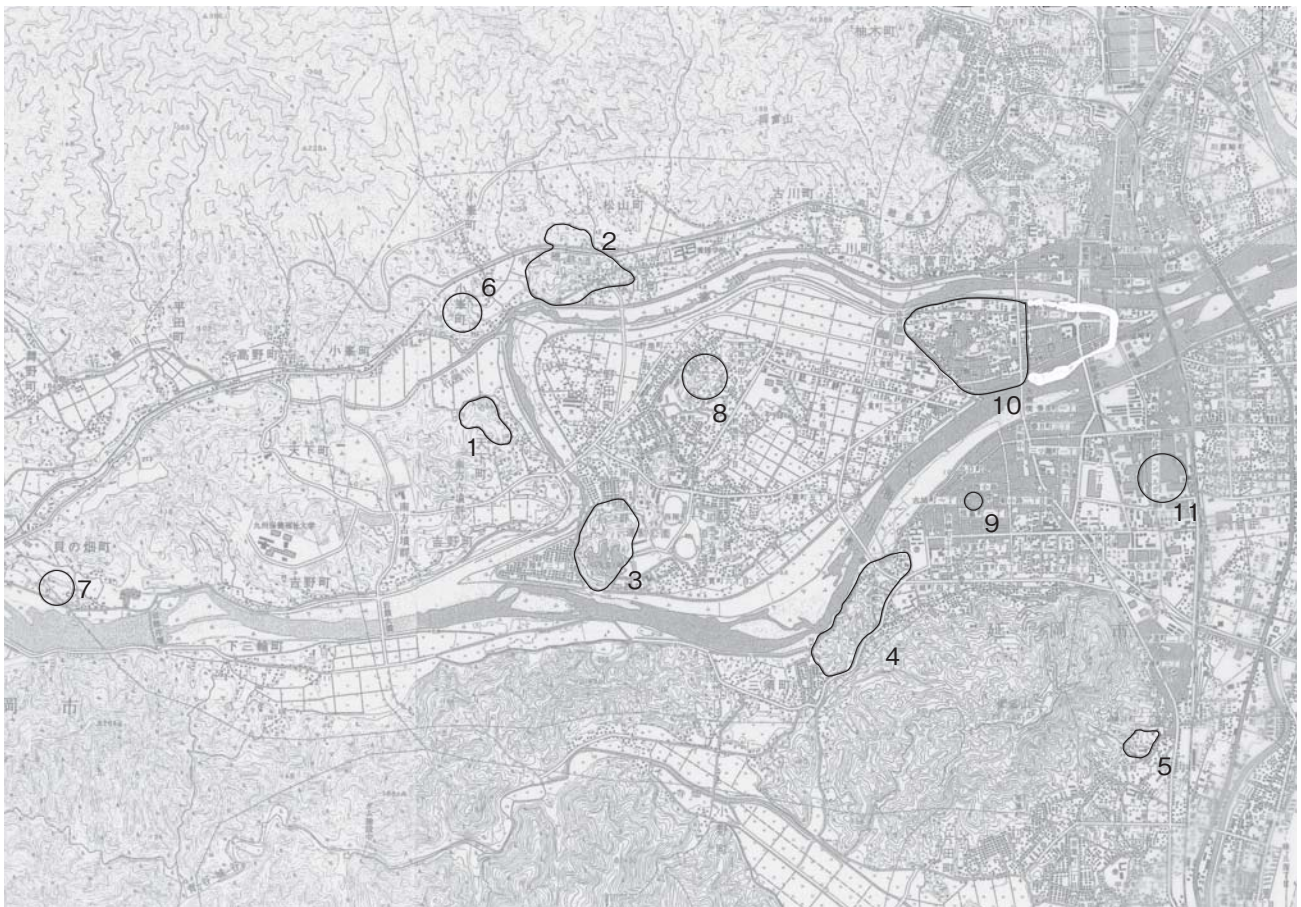
基本土層を第1図に示した。曲輪Ⅲ・曲輪Ⅳ間で観察された土層で、遺跡内の堆積状況は概ねこのとおりである。Ⅰ層は表土で暗褐色土(10YR4/4)である。雑木林や竹林として利用されていたため、上部には細根が多い。Ⅱ層は、明褐色土(5YR6/8)で、阿蘇火砕流由来の堆積層である。Ⅲ層は褐色土(2.5YR5/4)で礫を含み堅くしまる。Ⅳ層は黄褐色土(10YR6/8)で細かい礫を多く含む。Ⅴ層は基盤層にあたり四万十累層群にあたりと考えられる。最高点の曲輪Ⅰの平坦面については、後世の改変によると考えられる所作によりⅢ層までを失っていた。

I	I 暗褐色土(10Y R4/4) 表土
II	II 明褐色土(5YR6/8) 遺物包含層 やや粘性をもつ
III	III 褐色土(2.5YR5/4) 礫を含み堅くしまる
IV	IV 黄褐色土(10YR6/8) 細かい礫を多く含む堅くしまる
V	V にぶい黄橙色(10YR7/4)

第1図 基本土層模式図

第3節 縄張り図から見た天下城跡(第3図)

天下城跡は、五ヶ瀬川を望み南東へつきだした丘陵上に立地している。標高約53mの主郭を中心に放射状に広がる構造をしており、全体としては南北方向に長い形状が見て取れる。城域面積は約18,000㎡に及んでいる。城の北側には堀切と思われる施設が巡る城ヶ鼻(第2図6)や対岸の標高54mに松尾城跡(第2図2)が位置している。さらに、その南東には中世の縣を領有した土持氏や伊東氏に関連した西階城(第2図3)・井上城(第2図4)の2城が今なお残っている。北側と東側は自然地形の急崖を巧みに利用して曲輪を配置している。城域は南北方向に約450mを測る。最大の面積をほこる曲輪Aは、一部北側が墓地として利用されており明確ではないが南北方向から曲輪の北端から西端にかけて高さ約0.5m、幅0.6mの土塁状の高まりが残存しているのが認められる。さらに、南に通路と推定される空間が続き、①の地点に虎口状の施設が認められる。②地点には東西方向に明瞭な堀切があり、土橋状の施設が現状でも確認できる。曲輪Iから溝状遺構の南側③地点までの全体面積の約10分の1に当たる狭い範囲を内の城、南側②地点の堀切までを含めた範囲を外の城と考えると、やや曲輪のつながりが散漫な中抜けの状態であるが、天下城跡は二重構造をもった城としての位置付けが可能である。



- | | | | | | | |
|--------|--------|---------|--------|--------|-------|---------|
| 1 天下城跡 | 2 松尾城跡 | 3 西階城跡 | 4 井上城跡 | 5 鬼ヶ城跡 | 6 城ヶ鼻 | 7 貝の畑城跡 |
| 8 北の城 | 9 中野城跡 | 10 延岡城跡 | 11 中の城 | | | |

第2図 天下城跡と周辺の城館跡(1/50,000)



第3図 天下城跡縄張り図(1/2,000)

第4節 中世の遺構と遺物

天下城跡の調査(範囲は第1章第3図)の中で対象になった曲輪は縄張り図(第III章第3図)中の曲輪Iから曲輪XIVである。その中で遺構が確認されたのは曲輪IIおよび曲輪XIVであり、遺物の出土がみられた曲輪は曲輪II・IV～VI・X～XIIである。曲輪より出土した遺物は掲載分を除き大半は土師器の小片である。

1 遺構

(1) 曲輪I(第3・4図)

面積が約300㎡を測り、北側および東側は急崖を呈し西側の法面には明瞭な切岸が認められる。その下段に曲輪II～曲輪VIを配し、防御性の高さをうかがわせる。後世の所作による改変のため平坦面からは、遺構および遺物は確認されなかった。

(2) 曲輪II(第3・4・7図)

主郭と推定される曲輪Iの下段を囲むように配され、南側は緩やかに傾斜をしながら細長い馬の背状の地形を利用した曲輪へと続いている。曲輪の西側には切岸が認められる。曲輪Iとの間からは溝状遺構が確認され、その一部は曲輪Iにとりつくスロープ状を呈し、虎口状の施設(空間)へと連絡する。1号溝状遺構(SE1)(第7図)

1号溝状遺構は、平成14年の確認調査の際その一部が確認されていたもので、曲輪IIの縁辺を南側から西側にかけて巡っている。断面形は逆台形を呈し、規模は幅約2.5m、深さは東側(曲輪II側)が1.2m、西側(曲輪III側)で0.2mを測る。溝状遺構内には幅0.9m、斜度6°ほどのスロープ状の広がりが認められる。

虎口状遺構(第7図)

曲輪の西側2カ所(a・b)で虎口と推定される空間が確認された。aは1号溝状遺構が標高を上げながら曲輪IIにスロープ状にとりつく箇所であり、bはaの北約20mに位置する。基盤層まで掘り込まれ、食い違い虎口状の形態を呈する。ピットなどの遺構は確認されなかった。

(3) 曲輪XIV(第9図)

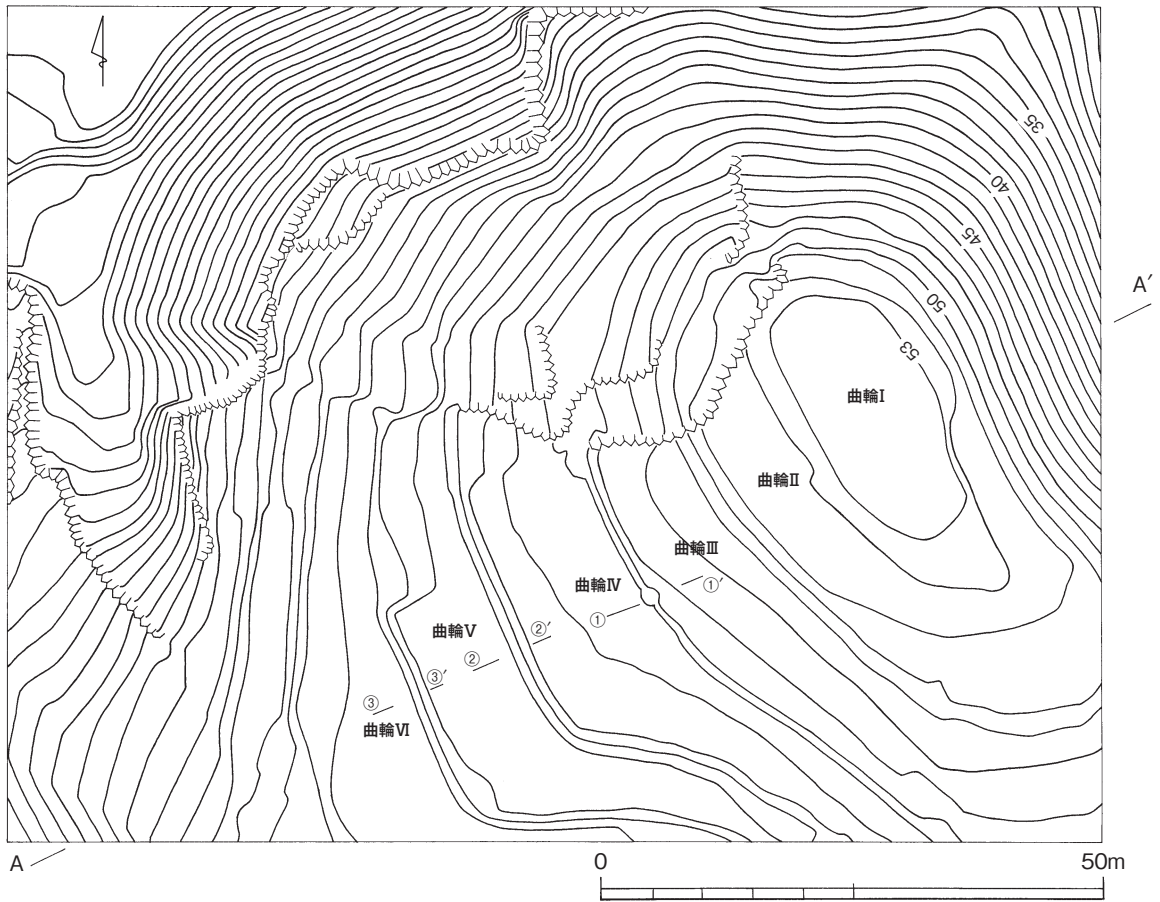
曲輪Iの北西、比高差約32mに位置し、面積は350㎡を測る。天下城跡の曲輪の中で最北端にあり、すぐ上部に位置する曲輪XIIIとともに主郭部分を防御する北への構えとなっている。曲輪の中央から北側部分で、曲輪XIII側の地山を掘削し北端へ移動させ、平坦面を広げるような造作の痕跡が確認された。

ピット(SH)(第9図)

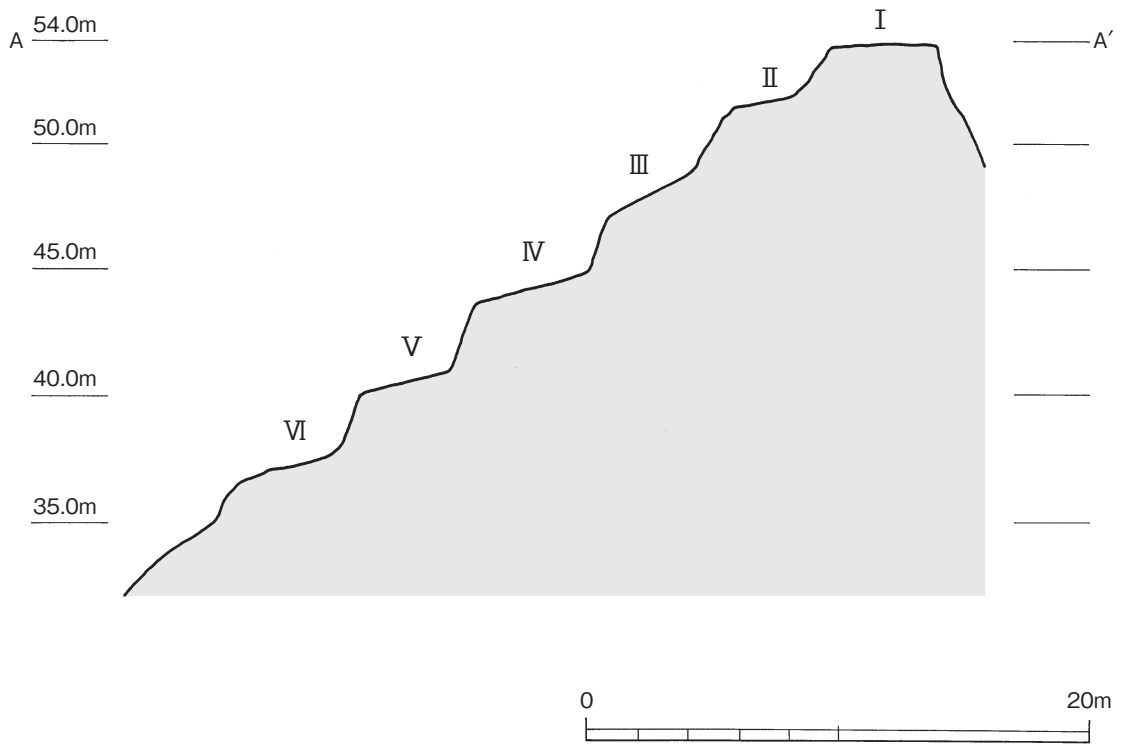
曲輪XIVの中央部からピット約40基が確認された。掘立柱建物として復元できるものは確認できなかった。遺物としてはSH2から土錘(第16図50～55・57・58)が8個まとまって出土した。またSH3から洪武通宝(第17図59)と銭文不明の銭貨(第17図61)が出土している。

石組遺構(第10図)

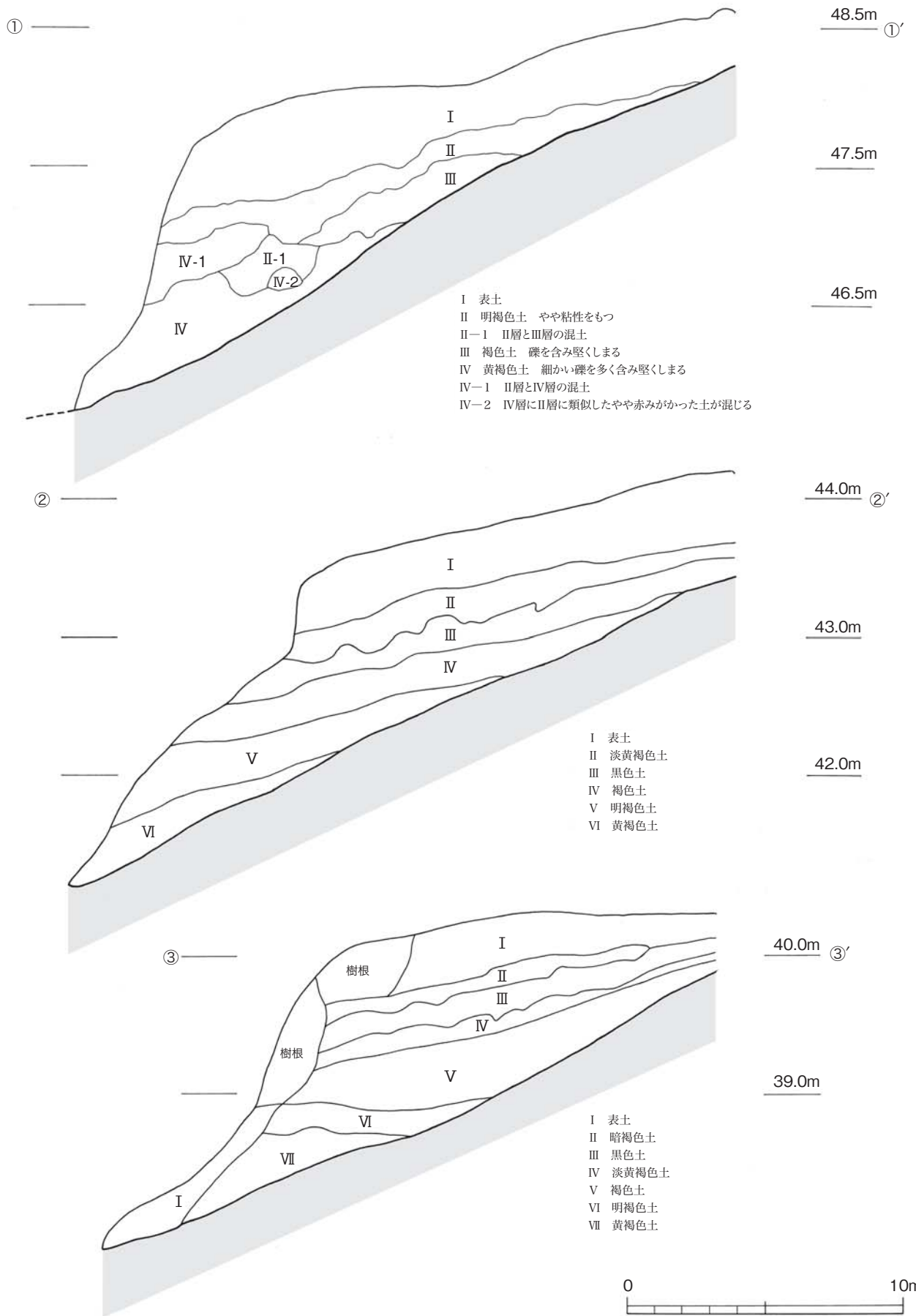
遺構は曲輪の西縁に位置しI層を除去した後、確認された。石組は、こぶし大から人頭大の砂岩によって構成され、遺構の断面形はやや袋状を呈する。礫は密に充填されているわけではなく、礫間には隙間がみられる。推定長軸約1.5m、短軸約1.0m、深さ約0.45mを測る。主軸方向はN95°Eである。遺構に伴う遺物の出土はなく時期および性格についての詳細は不明であるが、曲輪に伴うなんらかの施設であると考えられる。



第4図 曲輪I-VI平面図(1/750)

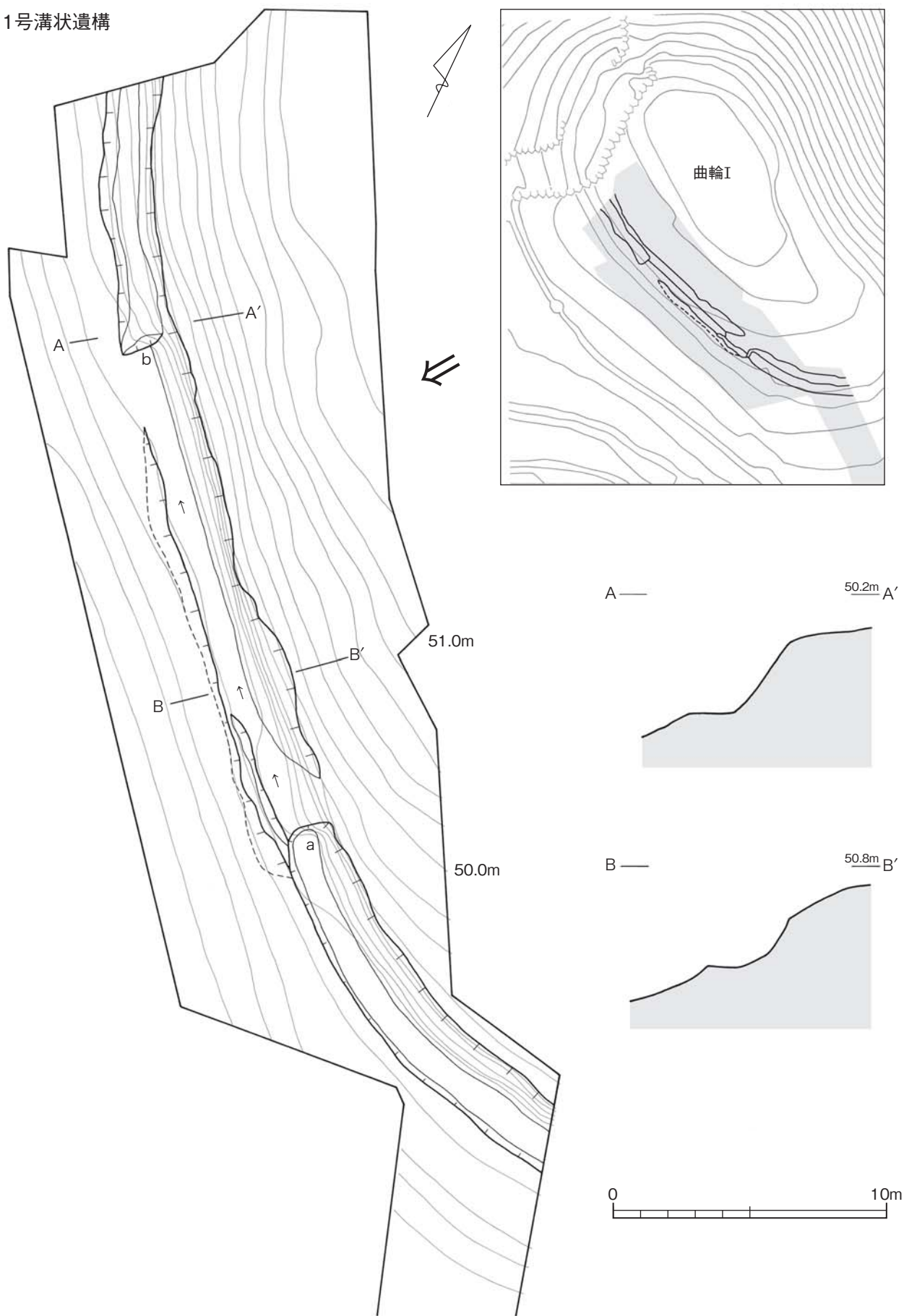


第5図 曲輪I-VI断面図(1/300)

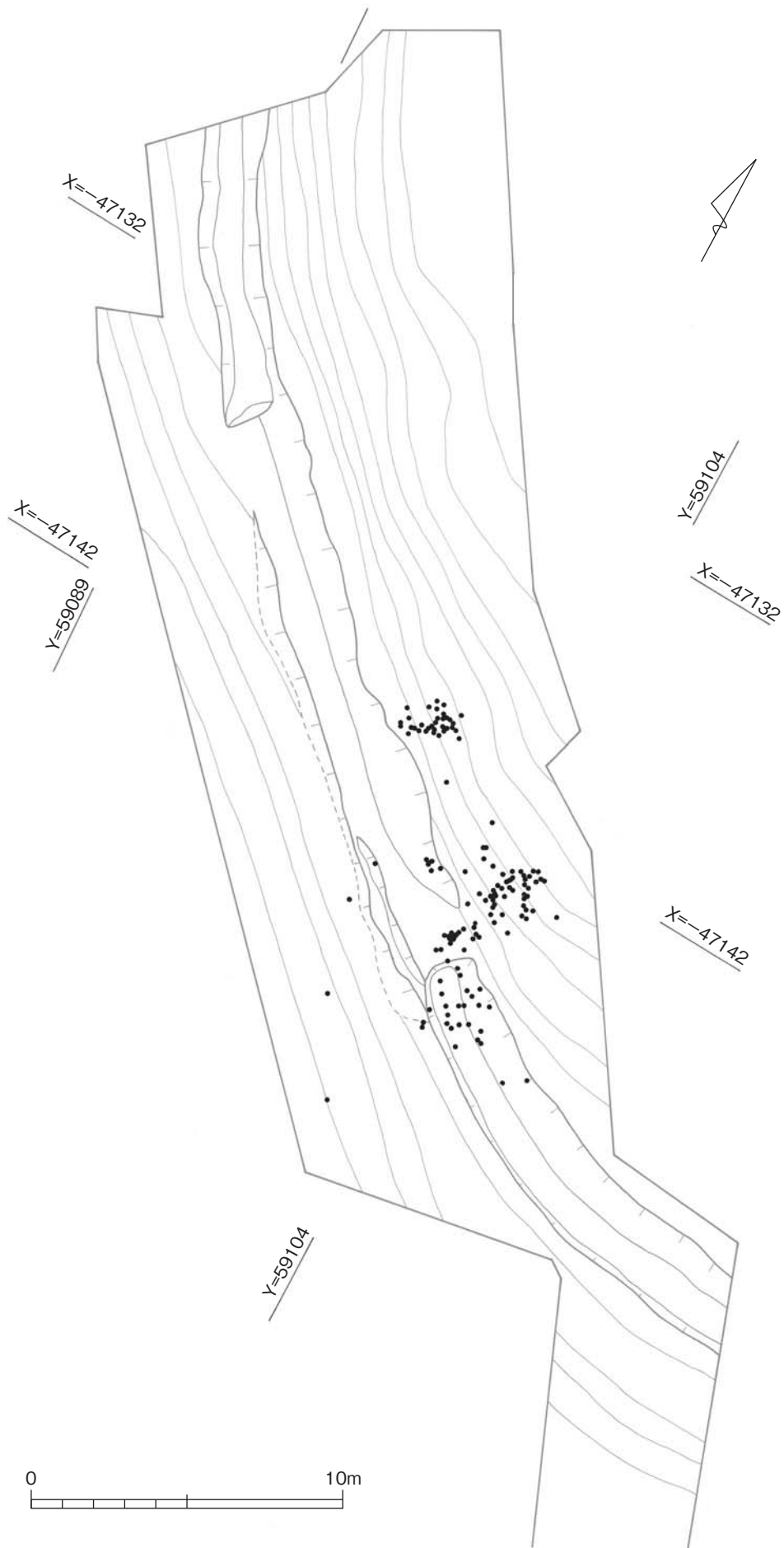


第6図 曲輪縁辺土層断面図(1/40)

1号溝状遺構



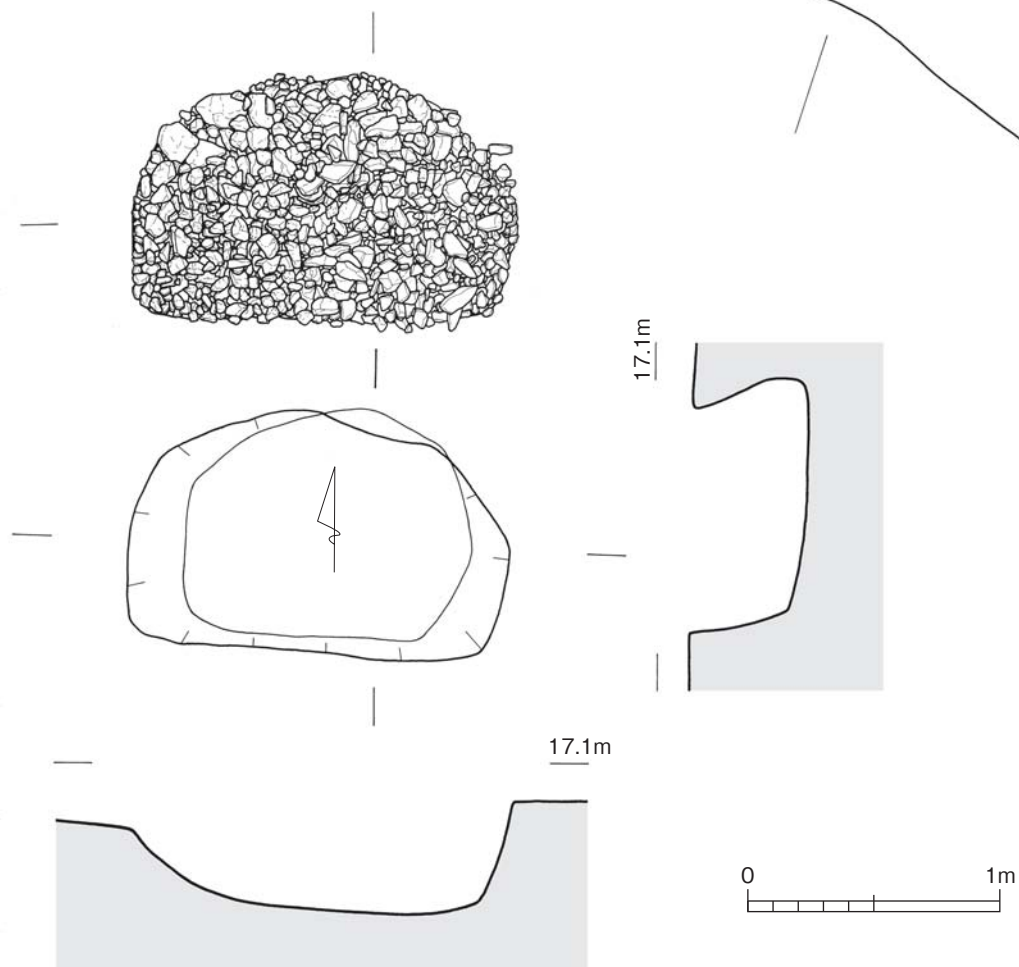
第7図 曲輪II遺構配置図・1号溝状遺構断面図(1/200)



第8図 曲輪II出土遺物分布図(1/200)



第9図 天下城山遺跡曲輪Ⅳ遺構配置図(1/200)



第10図 石組遺構実測図(1/30)

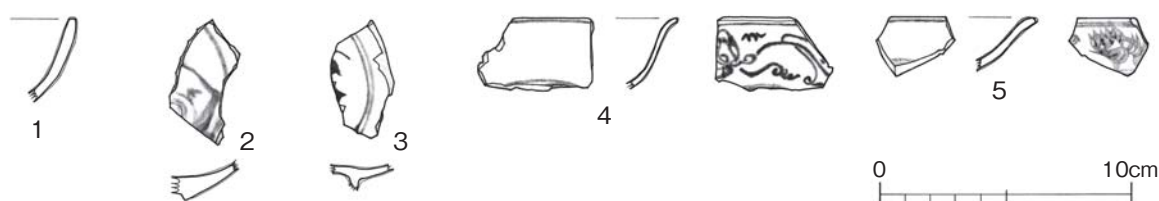
2 遺物

天下城跡に関わると推定される遺物を図11図に掲載した。出土量は少なく、時期の決定が可能と考えられる5点を図示した。曲輪XIVを中心に出土がみられた。

陶磁器

碗(第11図1～5)

1は青磁碗である。2から5は青花で、2は見込みに草花文が見られ外面に1条の界線が見られる。底部は碁笥底である。小野正敏氏のC類に分類される。3はE類に相当する。見込みの二重の圈線内に草花文があり饅頭心である。4・5はB-1類に相当する皿である。4は外面に飛雲文がみられる。5の外面には宝珠文、内面の口縁に1条と見込み部に2条の界線が見られる。15～16世紀代。



第11図 天下城山遺跡出土遺物実測図(1)(1/3)

第5節 その他の時代の遺物

城跡に直接は関わらない遺物として、曲輪の覆土中から出土した遺物を第12図から第16図に示した。遺物の帰属する時代は弥生時代、古墳時代、古代、中近世である。その大半は曲輪XIVよりの出土である。本節ではそれらの遺物について説明を加える。

1 古墳時代の遺物

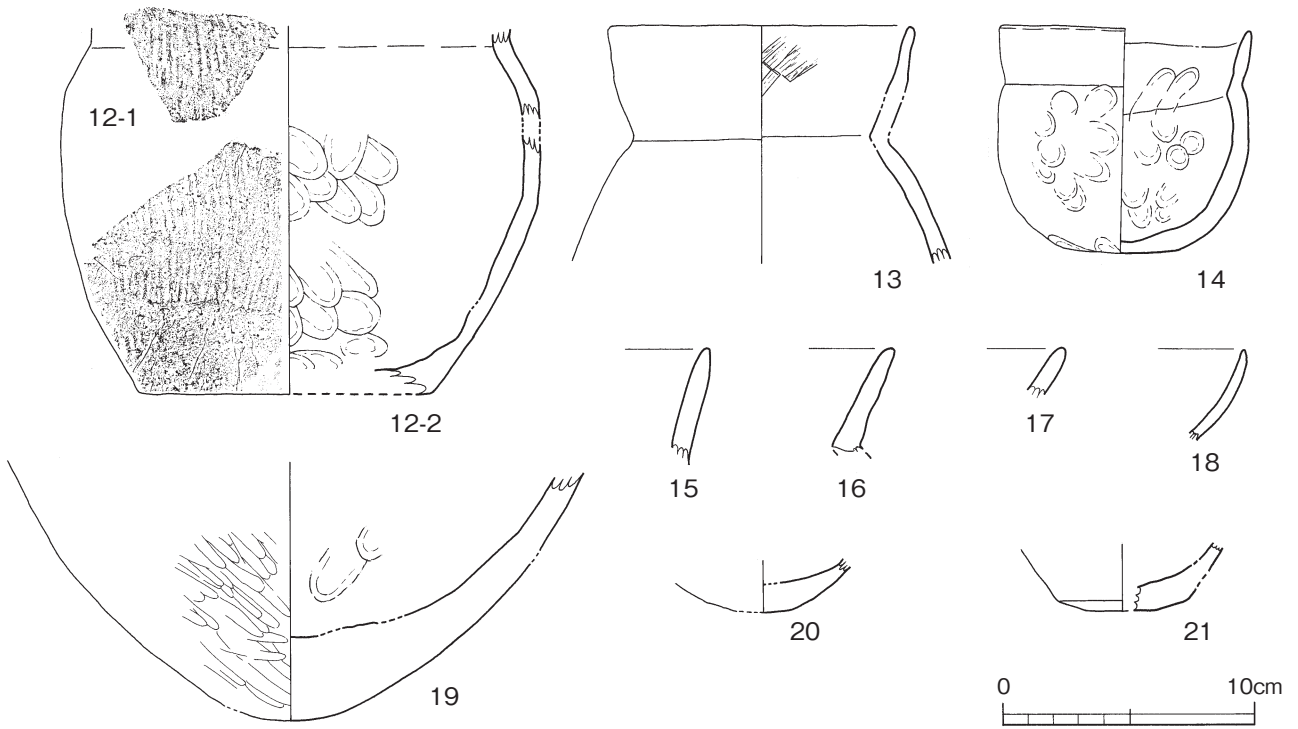
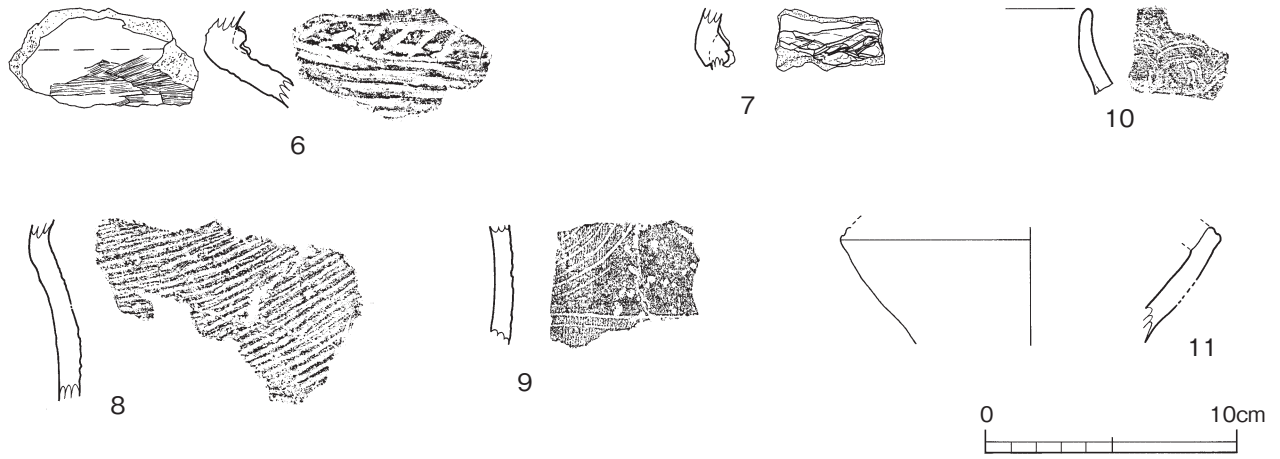
土師器

甕(第12図6～8)

6～8は、土師器の甕である。6・7は頸部に刻目貼付突帯がみられる。8の外器面は横方向の密な叩き調整である。

壺(第12図9～21)

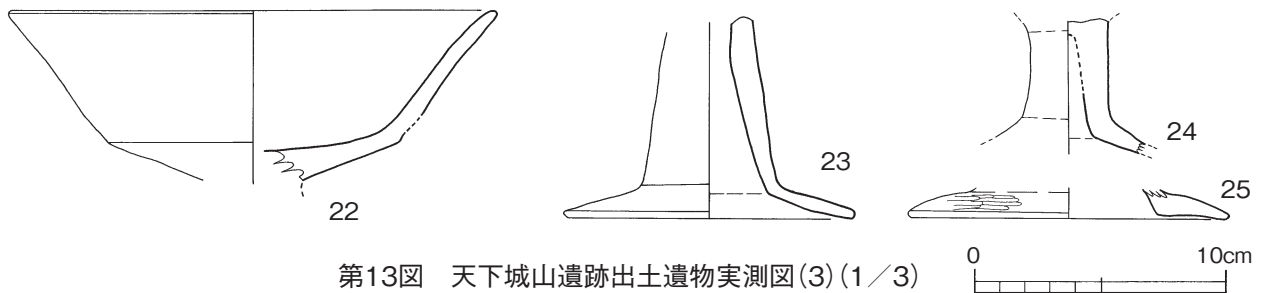
9は外器面に櫛描による重弧文がみられる。胴部が球形をなす下城系の壺とみられる。10・11は弥生時代終末期と推定される二重口縁壺である。10はあいまいな櫛描波状文を有する。12は外面に縦方向の叩きがみられ、内面には明瞭な斜め下から上への指頭痕が観察される。焼成が不良のためか灰褐色を呈する。古代まで下るか。14は小型の壺である。頸部が緩く屈曲し先端のやや尖った口縁に至る。底部はやや平底状を呈する。内外面ともにナデ調整である。15～18は土師器の口縁部片であり、先端部の尖る15・16と丸い17に分類される。18の器壁はうすく碗の可能性もある。19～21は底部である。19は外面にミガキに近い丁寧なナデがみられる。20・21はやや小型であり、21は底部からの立ち上がりに稜をもつ。



第12図 天下城山遺跡出土遺物実測図(2)(1/3)

高坏(第13図22~25)

22は、やや内湾する坏底部から大きく外反して先端部のやや丸い口縁部にいたる。屈曲部外面にははっきりとした稜をもつ。内外面ともにナデ仕上げである。推定口径は約19cmである。23・24は脚柱部から裾部である。23は「ハ」字状に開き裾部が外方に直線的に開く。端部は丸く仕上げられ、内外面ともに調整はナデである。24は、やや小型で円柱状を呈する。22・23は同一個体の可能性が強い。25は裾部が緩やかに外方向へ開き、端部は丸く仕上げられる。内外面ともにミガキ調整である。



第13図 天下城山遺跡出土遺物実測図(3)(1/3)

2 古代から中世の遺物

坏蓋(第14図26~29)

26~29は土師器の坏蓋である。26は宝珠つまみ部である。形状は退化しており宝珠は周囲が押さえられ平坦で擬宝珠状を呈する。風化が著しいが内外面ともにナデ調整と思われる。27・28は天井部から体部であり、体部の外端は緩く外方向に開く。27は天井部と体部の境に段差をもち、28は天井部と体部の境には段差をもたない。27・29は口縁外端部が平坦に仕上げられ内面はナデ調整による稜をもつ。

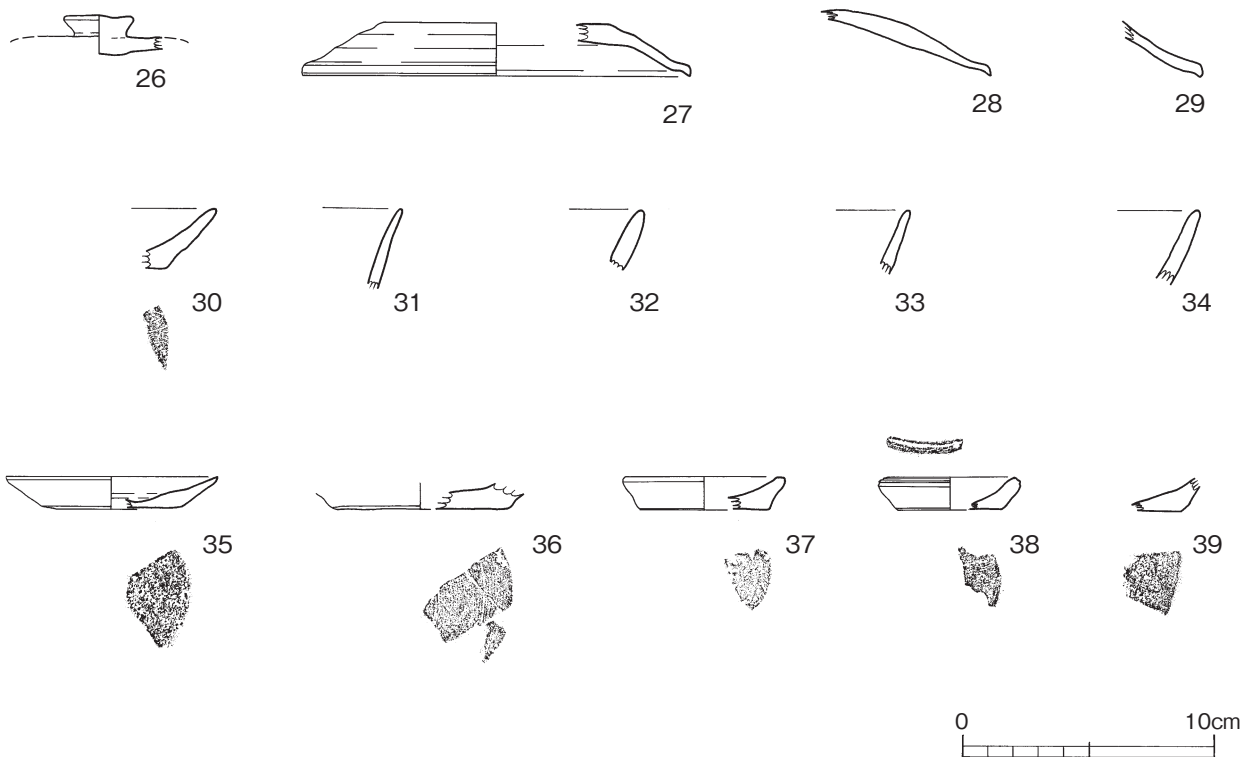
坏(第14図30~34)

30は底部からやや外反気味に立ち上がり、口縁端部はやや尖る。底部切り離しはへら切りである。31~34は坏の口縁部と思われる。端部は30のみやや尖り気味であり、他はすべて丸く仕上げられる。内外面ともにナデ調整である。

皿(第14図35~39)

ここでは、器高が底径の1/3以下のものを皿として扱う。

35~39は中世の小皿である。35は底部からの立ち上がりが直線的で、口縁端部が尖り気味である。底部切り離しはへら切りである。36は糸切り底である。内外面ともに丁寧なナデ仕上げである。37~39は推定口径が5cm程である。底部からやや外反気味に立ち上がり、口縁部は丸く仕上げられる。37、38は底部切り離し形態はへら切りである。39は糸切り底である。



第14図 天下城山遺跡出土遺物実測図(4)(1/3)

須恵器

坏蓋(第15図40~47)

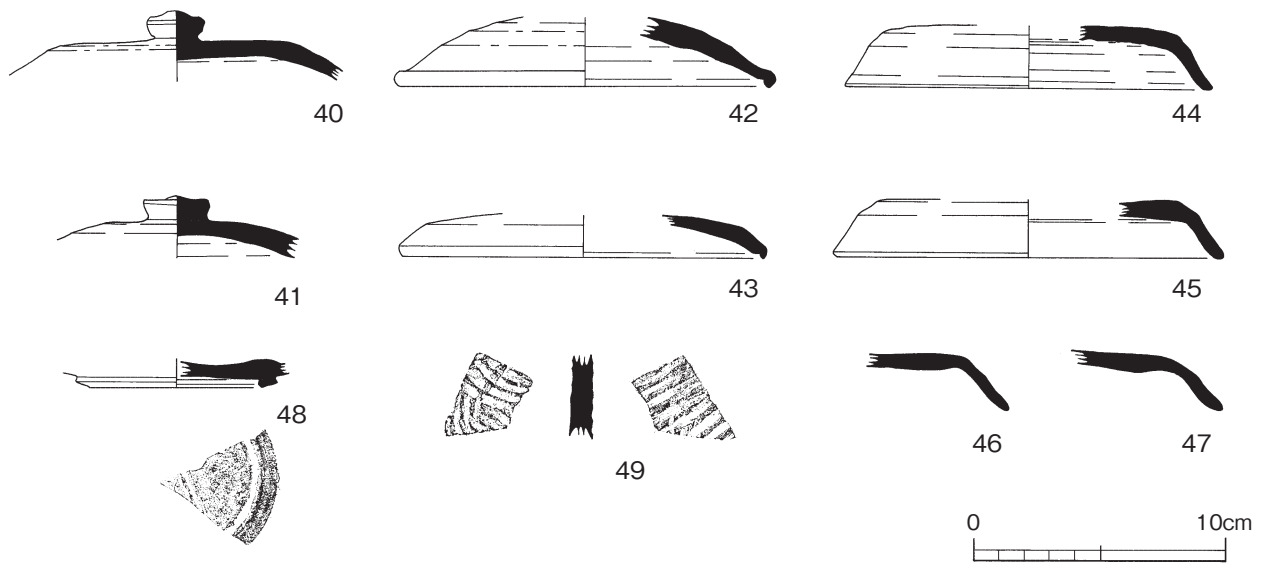
40、41は宝珠つまみから天井部である。40は平坦な天井部から体部にかけて緩やかに外方へ開くと思われる。41は宝珠の中央部周囲をおさえた擬宝珠状である。42・43は天井部から体部が丸みをおびながら口縁にいたり端部はわずかにかえりを有している。44~46は平坦な天井部と体部の境に稜をもち斜め下方に延びる。口縁端部は丸く仕上げられている。

高台付碗(第15図48)

48は高台付碗の高台部である。貼付け高台は面取りされており、断面形は台形状を呈する。畳付の接地は高台内側である。

甕(第15図49)

49は甕の胴部である。外面は平行タタキ内面に放射状タタキが施されている。

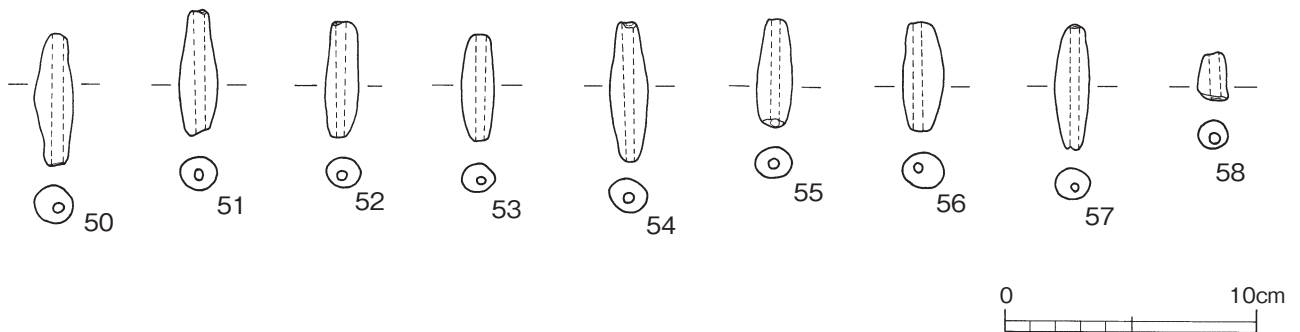


第15図 天下城山遺跡出土遺物実測図(5)(1/3)

3土製品(第16図)

土錘(第16図50~58)

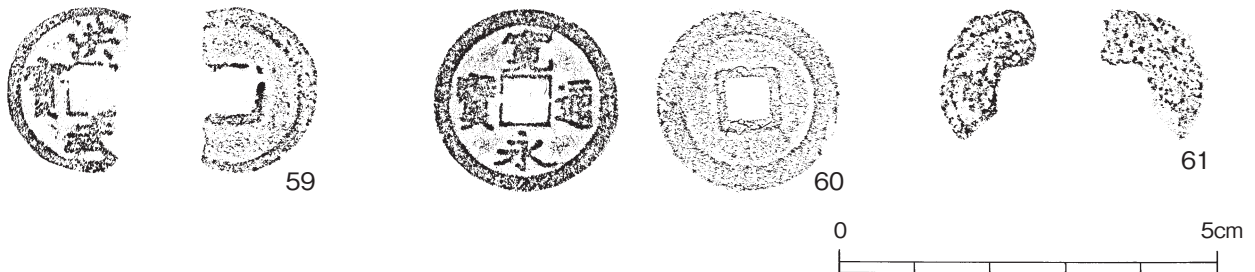
土師質ですべて曲輪XIV(B区)より出土している。なかでも56を除きすべて同じピット(SH2)内から出土している。計測値の詳細は(第3表)を参照されたい。



第16図 天下城山遺跡出土遺物実測図(6)(1/3)

4 銭貨(第17図59~61)

59は曲輪XVのSH3より出土した洪武通宝である。外径約2.2cm、内孔径約0.7cm量目は1.1gである。60は寛永通宝で外径2.3cm、内孔径0.6cm量目は2.5gである。背文は見られない。曲輪IIIより出土した。61は59とともに曲輪XVのSH3の埋土中より出土した。風化著しく銭文不明である。



第17図 天下城山遺跡出土銭貨拓影(1/1)

5 石器(第18図62・63)

62は流紋岩製の砥石である。斜方向の擦痕が観察され使用によるものか中央部が凹字状である。63はチャート性の火打ち石であり、側縁に稜の潰れが認められる。重さ2.7gを計る。

6 玉類(第18図64)

64はB区で出土した碧玉製の玉である。そろばん玉状で孔径3mmの穴が穿たれ、重量は0.8gを計る。



第18図 天下城山遺跡出土遺物実測図(7)(1/2、62は1/3)

第1表 天下城山遺跡出土遺物観察表(1)

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	手法・調整・文様ほか			色調		胎土の特徴	備考		
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面
1	青磁	碗	口縁~体部	曲輪Ⅴ	(6.1)			施釉	施釉	オリーブ灰色(10YR5/2)	オリーブ灰色(10YR5/2)	精良	
2	染付	碗	体部~底部	曲輪Ⅴ				施釉・体部に一条の青線	施釉	明オリーブ灰色(5GY7/1)	緑灰色(7.5GY6/1)	精良	碁筋底
3	染付	高台付碗	体部~底部	曲輪Ⅱ				施釉・高台部露胎	施釉	明青灰色(10BG7/1)	明青灰色(10BG7/1)	精良	
4	染付	皿	口縁~体部	曲輪Ⅴ				施釉	施釉	青灰色(5B6/1)	青灰色(5B6/1)	精良	
5	染付	皿	口縁部~体部	A区				施釉	施釉	明青灰色(5BG7/1)	青灰色(5B6/1)	精良	
6	土師器	甕	頸部	曲輪Ⅴ				横方向の刷毛目刻み目貼付突帯平行叩き	刷毛目	にぶい黄褐色(10YR6/4)	にぶい黄褐色(10YR6/4)	4mm以下の褐灰・黄褐色粒を含む	
7	土師器	甕	頸部	曲輪Ⅱ				横方向のナデ刻み目貼付突帯	ナデ	にぶい黄褐色(10YR6/3)	褐色(5YR6/6)	4mm以下の灰白・褐色粒を含む	
8	土師器	甕	頸部~胴部	曲輪Ⅴ				平行叩き	ナデ	褐色(7.5YR6/6)	褐色(7.5YR6/6)	3mm以下の灰白・褐灰・黒褐色粒を含む	
9	土師器	壺	胴部	曲輪Ⅴ				刷毛目の後ミガキ縦方向の同心円状の沈線文	ナデ	にぶい褐色(7.5YR5/4)	褐色(7.5YR6/6)	3mm以下の褐色粒を含む。5mm以下の灰色粒を含む	
10	土師器	二重口縁壺	口縁部	曲輪Ⅴ				ナデの後櫛描波状文	工具による横ナデ	褐色(7.5YR7/6)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	3mm以下の褐・黒褐・黒色粒を多く含む	
11	土師器	二重口縁壺	複合口縁部	曲輪Ⅴ				工具によるナデ	ナデ	浅黄褐色(10YR8/4)	浅黄褐色(10YR8/4)	3mm以下の褐灰・褐色粒を含む	
12	土師器	甕	頸部~胴部	曲輪Ⅲ				縦方向の平行叩き	ナデ	にぶい黄褐色(10YR7/3)	灰黄色(2.5YR6/2)	3mm以下の褐・褐灰・灰白・黒褐色粒を含む	
13	土師器	甕	頸部~胴部	曲輪Ⅲ		(11.8)		斜方向の平行叩き	ナデ指頭痕	にぶい黄褐色(10YR6/3)	灰黄色(2.5YR6/2)	3mm以下の褐・褐灰・灰白・黒褐色粒を含む	
13	土師器	甕	口縁~胴部	曲輪Ⅴ	(11.8)			横方向のナデ	工具によるナデ	褐色(7.5YR6/6)	にぶい褐色(7.5YR6/4)	4mm以下の灰白・褐灰・黒褐色粒を含む	
14	土師器	小型壺	口縁~底部	曲輪Ⅴ	(9.81)	(4.6)	(9.02)	ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕	褐灰色(10YR6/1)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	4mm以下の浅黄褐色粒を含む。4.5mm以下の褐色・浅黄褐色粒を含む	
15	土師器	甕	口縁	曲輪Ⅴ		(4.6)		横ナデ	横ナデ	褐色(5YR6/6)	褐色(5YR6/6)	4mm以下の灰白・褐灰色粒を含む	
16	土師器	甕	口縁	曲輪Ⅴ				横ナデ	横ナデ	浅黄褐色(7.5YR8/4)	浅黄褐色(10YR8/4)	4mm以下の褐灰・褐色粒を含む	
17	土師器	皿	口縁	曲輪Ⅴ				横ナデ	横ナデ	褐色(5YR6/6)	にぶい褐色(7.5YR6/4)	3mm以下の灰白・褐灰色粒を含む	
18	土師器	碗	口縁	曲輪Ⅴ				ミガキ	ナデ	明黄褐色(10YR7/6)	明黄褐色(10YR7/6)	2mm以下の褐灰・褐色・黒色光沢粒を含む	外面に黒変あり
19	土師器	甕	胴部~底部	曲輪Ⅴ		(6.2)		斜方向のミガキ工具によるナデ	工具によるナデ・指頭痕	にぶい褐色(7.5YR6/4)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	3mm以下の灰白・褐・黒褐・黒色・透明光沢粒を含む	
20	土師器	壺	底部	曲輪Ⅴ		(2.1)		丁寧なナデ	工具によるナデ	にぶい黄褐色(10YR6/4)	明黄褐色(10YR6/6)	4mm以下の灰白・褐色粒を含む	
21	土師器	坏	底部	曲輪Ⅱ		(5.2)		粗いナデ	粗いナデ・指頭痕	にぶい褐色(7.5YR6/4)	褐色(5YR6/6)	3.5mm以下の褐・赤褐色粒を含む。6mm以下の黄褐色粒を含む	
22	土師器	高坏	坏部	曲輪Ⅴ	(19.25)			横ナデ	ナデ	浅黄褐色(10YR8/4)	褐色(5YR7/6)	4mm以下の灰白・褐・黒褐色粒を含む	
23	土師器	高坏	脚部~裾部	曲輪Ⅴ			裾部径11.6	丁寧なナデ	裾部に工具によるナデ	明褐色(7.5YR5/8)	明褐色(10YR5/8)	1mm以下の白色粒を含む	
24	土師器	高坏	脚部~裾部	曲輪Ⅴ				ナデ	ナデ	浅黄褐色(2.5Y7/4)	浅黄褐色(2.5Y7/4)	1mm以下の白・褐色粒を含む	
25	土師器	高坏	裾部	曲輪Ⅴ			裾部径(12.7)	ナデ・ミガキ	工具によるナデ	黄褐色(2.5Y5/6)	黄褐色(2.5Y5/6)	3mm以下の褐色粒を含む	外面に黒変あり 残存率1/6
26	土師器	坏蓋	つまみ	曲輪Ⅲ				ナデ	ナデ	浅黄褐色(10YR8/4)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	2mm以下の褐灰・褐・黒褐色粒を含む	
27	土師器	坏蓋	口縁~天井部	曲輪Ⅲ	(15.3)	9		ヘラ削り・回転ナデ	ナデ	褐色(7.5YR6/8)	にぶい褐色(7.5YR6/4)	1~2mmの黒色粒を多く含む	残存率1/4
28	土師器	坏蓋	体部	曲輪Ⅲ				ヘラ削り・回転ナデ	ナデ	浅黄褐色(10YR8/4)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	3mm以下の褐色粒を含む	
29	土師器	坏蓋	口縁~体部	SE1				回転ナデ	ナデ	明赤褐色(5YR5/6)	明赤褐色(5YR5/6)	1mm以下の黒色粒を含む	
30	土師器	坏	口縁~底部	曲輪Ⅴ				ナデ	横ナデ・ナデ	褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR6/6)	1mm以下の黒色光沢針状・褐色粒を含む	底部にヘラ記号
31	土師器	坏	口縁	曲輪Ⅴ				工具による横ナデ	工具による横ナデ	褐色(5YR6/8)	褐色(5YR6/8)	5mm以下の黄橙・褐灰色粒を含む	
32	土師器	坏	口縁部	曲輪Ⅱ				工具によるナデ	ナデ	明褐色(10YR5/6)	明赤褐色(5YR5/6)	3mm以下のにぶい褐色粒を含む。4mm以下の赤褐色粒を含む	
33	土師器	坏	口縁	曲輪Ⅵ				横ナデ	ナデ	灰白色(2.5Y8/2)	灰白色(2.5Y8/2)	2mm以下の褐灰・黒褐色粒を含む	
34	土師器	坏	口縁	A区				横ナデ・ミガキ	横ナデ	明黄褐色(10YR7/6)	明黄褐色(10YR7/6)	3mm以下の橙・褐灰・褐色粒を含む	
35	土師器	皿	口縁~底部	曲輪Ⅱ		(5.5)		回転ナデ	回転ナデ	褐色(5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	3mm以下の灰白・褐灰・褐色粒を含む	
36	土師器	皿	口縁~底部	曲輪Ⅴ		(6.6)		横ナデ	ナデ	灰褐色(7.5YR6/2)	褐色(7.5YR7/6)	1mm以下の黒褐色粒を含む	糸切り底残存率1/6
37	土師器	皿	口縁~底部	A区	(6.2)	(5.0)	1.3	回転ナデ	回転ナデ	褐色(5YR7/8)	褐色(5YR7/8)	1mm以下の透明光沢針状・黒色光沢針状を含む	糸切り底
38	土師器	皿	口縁~底部	曲輪ⅤSH2	(5.00)	(4.4)	(1.3)	ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色(10YR6/4)	褐色(5YR6/6)	1mm以下の褐灰・赤褐色粒を含む	ヘラ切り底残存率1/6
39	土師器	皿	胴部~底部	曲輪Ⅱ				ナデ	ナデ	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	2mm以下の茶褐・褐灰色粒を含む	

第2表 天下城山遺跡出土遺物観察表(2)

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	手法・調整・文様ほか			色 調		胎土の特徴	備考		
					口径	底径	器高	外 面	内 面			外 面	内 面
40	須恵器	坏蓋	つまみ～天井部	曲輪Ⅲ	つまみ部 23.0			回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ (5Y4/2)	灰色 (5Y4/1)	1mm以下の灰白・黒褐色粒を含む。	
41	須恵器	坏蓋	つまみ～天井部	曲輪Ⅲ				回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 (2. 5Y7/2)	灰黄色 (2. 5Y6/2)	1mm以下の黄褐色粒を含む。 6mm以下の褐灰色粒を含む。	
42	須恵器	坏蓋	体部～口縁部	曲輪Ⅲ	(14. 6)			ヘラ削り・回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 (2. 5Y6/2)	にぶい黄色 (2. 5Y6/3)	1mm以下の灰白・褐・黒褐色粒を含む。	残存率1/6
43	須恵器	坏蓋	体部～口縁部	曲輪Ⅲ	(14. 3)			回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄色 (2. 5Y6/3)	にぶい黄色 (2. 5Y6/3)	精良	残存率1/4
44	須恵器	坏蓋	口縁～天井部	曲輪Ⅲ	(14. 5)			回転ナデ	回転ナデ	灰白色 (5Y7/1)	灰色 (5Y6/1)	1mm以下の褐灰・褐・黒褐色粒を含む。	残存率1/5
45	須恵器	坏蓋	体部～口縁部	曲輪Ⅲ	(15. 0)			回転ナデ	回転ナデ	灰白色 (5Y8/1)	灰白色 (5Y6/1)	1mm以下の灰黄・黒褐色粒を含む。	
46	須恵器	坏蓋	口縁～天井部	D区				回転ナデ	回転ナデ	灰白色 (2. 5Y7/1)	灰黄色 (2. 5Y7/2)	1mm以下の明褐・黒褐色粒を含む。 2mm以下の白色光沢粒を含む	
47	土師器	坏蓋	体部～口縁部	曲輪Ⅲ				回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 (5Y6/2)	灰色 (5Y6/1)	精良	
48	須恵器	高台付坏	底部	曲輪Ⅲ SE1		高台部 (8. 0)		回転ナデ	回転ナデ・板状圧痕	灰色 (7. 5Y6/1)	灰色 (7. 5Y6/1)	1mm以下の灰白・黒褐色粒を含む。	
49	須恵器	壺	胴部	曲輪Ⅲ SE1				平行叩き	同心円叩き	にぶい黄色 (2. 5Y6/3)	暗灰黄色 (2. 5Y5/2)	1mm以下の灰白・褐灰色粒を含む。	

第3表 天下城山遺跡出土土錘計測表

遺物番号	器種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	孔径(cm)	備考
50	土錘	曲輪Ⅳ SH2	5.20	1.55	1.50	8.50	0.4	SH2出土
51	土錘	曲輪Ⅳ SH2	4.95	1.50	1.30	8.40	0.5	SH2出土
52	土錘	曲輪Ⅳ SH2	4.55	1.30	1.20	6.40	0.4	SH2出土
53	土錘	曲輪Ⅳ SH2	4.20	1.30	1.15	5.40	0.4	SH2出土
54	土錘	曲輪Ⅳ SH2	5.55	1.55	1.35	8.80	0.4	SH2出土
55	土錘	曲輪Ⅳ SH2	4.27	1.43	1.22	6.60	0.4	SH2出土
56	土錘	曲輪Ⅳ	4.35	1.67	1.50	9.50	0.3	
57	土錘	曲輪Ⅳ SH2	4.95	1.35	1.25	6.70	0.4	SH2出土
58	土錘	曲輪Ⅳ SH2	1.90	1.25	1.20	2.30	0.4	SH2出土 半折

第4表 天下城山遺跡出土銭貨観察表

遺物番号	銭貨名	出土地点	銭径(cm)	銭孔径 (cm)	量 目 (g)	国名年号	鑄造年号間	背文
59	洪武通宝	曲輪Ⅳ SH3	2.2	0.7	1.1	明	1368-93	
60	寛永通宝	曲輪Ⅲ	2.3	0.6	2.5	寛永	1636-59	
61	銭文不明	曲輪Ⅳ SH3	(2.2)	-	0.6	-		

第5表 天下城山遺跡出土石器・玉類計測表

遺物番号	器 種	出土地点	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	石 材	備 考
62	砥石	曲輪Ⅳ	6.0	3.0	3.0	53.5	流紋岩	
63	火打石	曲輪Ⅳ	2.7	1.7	0.8	2.7	チャート	
64	管玉	曲輪Ⅳ	1.5	0.8	0.7	0.8	碧玉	

第6節 まとめ

今回の調査で、得られた知見と周辺の城郭について触れることでまとめにかえたい。

天下城跡周辺の中世城郭は『延陵世鑑』中に井上城、西階城、松尾城の記載がみられ、中世縣を領有した土持氏や伊東氏に関連した城郭が点在している。天下城の存続時期もこれらに併行する時期が考えられ、地元でも「城山^{じよんやま}」としての伝承があるものの文献等にはその名を見いだすことができずその実体については不明な点が多い。しかし、これまでの地表面観察や縄張り調査の成果から、堀切や曲輪といった施設が認識されており、城跡であることは『延岡市内遺跡詳細分布調査報告書²⁾』や『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書 I・II^{3) 4)}』にも記載がみられるとおりである。

今回の調査で、曲輪XIVで硬化面を有するピットが検出され、掘立柱建物として復元できるものはなかったが、埋土中から土錘や銭貨(洪武通宝)、土師皿などが出土している。また、主郭部分にあたと推定される曲輪Iでは後世の所作による改変のため遺構の存在は認められなかったが、曲輪IIとの間に切岸状に縁辺を加工し、その下部に幅約1～2m、深さ約1m、断面形がU字状を呈する1号溝状遺構(SE1)を巡らせていることが確認された。1号溝状遺構(SE1)は曲輪Iにつながる緩やかなスロープ状を呈し虎口状の空間をもつ。遺構は基盤層まで掘り込まれており、それ以後の普請は認められなかった。1号溝状遺構と虎口の関わりに関して、国立歴史民俗博物館の千田嘉博氏(現、奈良大学)より、溝は古手の形式であり、スロープもしっかりと作られていることから15～16世紀の可能性が十分あり、陣城の遺構としては古いものではないかと、ご指導いただいた。

今回の調査対象地は、天下城の主郭を含めて北側の部分にあたるが、遺構が確認されたのは曲輪Iから曲輪IIにかけてと曲輪XIVのみであり、中世の陶磁器等の出土がみられたのは曲輪XIVが中心であった。しかし、少数ではあるが他の曲輪からも土師器片が確認されていることから、城として機能していた時期がある程度絞り込めるのではないかと考えられる。また、主郭とその周囲についてはしっかりとした施設を有していることも明らかになり天下城跡の性格の一端を捉えることができた貴重な成果であるといえよう。今後、南側に広がる城域や堀切などの施設(調査区外)の縄張りとは合わせて検討を深めていく必要がある。

〈註〉

- 1) 日向郷土史料集刊行会『日向郷土史料集』第2巻 1962
- 2) 延岡市教育委員会『市内遺跡詳細分布調査報告書』延岡市文化財調査報告書第16集 1996
- 3) 宮崎県教育委員会『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書 I 地名表・分布地図編』1998
- 4) 宮崎県教育委員会『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書 II 詳説編』1999

〈参考文献〉

- 1) 延岡市教育委員会『延岡市の文化財』2001
- 2) 延岡市教育委員会『天下城山遺跡(第1次)』延岡市文化財調査報告書第22集 2000
- 3) 千田嘉博 小島道裕 前川要『城館調査ハンドブック』新人物往来社 1993
- 4) 白瀬永年編『延陵世鑑』1988



天下城山遺跡遠景(北より)



天下城山遺跡調査区全景(調査前)



天下城跡主郭部曲輪I(北西より)



天下城跡主郭部曲輪I(手前は南方古墳40号墳)



主郭部曲輪Iより西階城を望む



曲輪II～V(南より、奥は城ヶ鼻)



虎口①へ続く里道



堀切②地点里道



虎口①(西より)



天下城跡西側、黒越寺推定地



天下城山遺跡調査区全景(北より)



天下城山遺跡調査区全景(西より)



1号溝状遺構土層断面(西より)



1号溝状遺構遺物出土状況(南より)



1号溝状遺構完掘状況①(南より)



1号溝状遺構完掘状況②(西より)



曲輪II、虎口状の遺構(南より)



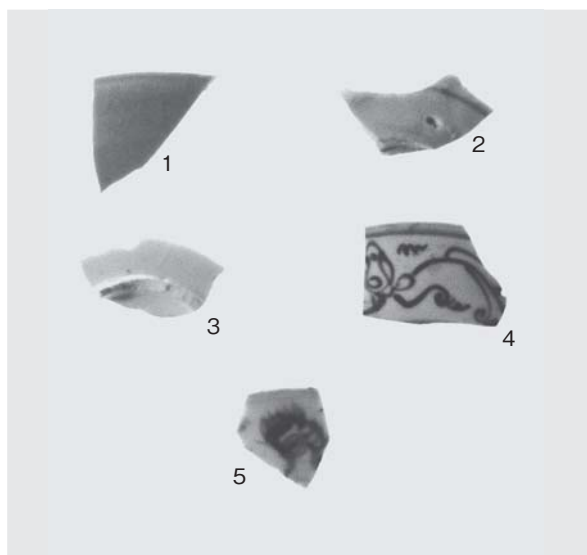
曲輪IIから曲輪Iをみる(西より)



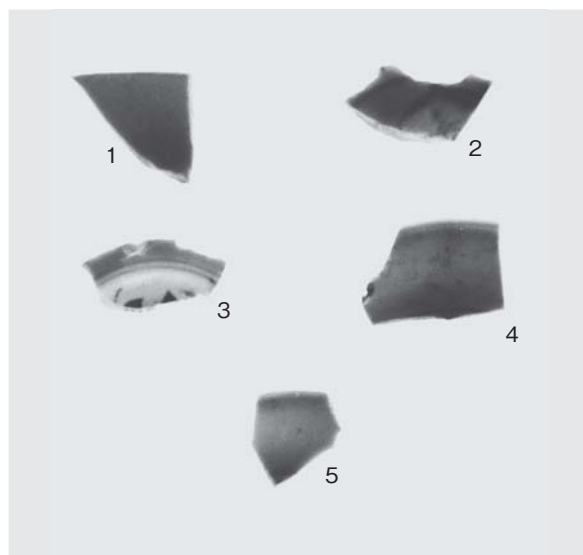
曲輪XVピット群検出状況(北西より)



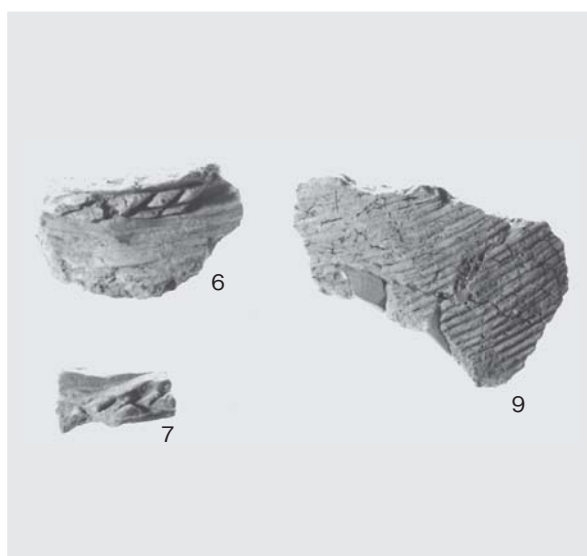
曲輪XV石組遺構(北より)



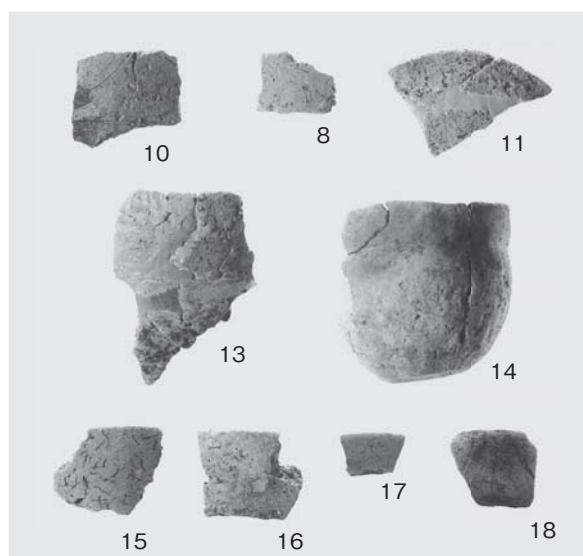
出土陶磁器(外面)



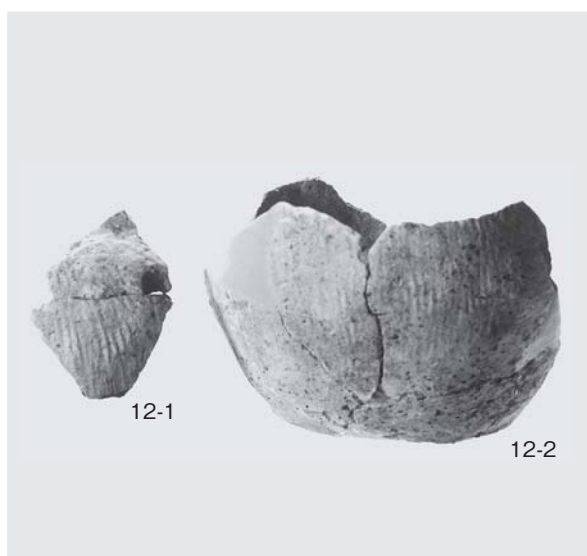
出土陶磁器(内面)



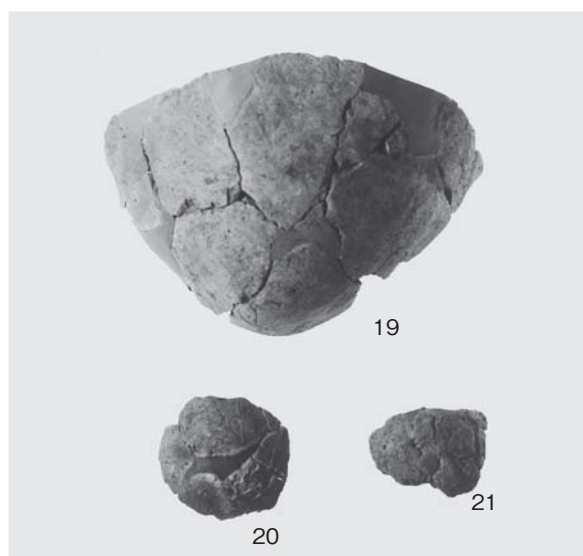
出土土師器(甕)



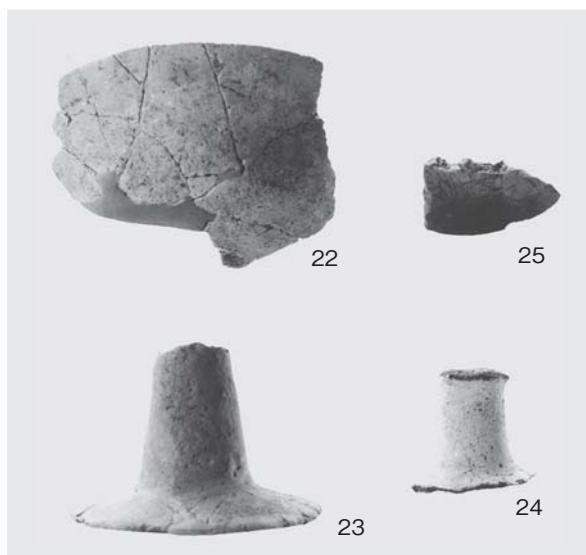
出土土師器(甕・壺)



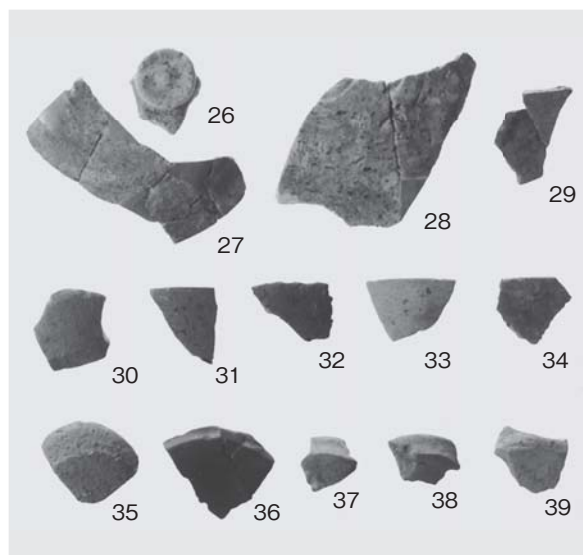
出土土師器(壺)



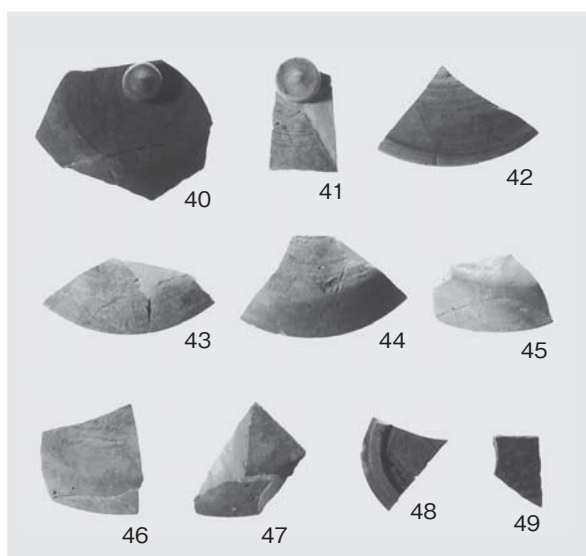
出土土師器(底部)



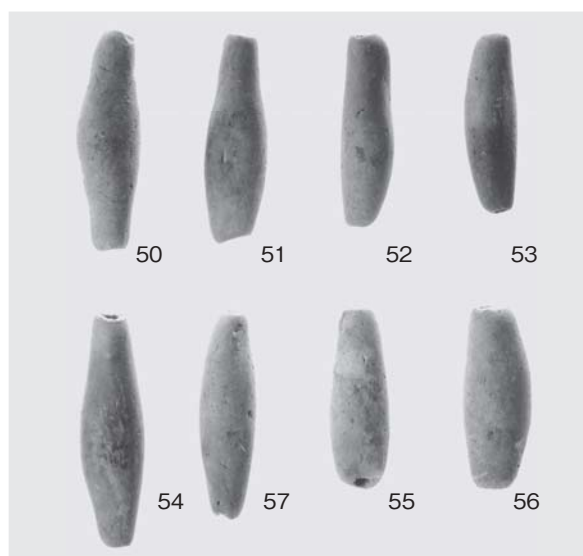
出土高坏



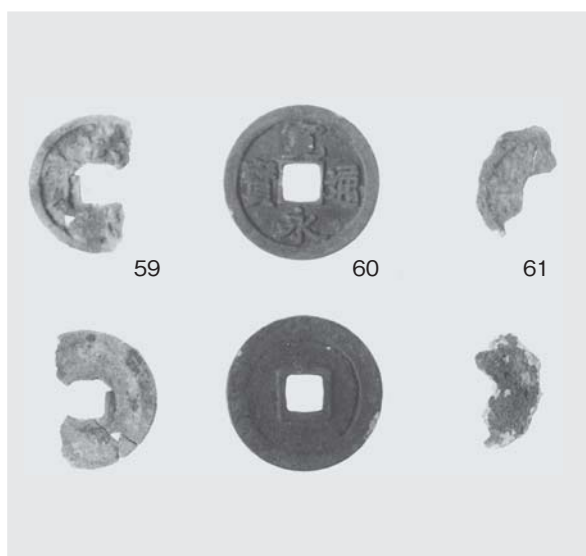
出土土師器(坏盖·坏·皿)



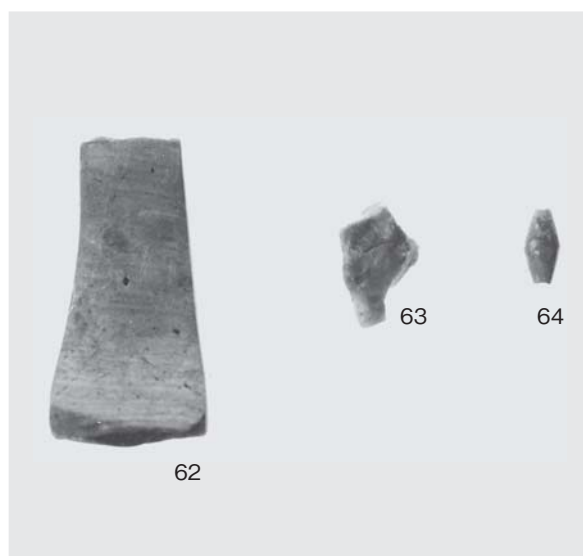
出土須惠器(坏盖·坏)



出土土锤



出土钱货



出土石器·玉类(砥石·火打石·管玉)

報告書抄録

フリガナ	イマイノダイニ アモリジョンヤマ					
書名	今井野第2遺跡・天下城山遺跡					
副書名	一般国道10号延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次	第1集					
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	第135集					
編集者名	橋本英俊					
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター					
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地					
発行年月日	2006年10月20日					
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
イマイノダイニイセキ 今井野第2遺跡	延岡市天下町 1716 ほか	32°34'00" 付近	131°37'31" 付近	2002.06.11 } 2002.08.13	870㎡	道路建設
アモリジョンヤマイセキ 天下城山遺跡	延岡市天下町字 天下中須ほか	33°45'20" 付近	131°37'02" 付近	2002.12.25 } 2003.03.27 2003.05.08 } 2003.09.11	18,000㎡	道路建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
散布地 (今井野第2遺跡)	縄文時代早期	集石遺構 35 基		無文土器 こぶ文土器 押型文土器 石鏃・剥片	無文土器 こぶ文土器	
城館跡 (天下城山遺跡)	中世・近世	溝状遺構・ピット・ 虎口状遺構		土師器・須恵器・ 弥生土器・土錘・ 洪武通宝	中世天下城跡 の調査	

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第135集

今井野第2遺跡 天下城山遺跡

一般国道10号延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成18年10月20日
発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212
宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印刷 株式会社 長崎印刷
〒889-4413
宮崎県西諸県郡高原町大字後川内18-2
TEL 0984-42-1069 FAX 0984-42-1330
